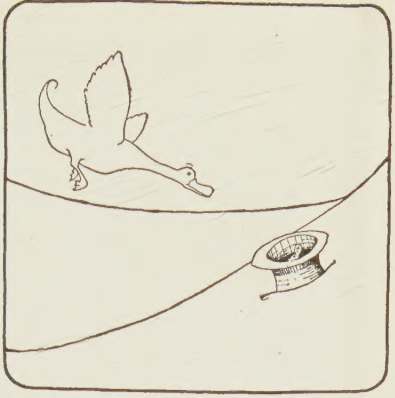
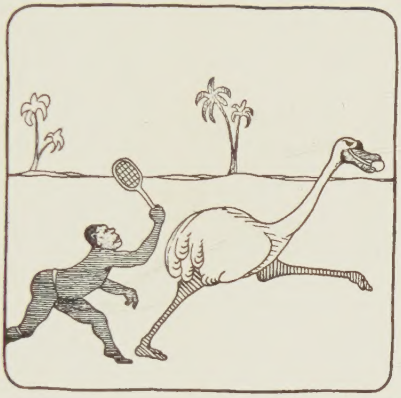
ドリトル先生月へゆく

ドリトル先生物語全集 8

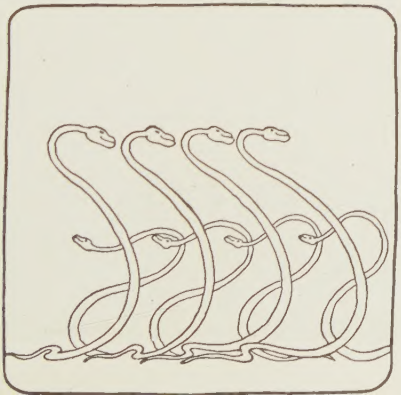
ロフティング

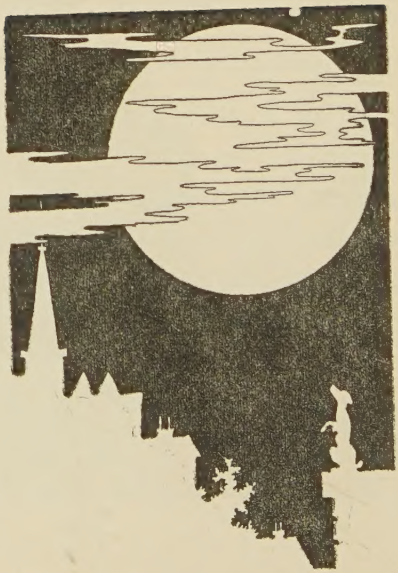
井伏鱒二訳





10
MILES
TO





ドリトル先生月へゆく

ドリトル先生物語全集 8

ロフティング

井伏鱒二訳

岩波書店

Digitized by the Internet Archive
in 2025

https://archive.org/details/drdolittleinmoon0000hugh

DR. DOLITTLE IN THE MOON

by Hugh Lofting

Copyright © 1928 in England
by Hugh Lofting
Japanese book rights arranged
through Curtis Brown Ltd., London
and Charles E. Tuttle Co., Tokyo
さし絵複製権所有

もくじ

17 「会議」のことを知る 131

18 議長 141

19 月の巨人 150

20 先生と巨人 162

21 どうしてオーソ・ブラッジは月世界へきたか 171

22 どうして月の住人は先生のことを伝えきいたか 181

23 月世界の王様になった人 190

24 先生、月世界に診療所をひらく 199

25 ふたたびパドルビーへ 209

さし絵 ヒュー・ロフティング

装幀 江森瑛子

1 月世界へ着陸 9
2 色とにおいの世界 16
3 水がない！ 23
4 英雄チーチー 33
5 高原で 39
6 月の湖 46
7 巨人の足あと 55
8 うたう木 62
9 植物語の研究 70
10 月世界のマジェラン 76
11 月世界一周の準備 82
12 おしゃれのユリ 89
13 さまざまのにおいを出す花 96
14 花にも鏡を 104
15 新しい着物をつくる 112
16 チーチーの語る月の伝説 121

ドリトル先生月へゆく

ヒュー・ロフティング
井伏鱒二訳

1　月世界へ着陸

私は、医学博士ジョン・ドリトル先生の秘書、トーマス・スタビンズというもので、「沼のほとりのパドルビー」という町の靴屋、ジェーコブ・スタビンズのせがれですが）いまから、私たちが月世界に冒険旅行した話を書くにあたって、どんなふうに書いたらよいか、じぶんでも、じつにこまってしまいます。

あの、胸をわくわくさせた数週間の、いろいろさまざまなできごとを、いちいち日を追い時間を追って思い出すのは、なかなか容易なことではありません。なるほど、私は先生のために、何冊もの手帳に、どっさりと、さまざまな記録をとりました。けれど、たいていそれは専門の科学的なことがらの記録です。でも、これから私のお話しする物語は、科学者のためのではなく一般の読者のためのものでなくてはなりません。私がじつにこまるというのは、そのためです。

つまり、この物語は、いろんなふうに話せます。人々が旅行について知りたいと思うことがらは、人によっていろいろとちがいます。あるとき私は、ジップならいい知恵をかしてくれるだろうと思ったので、下書きの原稿を二、三章読んで、ジップの意見をたずねました。すると、ジップは、私たちが月世界でネズミを見たかどうか、そんなことにしか興味をもっていないのがわかりました。それについても私は、はっきりした答えができないことに気がつきました。月世界でネズミを見たおぼえはないのですが、やはり、すこしは

いまになってみると、私はまったく目のとどかない人間だったと思います。この探険旅行の物語を、一般の読者におもしろくお話しするためにも、ぜひとも見ておかなければならないさまざまのことがらを、何一つおぼえていないのです。

もちろん、これは注意力の問題です。人間の注意力はバターのようなもので、ある程度まではうすくのばせますが、それ以上はうすくなりません。あまり広くのばしたら、そのなかのことがらが頭にのこらなくなってしまいます。ところが、月世界では目のさめているあいだじゅう、目にも耳にも頭にも、数かぎりない新しいことが押しよせてくるのですから、すこしでもはっきりした記憶がのこっているとしたら、むしろそのほうがふしぎです。

月の印象を書くにあたって、いちばんの糸口になりそうに思われるのは、私たちを月世界へつれて行ってくれたジャマロ・バンブルリリイというあの大きな大きなガ(蛾)です。けれど、いま、この物語を書くにあたって、ジャマロが手近なところにいないので、私は、ジップやガブガブや私の母やマシューやそのほかの人の、めいめいの注文は考えず、じぶんのすきなように話してゆくことにきめました。いずれにしても、この物語は不完全なものにすぎません。それでもかまわない、とにかく思い出せるかぎり、一歩一歩と話してゆくほかはないでしょう。まず私は、かがやく月を間近に見て、大きな大きなガが、飛んでいたところから話をはじめます。私たちは胸をときめかせながら、ガの大きな背中にしがみついていたのです。

いたかもわからない。——すくなくも、何かネズミに似たような生きものが、たしかに、いたにはちがいないようにも思います。

そこで私は、ガブガブにたずねてみました。ガブガブは、私たちがおもにどんな野菜を食べていたか、そんなことばかりきこうとするのです。アヒルのダブダブは、私の苦心を鼻で笑って、ブタにそんなことをきくなんて、ばからしい話だといいました。私はまた、私の母にもききましたが、母は、下着がぼろぼろになったとき、どうしたかとか——そのほか、私たちの暮らしかたについて、こまごましたことばかり知ろうとして、それはたいてい、私に返事のできかねるようなことでした。つぎに私は、マシュー・マグのところへゆきました。マシューの知りたいことがらは、私の母やジップのいったことよりも、もっとふるっているのです。月には店屋が何軒あるか？　犬やネコは、どんなふうだった？　この善良なネコ肉屋は、月世界というものは、パドルビーの町やロンドンの下町などにくらべ、たいしてちがわないところだと思っているようでした。

そんなわけで、月世界について、どんなことを人が知りたがっているかしらべても、あまり役には立ちませんでした。みんながいちばん知りたがっていることは、あいにく、私のほうで話してきかせることができません。それにつけて、私はじぶんがドリトル先生の秘書になりたいと志し、はじめて先生の家に伺ったときのことを思い出します。そのとき、オウムのポリネシアが、「あなたは、よく目のとどく人ですか？」と私にききました。私は、いつだって注意ぶかいと思っておりました。すくなくとも、かなりの程度には。でも、

私たちは飛びおりました。

ル先生は気にかけませんでした。先生は、はるか上空から一本の木を見つけたので、やがては水や植物や生きものを見つけることができるだろうと安心していました。

ガは最後に、地上六メートルほどのところまでおりてゆくと、ひろげたつばさをそのままにして、大きなタコのように、ふわりと砂の上におりて、まず、ピョンピョンと飛んで、つぎに、すこしばかり走ったと思うと、速度をおとして、ぴたりととまりました。

私たちは月世界に着陸したのです！

もうこのときまでに、私たちはいくらか新しい空気になれるだけのチャンスがありました。けれど、先生はそのますぐには「上陸」しないで、私たちを運ん

ガは、これから着陸しようとする土地のようすを、くわしく心得ているようでした。それは、だれの目にもあきらかでした。ガは、しばらくのあいだ、するすると輪をえがきながら飛んでいましたが、やがて頭をぐっとさげ、丘にかこまれた狭い谷間に向け、羽をひろげた大きなからだをさげてゆきました。近づくにつれて、その谷間には、かわいた砂原のあることがわかりました。

まず、まわりの丘が異様な形をしているのが目につきました。やがて、この地方の山は、(手前に見える低い丘の向こうに、高い山波が、緑色をおびたうす明りのなかにそびえているのが見えてきましたが)みな同じように奇妙な特徴をもっていることがわかりました。てっぺんが切りとられ、すり鉢の底のようになっているのです。あとで先生は私に、この山は死火山だと説明してくれました。むかしは、これらの山は、たいていみんな火を吹き溶岩を吹き出していたのですが、いまでは活動がやんで、つめたくなってしまったのです。なかには、長いあいだ雨や風にさらされて、奇妙な形にえぐれたり、すりへったりしているものもありました。また、なかには風に吹きよせられる砂に埋もれたり、砂をかぶったりして、ほとんど火山らしい形がなくなっているのもありました。私はいつかクモサル島で見た「ささやく岩」を思い出しました。あれとこの景色とは、いろんな点でかなりちがいますが、火山を見たことのある人なら、この特徴を見おとすことはないでしょう。

私たちが着陸しようとしている狭くて長い小さな谷間には、動物でも植物でも、生物らしいものの影はほとんど見えませんでした。けれど、私たちにはそんなことは気になりませんでした。すくなくとも、ドリト

る必要がないのです。また、歩くのに、まるで力がいりません。——もっとも、それは筋肉の話で、肺のほうはまた別問題です。いちばん奇妙なのは、ピョンととんだときの感じです。足のバネをごく軽く使っただけで、からだがおもしろいように宙に浮かびます。もし呼吸にむりをしないように気をつける必要がなかったら(先生は、呼吸は心臓に影響をおよぼすかも知れないから、十分気をつけなければならないと考えていました)、私たちは浮かれて、そのあたりをとびまわったことでしょう。私たちは、からだばかりでなく心まで軽くなったような、浮き浮きした気分になっていました。私はじぶんが歌などうたいだしたのをおぼえています。——チョコレートをほおばっていたので、うまくはうたえませんでしたが。——私は一刻も早くガの背中からおりて、とびはねながら山を越え谷を越え、新しい世界の探険に出かけたくて、むずむずしていました。

けれど、いまになって考えると、ドリトル先生がみんなにしばらく待つようにいったのは、かしこいやりかたでした。先生は私たちひとりひとりに、ひそひそ声で(この澄んだ空気のなかでは、低い声で話す必要がありました。)当分のあいだ、「月のツリガネソウ」をいっときも手ばなしてはいけないといいました。

この花を持って歩くのは、やっかいなことでしたが、私たちは先生の命令にしたがいました。ここでは、ガの背中からおりるのに、梯子はいりません。ガの背中から軽く飛び出しさえすれば、七メートル下の地面にふわりと気持よくおりられるのです。

私たちは飛びおりました。そして、はじめて新しい世界の砂をふんで歩きました。

できてくれた勇ましいガにむかって、もうすこしのあいだ、このままでいてくれないかとたのみました。私たちはこの新しい環境や場所に、もうすこしなれる必要があったのです。

ガは、こころよく先生の願いをききいれました。もちろん、ガのほうでも疲れていたので、ここでひとやすみしたいところだったでしょう。先生は荷物のなかから、特配用のチョコレートを取り出して、四人とも、だまりこんだまま、それをかじりました。あんまりおなかがすいていて、あたりの見なれない景色が気味わるいので、だれも口をきく元気はありませんでした。

光線がたえず変わってゆきます。ちょうどそれは北極のオーロラを思わせます。いま、かりに私が頭の上の山をながめていて、ちょっとほかのほうへ目をやったとします。そして、また元の場所へ目をもどしたとします。すると、さっき桃色だったものが緑色に見え、紫色だった影はバラ色になっているのです。

息をするのが、まだなんとなく苦しく感じられました。私たちはいまのところ「月のツリガネソウ」を、たえず手もとにおく必要がありました。「月のツリガネソウ」というのは、ガが私たちのために月から持ってきてくれた大きなオレンジ色の花で、私たちはそのにおい（またはガスのようなもの）を吸いながら、月と地球のあいだにある空気のない地帯を、ぶじに越えることができたのです。ツリガネソウをあまり長いあいだ手ばなしていると、かならず咳こんでくるのでした。けれど私たちも、やがてはこの新しい空気になれて、「月のツリガネソウ」なしにやってゆけることを、しだいにわかってきました。

それからまた、引力のぐあいがとても妙なものでした。すわっていて立ちあがる場合、ほとんど力をいれ

チーチーは食べられるかどうか見わけることができました。

ることができました。どうしてそれが見わけられるか、ドリトル先生にもわからないということでした。それどころか、チーチー自身にもわからないのです。

それから私です。私は正式に科学を勉強したことはありませんが、博物学の調査をめざす探険隊の、よい秘書となるような訓練をうけていましたし、それに先生のいろんなくせや、やりかたをよくのみこんでいました。

最後にドリトル先生です。先生のような心がまえで、新しい国の秘密をさぐりに出かける学者は、まずないでしょう。先生はどんな問題でも、まえもってこうだときめてかかるようなことをしませんでした。新しい問題を見つけると、まる

2　色とにおいの世界

考えてみると、月世界にはじめて着陸した私どもの探険隊は、ずいぶん奇妙な顔ぶれでした。けれど、いろいろと非常につごうのいい組合せでした。

第一にポリネシアですが、この鳥は日ごろから、どんな目にあっても——日でり、洪水、火事、寒さ、何にあっても——なんとか生きのびられるだろうと思われている鳥でした。もっとも、そのころは私もまだ子どもでしたから、このオウムの順応力や耐久力を、いくらか大げさに考えていたことはたしかです。しかし、いま考えてみても、このふしぎな鳥が、いったいどんな目にあったら死ぬのか、ちょっと想像がつかないくらいでした。ポリネシアは一週間に二、三回、一つまみの穀物と(それも種類はなんでもかまいません)、それから一口の水をもらいさえすれば、けっこう元気よくがんばってゆくばかりでなく、餌がまずいとか、すくないとか、ぶつぶついうこともめったにないのです。

つぎに、チーチーですが、このサルは食べ物の点ではポリネシアよりめんどうです。けれど、ほしい食べ物がなければ、じぶんで取ってくるすべを心得ていました。チーチーぐらい、食べ物あさりのじょうずな動物を私は見たことがありません。みんながひもじがっているようなときに、チーチーは見知らぬ森へ出かけて行って、木の実やくだもののにおいをちょっとかぎさえすれば、すぐにそれが食べられるかどうか見わけ

先生はポケット用磁石を用意していました。

しかし、私たちは、すこしずつ新しい世界になれてゆきました。たしかに、ここには私たちの心をうばうような、珍しい景色や見るものきくものが、いろいろありました。あたりの景色の色が妙にたえず移り変わるので、これにはまったく、まごつかされました。方角や道の見当がわからなくなってしまうのです。先生は小さなポケット用磁石を用意していましたが、それを出してみると、磁石は私たちよりもなお、めんくらっているようでした。磁石の針は気が狂ったように、ぐるぐるまわるばかりで、いくらしずめようとしても、止まりませんでした。

それで先生は磁石にたよることはあきらめて、月世界の地図と、じぶんの目と、

で子どものようなすなおな心でそれに向かうので、新しい知識がすらすらと頭にはいり、それを人にもわかりよく説明してやれるのでした。

たしかに私たちは変わった顔ぶれの一行でした。たいていの科学者は、私たちを見て笑ったでしょう。けれど私たちにはまた、ほかの探検隊にはないような、つごうのよいことがいろいろありました。

いつものことですが、ドリトル先生は形式ばった前おきのために、時間をついやしてはいませんでした。ほかの探険隊だったら、まず第一に国旗を立てて、国歌でもうたったことでしょう。先生は、そんなことをしてはいませんでした。一行の用意ができたとわかると、すぐに出発の命令をくだしました。そして、チーチーと私は(私の肩の上にとまっているポリネシアをつれて)だまってすぐに先生のあとについて出かけました。

月世界へついてから二、三時間というもの、私はどうしても夢を見ているような気分を払いのけることができませんでした。引力の関係で、ふわりふわりと、まるで空中を歩いているような奇妙な感じがする上に、いままで一度も人間のおとずれたことのない新世界へきたのだと思うと、妙に心はそわそわ、たえずだれかに「大丈夫、あなたは目がさめてますよ。あなたは正気ですよ。」といってもらいたくなるのです。それで私は、べつに用事もないのに、たえず先生やチーチーやポリネシアに話しかけました。しかし、私が口をひらき、かすかにささやくような声でものをいうたびに、その声がウワンウワンとひびきわたって、それがいっそう夢のなかのような気分を高めるのでした。

飛びあがったり飛びおりたりするのが楽でした。

私どもは、けものの足あとを見つけようとして、あちらこちらさがしまわりました。ここには、どんな動物が住んでいるのか、まるっきりわかっていないのです。しかし、やわらかい砂原にも、動物の足あとらしいものは見あたりませんでした。足あとを見つける名人のチーチーでさえ、それらしいものを見つけることができませんでした。

においの種類はずいぶん多いようでした。たいていは気持のいい花のにおいですが、それがゆく手にそびえる山の向こうから、風にのって、ただよってくるのです。ときには、よいにおいにまじって、たいへんいやなにおいのしてくることもありました。しかし、どちらにしても、

あたりの地勢をたよりに進むことにきめました。まず、あの最初に見えた木の生えている場所を目あてに進むことになりました。その木は、どこか山のはなに生えていたというのです。けれど、そのあたりの山はどれもこれも同じような形をしていて、見わけがつきません。また、地図もいっこう役に立ちません。私たちの後ろに見える山々のなかには、地図にのっている山と思われるものがいくつかありました。しかし、ゆく手の地形は、まるっきり地図にあてはまらないものばかりです。そこで私たちは、いま人間の一度も見たことのない月の裏がわに向かって進んでいるのだという考えを、いっそうたしかめることができました。

砂原を歩きながら、先生はいいました。

「スタビンズ、おそらく、水は月の裏がわにしかないのかもしれないよ。天文学者たちが、月には水がないと信じているのも、一つにはそのせいかもしれない。」

こんなざくざくした砂原を歩くのは、ふつうならばずいぶん骨がおれるのですが、それがここでは軽々と歩けます。

私は変わったながめの景色に気をとられて、先生にいわれるまで気がつかずにいましたが、ここは非常に気候がおだやかで、気持のよいところでした。かねてドリトル先生の心配の一つは、月の気候が耐えがたいほど暑くはないか、それとも、北極よりまだ寒くはなかろうかということでした。しかし、空気の性質がまるでちがって、少々ぐあいがわるいという点をべつにすれば、こんなに住みごこちのいい気候はないといっていいくらいでした。たえずそよ風が吹き、温度はいつも同じくらいに保たれているようでした。

3 水がない！

そこで、私たちが荷物に腰をかけてひとやすみしていると、ポリネシアはハゲタカのように私たちの頭のま上に高く高く舞いあがりました。そして、三百メートルほども舞いあがると、ぐるぐる輪をえがいて飛んでいましたが、やがて、ゆっくりとおりてきました。先生はそれをじっと見ながら、ポリネシアのおりてくるのがおそいといって、気をもみました。私は、どうして先生がそんなにポリネシアをそばからはなしたくないのか、よくわかりませんでしたが、たずねてもみませんでした。

「たしかに木が見えます。でも、それはまだ、ずっと遠くのようでした。」とポリネシアは、私たちに話しました。先生はポリネシアに、どうしておりてくるのにあんなに手間どったのか、とたずねました。ポリネシアは、みんなの案内役をつとめることができるように、方角を見定めていたからだと答えました。じっさいポリネシアは、鳥特有の正確な勘で、私たちがどの方角に進んだらいいか、じつにはっきり見きわめていたのでした。それで私たちは、まえよりも自信をもって、安心した気持でまた旅をつづけました。

じつのところ、私たちが最初その木を見たのは、空のはるか高いところでした。それで、じっさいよりずっと近くに見えたのです。そのほかに、まだ二つの理由で、なおさら思いちがいをさせられているのでした。その一つは、月世界では光線が弱くうす暗いのに、空気の加減で、なんでもじっさいよりは近くにあるよう

そういうにおいは、みんな私たちの知らないものばかりでした。もちろん、私たちがガに乗ってくるときに使った「月のツリガネソウ」のにおいだけはべつですが。

私たちは、どこまでも山また山を越え、何キロも歩きつづけてゆきましたが、ドリトル先生が見たという木のかげはまだ見えませんでした。もちろん、山を越えるといっても地球で山を越えるときのように骨のおれるものではありません。ここでは、飛びあがったり飛びおりたりするのが、おかしいくらい楽でした。といっても、私たちはずいぶんたくさんの荷物を持っていましたので、めいめいが相当の重さでした。ですから二時間半も歩くと、そろそろ元気がなくなりました。そのときポリネシアが、じぶんがさきに飛んで行って偵察してきましょう、といいました。けれど先生は、それを好まないようすでした。どういうわけか先生は、いまは、みんながいっしょにかたまっているのを望んでいたのです。

けれど、それから三十分も歩いた後、ようやく先生はポリネシアのいうのを承知して、みんなの日のとどくところで、まっすぐに空高く舞いあがって、木のありかが見えるかどうか見てごらん、といいました。

とも九十メートル、幹のさしわたしは十二メートルあまり、いや、十五メートルぐらいでしょう。その木は、見るからにたいへんうす気味わるい姿をしていました。ぜんたいのつくりが、いままで私の見たどんな木ともちがいます。しかし、それが木であることには、まちがいありません。それは——なんといったらいいか——まるで何か生きものみたいです。かわいそうにチーチーは、すっかりおびえ、えり首の毛をさかだてて、いくら私と先生が、木の下に野宿をする手つだいをしてくれといっても、なかなか動こうとしませんでした。

私たちはたいへんに打ち沈んだ気持で、月世界での第一夜をすごす用意にとりかかりました。みんなどうしてこんなに気がめいるのか、なんだか不安でたまらない気持におそわれるのでした。風は、あいかわらず吹きつづけていました。——月世界の風は、いつもそよそよと、たえまなく吹くのです。夜のあいだも、あたりはうすあかるくて、ものの形が見わけられるくらいですが、地球は見わけがつかず、その反射の光がまったくないのです。

私たちは荷物をといたり、チョコレートの残りを夕ごはんのかわりにならべたりしましたが、そのあいだじゅう先生が頭の上にひろがっている妙な形をした木の枝を、どんなに不安そうに見あげていたことか、私はそれを忘れません。

むろん、その木の枝が動くのは風のせいでしょう。それは、まちがいありません。しかし風は、いつも規則正しく同じ強さで吹いています。それなのに、枝のゆれかたは、けっして規則的ではありません。それが気味のわるいところでした。木の枝がまるでじぶんの意志で動いているようです。ちょうど、足を地面にし

いままで私の見たどんな木ともちがいます。

に思われます。もう一つは、私たちがその木を、地球のふつうの大きさの木だろうぐらいに考えて、知らず知らずのうちに、あたりまえのカシの木やニレの木のつもりで距離を見つもっていたことです。ところが、じっさいにそばへ行ってみると、その木はまったく思いもよらぬ大きなものでした。

この木のことは、けっして私は一生忘れることができないでしょう。これは私たちが月世界で出会った最初の生物でした。みんながその木の下に足をとめたときは、もうやみがせまっておりました。しかしやみといっても、何か妙なうす暗さで、これが月世界ではいちばん夜らしく見える暗さです。木の高さはすくなく

おちつきを失っていました。ポリネシアがおちつきを失うというのは、よくよくのことでなくてはなりません。しかし、木や風に対する鳥の感覚は、はるかに人間より鋭敏です。私は、ポリネシアが勇気をふるって、この木の枝に飛びあがるかと思って見ていましたが、ついに飛びあがろうとしませんでした。同じように、森の住人のチーチーも、だれがなんとすすめても、この異様な植物の謎を解きに出かける勇気はなさそうでした。

夕ごはんは大いそぎですませ、それから二、三時間のあいだ、私は先生の口述をせっせと書きとめました。新しい世界にきて第一日目のことですから記録しておくことがたくさんありました。温度、風の強さと方向、私たちの到着の時刻(できるだけ正確に推定して)、気圧(先生の持ってきた機械類のなかに、小さな気圧計もふくまれていました)、そのほか、いろいろなことが記録されました。これらは一般の人にはおもしろくもないことですが、科学者にとっては非常に重要なことがらです。

世のなかには、どんな小さな、つまらないことでも、一度見聞したことは全部おぼえているような物おぼえのいい人があるものですが、私もあんなふうだったらとよく思います。たとえば、月世界で最初の朝、目をさましたときのことなども、もっとくわしく思い出せたらと思います。まえの晩は、みんな興奮やら旅の疲れやらで、ぐったりして床につき、前後も知らず眠ってしまいました。そしてあくる朝、目をさましたとき、わずかにおぼえていることは、じぶんがどこにいるのか思い出すのにすくなくとも十分間はかかった、というくらいのことだけです。それでもまだ思い出せないところでしたが、私よりさきに起きたドリトル先

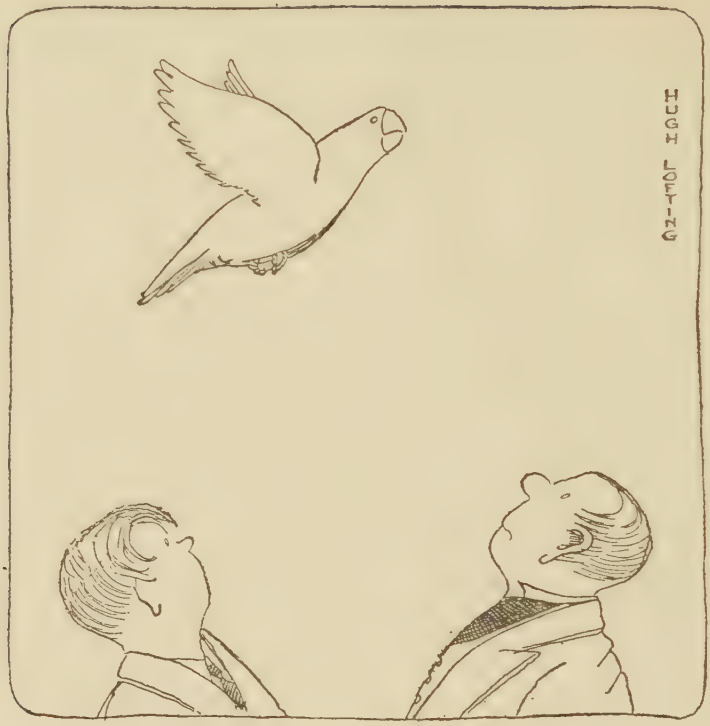
先生は木の枝を不安そうに見あげていました。

ばりつけられた動物が、ひくひくと動いているのに似ています。けれどまた、かならずしもじぶんで動いているといいきることもできません。なにしろ、風がたえまなく吹いているのですから。

そして、おまけにこの木は、うなり声を出すのです。なるほど、地球でも風の吹く日は、木がうなることがあるのを私たちは知っています。しかし、この木のうなりかたは、それとはちがいます。

風は私たちの頬を、そよそよと規則正しくなでるのに、この木は思い出したように不規則にうなります。

私はポリネシアを見ましたが、日ごろは世間なれて、てきぱきしたやり手のポリネシアでさえ、とまどったような顔で、



ポリネシアは空へ飛び立ちました。

の波——あのまんなかに、帽子のような、へんな形の山のある山脈——わたしのいうのが、おわかりでございますか？」

「ああ、わかる。」と先生はいいました。

「なるほど、それで。」

「それでね、あの山脈の向こうに、ほかとはちがう、黒っぽい色の地平線が見えるんです。わたし、それがたしかに木だとは申しません。でも、わたしの感じでいいますと、あそこには、砂のほかに何かしらあるという気がします。いそいで参りましょう。でも、たいへんな道のりです。」

じっさい、それはたいへんな道のりでした。しかも、すき腹をかかえての強行軍か、かけっこのようなものでした。は

生が、ちょうどそのとき、機械のあいだを歩きまわって記録をとっているのを見て、やっと気がついたようなわけでした。

まず、さしあたっての仕事といえば、食べ物をさがすことでした。もう食べるものは、文字どおり一かけらも残っていませんでした。先生は、あんなにあわただしくガに別れをつげてきたことを、後悔しはじめていました。私たちは、一刻も早く空から見た木をさがし出して新世界のようすをさぐりたいばっかりに、あたふたとガのもとを立ち去ったのでした。それから何時間もたったいまになって、動物のかげらしいものは、まだ一つも見ないことにはじめて気がつきました。けれど、ガにたずねるために、いまさら元の場所へもどるのは、道が遠くてたいへんです。それに、はたしてガがまだそこにいるかどうかわかりません。

とにかく、食べ物がなくてはならないので、私たちは食べ物をさがしに出かけることになりました。ゆうべ野宿するためにといた荷物を、大いそぎでまた荷づくりしました。しかし、さて、どっちへ行ったものだろう？　とにかく、ここに一本の木が見つかった以上、どこかにまだほかの木があるはずです。そこには先生のいうとおり、水もあるかもしれないのです。しかし、目を皿のようにして地平線のはてまでながめても、望遠鏡を使ってさがしても、ほかには木らしいもののかげも形も見えません。

そのときポリネシアが、こんどは先生の命令を待たずに、ちょっと見てきましょう、といって空へ飛び立ちました。しかし引き返してきたポリネシアは、「あのね、木らしいものは、一つも見えないんですよ。」といいました。「この荒れはてた景色といったら、まるでサハラの砂漠そっくりです。でも、あの一だん高い山

チーチーが冷たいものを、口のなかにつぎこんでくれたのをおぼえています。

とにかく、先生のような思いやりのある道づれがいて、たえず元気づけてくれなかったら、私たちの一行は、しまいまでがんばりぬくことができたかどうか、ほんとにわからなかったと思います。のどのかわきの苦しみは、私にははじめての経験でした。私はひと足歩くごとに、いまにも倒れるかと思いました。

とうとう、二日目の夕方と思われるころ、ポリネシアが「まえに森が！」というようなことをいったのを、かすかに私はきいたように思います。もうそのとき私は、半分正気を失っていたにちがいありません。それでも夢中で、ほかの者のあとから、よろめきながら歩いていました。やっと私は、水のある場所についた

じめ出発するときには、まさか、こんなことになろうとは思いませんでした。しかし、朝ごはんをぬきで出かけたことを、べつに苦にしていたのではありません。それぐらいのことは、いままでにも何度もありました。けれど何時間たっても、見わたすかぎり、あいもかわらぬ砂漠です。そのなかに、砂丘や小山や、ひからびた死火山など、ゆるやかにそびえているばかりです。私たちは、だんだんに元気がなくなってきました。

ところが、このときにあたって、ドリトル先生はその本来の面目をりっぱに示しました。すでに先生がこの旅のはじめから、いろんな不安になやまされていたことは、私も先生にきくまでもなく知っていました。（先生はそのときには、だまっていましたが、あとで私に話してくれました。）しかし、いま、いよいよ旅が苦しくなって、飢えが私たちの腹をえぐり、おそろしいのどのかわきのため舌がひからびて、力も元気も尽きはて、ただ歩くことすら容易でなくなったときにあたって、先生はしだいしだいにほがらかになってくるのでした。しかし、じょうだん口などきいて、ほかの者をいらいらさせるようなことではありません。何か、ふしぎなやりかたで、みんなの元気をささえてくれるのでした。先生は、じつにうまい機会をつかまえておかしな話をしてきかせるので、みんな思わず吹き出して、苦労も消しとんでしまうのです。のちに私がこのときのことを先生にいいますと、先生はなんでも若いとき、探険旅行の隊員を楽しませる係りとして、いっしょに行ったことが何度かあるということでした。そのころは先生もまだ学者の資格がなかったので、こういうやりかたで隊長を説きふせてつれて行ってもらうよりほかに、仕方がなかったということです。

4 英雄チーチー

私は目をさましたとき、ほんとうにじぶんがはずかしいと思いました。探険隊員ともあろうものが、なんというだらしのないことだろう！　先生は、もうそこかしこ歩きまわっていました。チーチーとポリネシアも、もちろんでした。先生は私が目をさましたのを見て、私のそばへかけよりました。

まるで先生は、私の心のなかを見ぬいたように、すぐさま私に気合をいれ、きみはじぶんのしたことを体裁わるがることはないのだ、といいました。そして、なんといってもチーチーやポリネシアは、空気のかわいた暑い国の旅になれていて、その点では先生自身も同じことだ、といいました。

「それを差引き勘定すると、スタビンズ、きみは、じつによくやったっ」と、先生はいいました。「とにかく、きみは道のり全部、さっさと歩いたからね。そうして、もう助かるとわかったところで、力が尽きたのだ。だれだって、これ以上のことはのぞめまい。いろいろ経験をつんだ探険家だって、これほどりっぱにやれない人がいくらもある。まさに難儀な旅であった。——おそろしく難儀な旅であった。しかし、きみはりっぱにやった。さあ、起きて、朝ごはんを食べるがよい。ありがたいことに、われわれは、やっと食べ物のあるところにたどりついたのだよ。」

私は、ぐったりしたからだを起こしました。見ると、まわりに何か山のように積みあげてありましたが、

ことがわかりました。というのは、私が倒れて、気が遠くなって眠りかけたとき、チーチーが木の葉を折りまげてつくったコップで、何か素晴らしい冷たいものを、口のなかにつぎこんでくれたのをおぼえていますから。

いろんなくだもののなかには、トランクほどの大きさのものがありました。

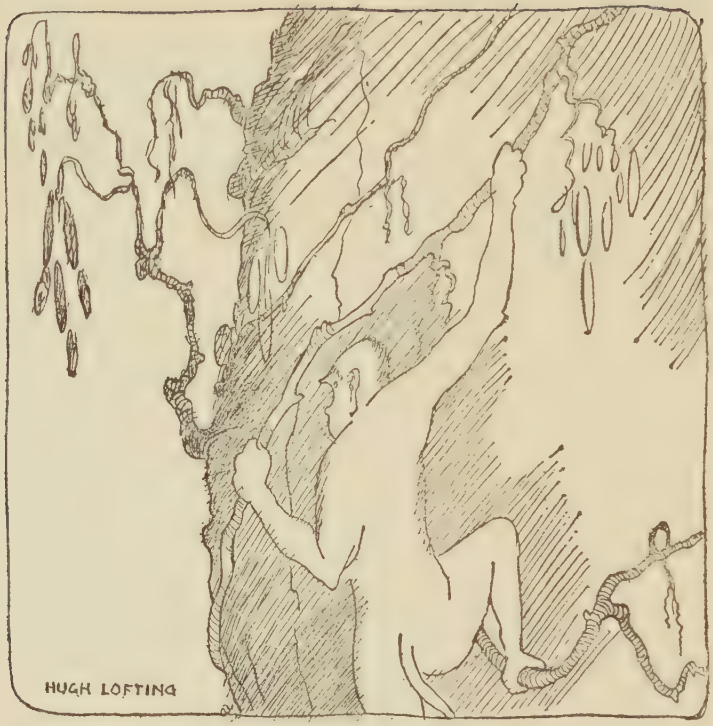
のなかで暮らす技術と、なかでも、おそろしさに打ち勝つ勇気とがなかったら、私たちの骨は、いまごろ月世界の砂漠のなかに朽ちはてていたことだろう。

さて、話をもとへもどすとして——私は珍しいくだものを食べたり、水を飲んだりして、元気をとりもどし、ふと見あげると、そこに山の背のようなものがそびえているのでした。そのいただきは平らになっていて、そこに何か植物が——もじゃもじゃした森のようなものが——茂っています。そこから山すそのほうへかけて、ほんとうの森とはなれたところにも、小さな森の出店のようなものが、あちらに一かたまり、こちらに一かたまり、点々と散らばっています。私たちの

それがみんな、くだものだということが、あとでわかりました。たのもしいチーチーが、とくいの食べ物をかぎつける力をはたらかせて、動く木や、風の音のこわさをがまんして、みんなのために取ってきてくれたものでした。その朝の、食膳にのぼったかずかずの奇妙なごちそうのなかで、先生や私の知っているものは、ただの一品もありませんでした。けれど、チーチーが大丈夫だというからには、何も心配することはないのです。

いろんなくだもののなかには、トランクほどの大きさのものや、クルミぐらいの小さなものがありました。けれど、私たちはもう飢え死にしかけているところでしたから、何でも手あたりしだいにつかんで、夢中でガツガツと食べました。水もありました。水は、大きな木の実の殻や、木の葉をねじまげてつくった、おもしろい入れ物に汲んできてありました。こんな名も知れない木の実やくだものの朝ごはんほど、おいしい朝ごはんを食べたことは、いまだかつてありませんでした。

けなげなチーチー！　おくびょうな小さなチ・チー！　おまえは、私たちが弱りはてたとき、おそろしさに打ち勝って、ひとりでジャングルへ出かけてゆき、食べ物を見つけてくれたのだ。世間の人々の目には、おまえはオルガンひきの老人のつれ歩いているような、ただのペルにすぎないだろう。しかし、私たちからいえば、おまえは昔からの偉大な英雄たちとりっぱに肩をならべることのできる英雄なのだ。おまえは、たえずおそろしさに取りかこまれながら、私たちを救え救えこのせとぎわから救ってくれたのだ。おまえがいっしょにいてくれて、ほんとに私たちは仕合わせだった。もし、おまえの生まれながらの知恵と、ジャングル



「わたしは、木にのぼりました。」

いいにおい。それをすこしとると、木をかけおります。ちょっと走ります。また、においをかぎます。いいにおいです。べつの木にのぼります。べつのくだものです。でも、食べられます。すこしとります。おります。もう帰ろう。途中で、木の根のいいにおいがします。ショウガのようです。でも、ショウガよりいいにおいです。土を掘ります。化物は見たくないから、目をとじたまま。根を、一かたまり掘ります。走って帰ります。帰ってきました。おわり！」

そんなわけで、チーチーの話はチーチー自身の英雄的冒険のありさまを物語ってはいましたが、これから私たちが探険しようという月世界の森のようすを、知

最初に見た木は、たった一本だけ、どうしてあんなに飛びはなれたところに生きのこっていたのか、どうもよくわかりませんでした。ドリトル先生の考えついたいちばんもっともらしい説明では、あそこには何か地下水のようなものがあって、木は、その水とか、しめり気を吸って生きていたのではなかろうか、ということでした。しかし、あの木があれほどの大きさになるまでには、何百年も、ことによると何千年も、あそこに立ちつづけていたにちがいありません。とにかく、あの木があそこにあったのは、ありがたいことでした。あの木があそこに立って、私たちを月世界の、住める土地へ案内してくれなかったら、おそらく私たちは死んでしまったことでしょう。

先生と私は奇妙な朝ごはんをすませると、チーチーにこの食べ物をとってきた森のありさまをいろいろたずねました。

「どうしてとってきたか、わたし自身にもわかりません。」と、チーチーはいいました。「こわくてたまらなかったので、たいていは目をつぶってましたからね。わたしは、木や、草や、ツルクサや、木の根のあいだを、どんどん通りぬけていきました。そして、においをかぎました。わたしも、おなかがペコペコでした。わたしは、できるだけいっしょけんめいにおいをかぎました。やがて、突の定食べ物のある場所をかぎつけました。くだものです。わたしは木にのぼりました。――半分くらい目をつぶったままですが。すると、どうでしょう！　化物みたいなものが見えました。なんたるジャングルでしょう！　われわれサル仲間の知っているような、ただのジャングルではありません。やれやれ、おそろしや。でも、なんといっても木の実は、

5 高原で

月世界の森は、まったく劇的な姿で私たちのまえにあらわれました。もしこれが芝居の舞台であるにしても、これ以上の効果的なやりかたは考えられないでしょう。私たちが崖の上に頭を出したとたん、目のまえ一キロ半ほどのところに、ジャングルが壁のように立ちふさがっているのが見えました。そこに生えている木のありさまを、くわしく説明するのは容易なことではありません。それは、種類があまり多いからではなくて、一つ一つの木が、地球で見たどんな木ともまるっきりちがっているからです。おかしいことに、これは木というよりも、いままでに見たことのある木とはちがう、何かべつの植物を思わせるようなものでした。

たとえば、ある場所には、そのあたり八、九キロ四方にわたって、シダそっくりの形をした木ばかり生えていました。また、ある木は、何か草花を思わせました。それは、名まえは思い出せませんでしたが、いただきの平たい部分に、こまかい花を無数につけ、茎がへんに白っぽい色をしている草花です。この月世界の木はその草花にそっくりで、ただ大きさが千倍も大きいのでした。そして、いただきの葉だか花だかの集まっている部分は、ぎっしり目がつんでいて、雨も通らないということが、のちにわかりました。それでもって私と先生は、この木を、「コウモリガサの木」と名づけました。とにかく、そこにある木のなかで、いままでに私たちの見たことのあるような木は、ただの一本もありませんでした。そこには、まだほかにもさまざま

る手がかりにはなりませんでした。けれど、私たちは疲れもなおって元気をとりもどしたので、すぐにも出かけて行って、じぶんたちで直接見てくることにしました。

私たちは最初の着陸場所から運んできた荷物をそこへ残しておき、六キロほどさきの崖の上にある林を目ざして進みました。もう私たちは、二カ所に野宿をしていましたが、あまり迷わずにそこへ帰ることができると思っていました。

ゆく手はだいたい、いままでと同じような、ざくざくした砂原でした。ただ崖に近づくにしたがって、砂地がしだいに固くなってきました。

いよいよ林の近くまで行って、最後ののぼり坂をのぼるあいだ、崖の上の景色がしばらく見えなくなりました。坂は、かなりけわしいところもありました。その坂をのぼりながら、私の心は、いよいよ大きな新発見をするときがきたのだという期待で、いっぱいでした。神秘な月世界のほんとうの姿について、いよいよ私たちが何か重要な事実を知るときがきたのです。

もうだいぶいろいろと奇妙なことになれてきていました。けれど、ほんとのこと私は、このかすかな、どこからくるともわからない音楽に、すくなからず心をかきみだされました。先生もやはりそうらしいのでした。

ジャングルまであと一キロ半ほどですが、そこまでゆくまえに、私たちは崖の上で、ひとやすみしました。月世界の一つ一つの地域は、おかしいくらい、それぞれ趣きの変わった別世界を形づくっています。これは、月全体が地球より小さいため、月の世界の地形がすべてこじんまりできているせいもあるでしょう。私たちの目のまえには、かたい砂でできた高原が、湖のように、平らに、なめらかにひろがっています。まえのほうはジャングルにさえぎられ、うしろのほうは、いまのぼってきた崖で終わっています。私はゆく手の森をながめながら、あの森の向こうがわには、どんな景色があるのだろう、そこはまた、ここのように、がらりとようすの変わったところだろうか、と考えました。

まず第一に、水を汲む工夫をしなければならないので、チーチーに道案内をたのみました。チーチーは私たちのさきに立って、ゆうべじぶんの歩いた足あとをたどってゆきました。平らな高原を歩いてゆくあいだは、なんのめんどうもありませんでした。ところが森の入り口までゆくと、たやすいことにはゆかなくなりました。森のなかでは、チーチーはたいてい木の枝にぶらさがって、木から木へ渡り歩くのです。チーチーは「そうするほうが安全ですからね。」といって、じぶんがにおいをたよりに水を見つけたときの話をしてきかせました。

またしても私は、ほんとにチーチーをつれてきてよかったと思いました。こんなに茂った、うす暗い森の

上に近づくと、ジャングルが壁のように立ちふさがっていました。

の奇妙な植物が生えていて、その一つ一つが何かを思わせるのに、それがはっきりいえない場合が多いのでした。

ある一つの奇妙なことが、私たちの気持をたいへんかきみだしました。それは、たえずふしぎな物音がきこえることでした。月世界では、どんな種類の音でも、どんなかすかな音でも、はるか遠くまで伝わるということは、もうわかっているのでした。このふしぎな物音は、私たちが崖の上に出てゆくと、すぐにきこえはじめました。それは音楽のような音でした。けれど、一つの楽器の音ではありません。どこかで小人のオーケストラが、きわめて小さな音で演奏しているようなものでした。私たちも、そのときには、

「はい、わたしは五、六度も目をさましました。」と、オウムはいいました。

「そのとき、何かきこえるか見えるかするようなこと、なかったかね？　つまりその——何か変わったものがね。」

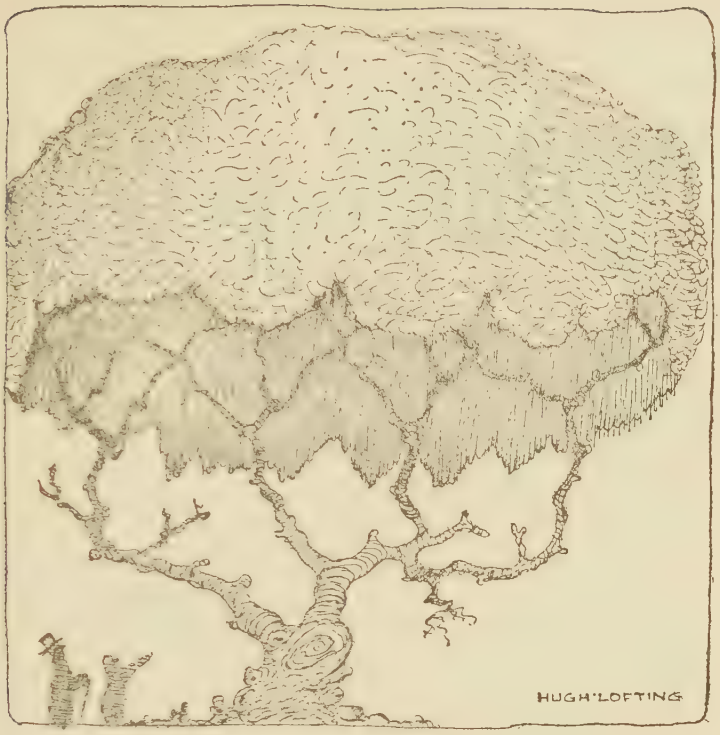
「そうなんです。わたし、はっきりとはわからないんですが、どうもテントのまわりを何かがうろついて、わたしたちを見張っているような気がしました。」

「なるほど。」と、先生はつぶやきました。「わしも、どうもそうらしいと思った。」

先生はそういって、また、だまりこんでしまいました。

チーチーの帰りを待ちながら、あたりの景色をながめているうちに、いま一つ気のついた奇妙なことは、地平線のようすが変わっていることでした。月は地球よりもずっと小さいので、月世界ではわずかの距離しか見わたせません。これは土地がでこぼこで、山があったりする場合には、それほどには目だちませんが、平地や、または割合に平らなところでは、はっきりとわかります。月世界にきてみると、世界がまるい形をしていることが、地球にいたときよりも、はっきりわかるのです。たとえば、この高原などでは、わずか十キロあまりの平地が見わたせるだけで、それ以上は、地面がまるくなっているために、もう目にはいりません。また、同じ理由から、かさなりあった山などは、妙なぐあいに見えます。山脈のかげにある山は、ずっと落ちこんで見えるので、ほんとうは高い山でも低い山だとまちがえます。

やっとチーチーが帰ってきて、ゆうべ見つけた水のあるところまで、首尾よく足あとをたどることができ



コウモリガサの木

なかを歩きまわって水をさがし出すことは、サルでなければとうていできないでしょう。チーチーは私たちに、森の入り口でしばらく待っているようにいいのこして、足あとがわかるかどうかたしかめに、じぶんだけさきに出かけました。私たちは腰をおろして待つことにしました。

「スタビンズ。きみは、ゆうべ、ふと目をさまさなかったかね?」と、しばらくして先生がいいました。

「いいえ。ひどく疲れていたものですから。でも、なぜです?」と、私はいいました。

先生は、それには答えず、「では、ポリネシア。おまえはどうだった?」と、たずねました。

その動物たちは、姿を見せたくないらしいのです。そこがどうも、わたしにはわからないところです。地球では、動物が先生のお力をかりたいときには、ぐずぐずせずに、どんどん出てきますがね。」

「ほんとにそうですよ。」と、ポリネシアが不平らしくいいました。「あの診察室にワアワアつめかけてくるさわぎを、ひと目でも見たものなら、それは疑うわけにゆきません。」

「なんたることだ！」と、先生はつぶやきました。「わしも、それには気がついておった。どうもその点がわからんのだ。ここの動物たちは、わしのきたことを、何かおもしろくないとでも思っているようだな。……はてな……いや、とにかく、ここの動物が、わしと連絡をとってくれて、いったいどうなのか知らせてくれたらよいのだがね。このありさまでは、すくなくとも——その——さっぱりわけがわからん。」

「はい、私は五、六度も目をさましました。」と、オウムはいいました。

た、と知らせました。そして、いまからそこへ案内しましょう、といいました。チーチーはなんとなく、そわそわして、ものにおびえているようなようすでした。先生は、そのわけをたずねました。けれどチーチーも、はっきりした理由はわからないようでした。

「だいじょうぶです。」と、チーチーはいいました。「たぶん、だいじょうぶだと思います。ただ、その、一つの理由は——いったい、なんでその——先生をここへよんだのか、それがよくわからないせいもあるのです。わたしたちは、あのガとわかれてから、まだ一つも動物の姿を見かけません。それでいて、たしかにたくさん動物がいるような気がします。

そこまでゆく途中の道は、なかなか骨がおれました。いたるところに下草が生えしげり、腰のあたりまでツルクサがからみ合っていますので、ようやくに進むことができません。けれど、やっとのことで、ひろびろした場所へ出てゆくと、しんとした大きな湖がありました。湖の一方から、きれいな滝が流れおちていました。この湖のまわりに生えている木は、とても奇妙な形です。それはちょうど、ものすごく大きなアスパラガスのようなかっこうの木で、そのアスパラガスに似た穂先が、何キロ四方にもわたって、びっしりと立ちならんでいました。ここではツルクサの生え茂る余地はありません。大きなアスパラガスに似た木が地面を占領して、その土地の養分をひとりじめにしています。私たちの頭の上の、数百メートルのところにある、アスパラガスのとがった穂先は、いかにも食べられそうに見えました。でも、そこまでのぼって行ってみたとしても、おそらく穂先はカシの木のように固かったにちがいありません。

先生は湖の岸のきれいな砂の上におりて行って、水を飲みました。チーチーも私も飲みました。水はきれいに澄んでいて、のどのかわきをとめてくれました。湖のまんなかへんは直径八キロ以上もあったでしょう。

「わしは、舟でこの湖をしらべたいのだがね。」と、先生はいいました。「ねえ、チーチー。どこかに、丸木舟かイカダをつくるような材料が、ないだろうか?」

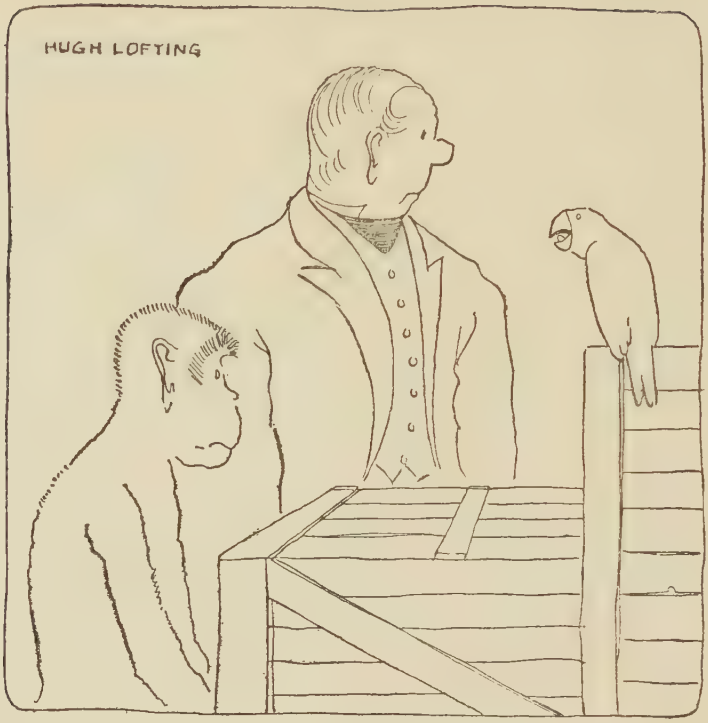
「あるだろうと思います。ちょっとお待ちください、そのへんを見てきますから。」と、チーチーはいいました。

そこで私たちは、チーチーをさきに立て、ボートの材料をさがしながら、湖の岸づたいに歩いてゆきまし

6月の湖

そこで私たちは、チーチーの道案内で、水をさがしに出かけました。いよいよじっさいにジャングルにふみこんでみると、ただ遠くから見ていたときとはちがって、そこはどうも大したところでした。森の外でも、あたりはあかるいとはいえませんが、森のなかへはいるとそれがいよいよ暗くなりました。このまえ私はクモサル島に行ったとき、たった一度ジャングルにはいったことがありました。ここのジャングルはあれに似ていますが、また非常にちがったところがありました。

あの最初にさがしあてた木を見たとき、先生はその形や大きさから、この木はとても古いものにちがいないといいました。ところが、ここへきてみると、どの木もみんな先生のことばを裏書きするように、非常に年とった木ばかりです。お化けのような幹でそびえ立つ大きな木は、まるで世のはじめからそこに立っているように見えました。それに、枯れたり、くさったりすることが、おどろくほど少ないように思われました。——木の枝や木の葉は、ほんのわずかしか落ちていないのです。地球では、おのを入れない森林にゆくと、見わたすかぎりの落葉でカサカサになった枯葉が地面の上につもったり、木のまたにひっかかったりしているものです。ここでは、そんなことはありません。どの木もどの木も、もう何百年もそこに立って、安らかにのびつづけているように見えました。



「そうではありません。」とポリネシアはいい争いました。

るようだ。」

「それは仕方がございません。」と、チーチーはいいました。「それだって、丸木舟であることに変わりはありませんですね。先生、わたしといっしょに、この舟の下にもぐりこんでごらんになりませんか。火や道具を使って細工したあとが、きっと見られます。これは裏がえしになっているんですね。」

そこでサルといっしょに先生は、この奇妙なものの下へもぐりこみました。そして、そこから出てきたとき、先生はふしぎでならないといったような顔をしていました。

「なるほどね。あれは道具で細工したあとかもしれんな、チーチー。」と、先生

た。ここでは、まえにもいったように、枯れた木やかわいた木など、めったになくて、生えているたいていの木は、とても重くて水気が多いので、この材料さがしは最初のうち容易なことではなさそうでした。私たちの持ち合わせている大工道具といえば、せいぜい先生がバンドにつるしている小さなおのくらいのものでした。湖の岸からニュッとそびえ立つ大きな木にくらべると、これは悲しいほどにちっぽけな道具でした。

けれど一キロ半ほど行ったころ、ずっとさきを歩いていたチーチーが立ちどまって、ジャングルのなかをのぞきこみました。やがてチーチーは、私たちに早くくるように手まねきして、森の入り口へ姿を消しました。みんなが追いついてみると、チーチーは湖の岸から百メートルほどのところで、森の入り口にころがっている何か道具のようなものから、しきりとツルクサだのコケだの剝ぎとっているところでした。

私たちもチーチーといっしょに、ツルクサやコケを剝いでゆきました。けれど、その下にあるものはなんだか、さっぱりわかりません。それは、とほうもなく長いものでした。さいげんなく長いのです。私は、どうも枯れた木らしいと思いました。――月世界で、はじめて出会った生木の倒れたものと思いました。

「チーチー、いったいこれはなんだろうね？」と、先生はききました。

「これは舟です。」と、チーチーはあたりまえのことのように、自信ありげな口ぶりでいいました。「それにまちがいないと思います。くり貫いた丸木舟です。アフリカでは、みんなこういう舟を使っておりました。」

「だが、チーチー、この長さはどうだ！」と、ドリトル先生は大きな声でいいました。――これは一本の、アスパラガスの木だ。われわれはもう、三十メートルくらいもツルクサを剝ぎとったか、またまたつづきがあ

私たちは、長い水さおを使って進みました。

こし取り扱いに便利な、イカダの材料をさがすことにしたらどうでしょうと、いい出しました。

先生はちょうどいい口実ができたのをさいわい、益のない議論をやめにして、一同、湖の探険に使えそうな材料をさがしに出かけました。そこから湖にそって一キロ半ほどゆくと、こんどはそれほど重そうでない木の生えている森がありました。そのあたりでは、あの巨大なアスパラガスの森は、もうおしまいになって、そのかわりに、もっと細い木が生えていました。私たちは先生のおのを使って、まもなくイカダをつくるだけの木を切りたおすことができました。その木をならべて、木の皮でつくったなわでしめ合わ

はいいました。「あるいはまた、そうでないかもしれん。火を使ったらしいあとは、いくらかはっきりわかる。だが、これとても偶然のことかもわからん。もし木が焼けて倒れたとすると、じきに……。」

「わたしどもの国のアフリカの土人は、」と、チーチーが先生のことばをさえぎりました。「丸木舟をえぐるのに、かならず火を使います。ずうっと木にそって小さな火を燃やして、木の幹にじぶんたちのすわる穴をあけてゆきます。細工をする道具は、とても簡単なもので、石のヘラで、こげた木をえぐりとるぐらいのものですがね。先生、たしかにこれは丸木舟です。ただ、よほど長いあいだ、うっちゃっておいたものですね。ごらんなさい、ちゃんとヘサキのほうが、とがっておりますでしょう。」

「とがっておるよ。」と、先生はいいました。「だが、アスパラガスの木は、どっちみち、さきがとがっておるよ。」

「そして、チーチー。」と、ポリネシアが、よこあいからいいました。「いったいぜんたい、だれがこんな舟を、あやつることができるというのです。ねえ、見てごらん、まるで軍艦のような長さじゃありませんか！」

そして三十分も議論がつづきました。私たちの発見したものが丸木舟かどうかということについて、先生とポリネシアはそうではないといい、チーチーはそうだといって盛んにいい争っていました。私としては、どちらともいえませんでした。私の見たところでは、その物は、とほうもなく長い材木で、一方がすこしうつろになっていましたが、それが人の手によるものか、偶然にそうなったものかわかりませんでした。

とにかくこの物は、あまり重すぎて取り扱いに不便です。そこで私は議論の途中に口をはさんで、もうす

すよ。」

湖水の調査は、あまりおもしろいこともなく、また大して収穫もありませんでした。水中に住むさまざまの虫や、ものすごく大きな幼虫の類などがとれましたが、魚は一ぴきも見つかりませんでした。植物——水中植物——には、いろいろの種類のものがありました。

湖水の上を五、六時間もこぎまわったあとで、先生はいいました。

「わしの考えでは、ここでは動物界よりも植物界のほうが、はるかに重要な地位をしめておる。それは、たしかなことだと思う。そして、動物といっても、だいたい虫類にかぎられているようだ。だが、われわれは、この気持のよい湖水の岸にキャンプして、いずれ、ゆっくりしらべることにしよう。」

そこで最初こぎ出したあたりにイカダをつなぎ、岸べの黄色いきれいな砂の上にテントをはりました。

私はその晩のことを、けっして忘れることができないでしょう。ほんとに、うす気味わるい晩でした。みんな、眠れませんでした。夜のあいだじゅう、たえず何かが、あたりをうろついているような物音がきこえました。それは何か、たいへん大きなもののような気がしました。でも、その姿は目に見えず、正体をつきとめることができませんでした。しかし、私たちは四人とも、一晩じゅう何者かが私たちを見張っている気配を、はっきりと感じました。ポリネシアでさえも不安そうな顔をしていました。たしかに月世界に、たくさんの動物がいることは、疑いないのですが、その動物たちは、いまのところ私たちに姿を見せたがらないのです。住みなれない世界へきたというだけでも不安な気持なのに、月世界の住人たちが、どうしたことか

せ、水に浮かべてみると、非常に浮く力がつよく、みんなが乗った上に、私たちの小さな荷物を、らくらくとのせることができました。湖の浅いところをゆくときには、長い水さおを使って進み、深いところをゆくときには、カイを使いました。そのカイは、私たちがおので荒らけずりにしてつくりました。

湖水の上にこぎ出すと、先生はさっそく私に筆記をさせはじめました。先生の持ってきた道具のなかに、日のこまかいタモがありましたので、先生はそのタモで、月世界の湖水のなかに住んでいる動物をさがしはじめました。

「スタビンズ。ここにどんな魚が住んでいるか、それをしらべるのは非常にたいせつなことなんだ。生物の進化の過程を考える場合、魚類は非常に重要な意味をもっている。」と、先生はいいました。

「進化とはなんですか？」と、チーチーがききました。

私は説明してやりかけましたが、すぐに先生のいいつけで筆記の仕事にとりかかりました。

それはちょうど、よいさいわいでした。進化の説明は、なかなか手間のとれるむずかしい仕事です。ところがポリネシアが、私のやめた説明のあとを引きとって、いとも簡単に、こんなふうに片づけました。

「進化というのはね、チーチー。どうしてスタビンズには、あなたのようなしっぽがなくなったかという物語ですよ。――スタビンズには、もうそんなものは、いらないんですからね。そしてまた、あなたには、どうしてしっぽが生えて、それが必要に応じて今日までちゃんと残っているか、という物語なのです。進化だの証明だのって、学者の使う、えらそうなことばです。簡単なことがらを、むずかしくいったたけのもので

7 巨人の足あと

その晩、私たちが眠れなかったもう一つのわけは、たえずふしぎな音楽がきこえてくることでした。でも、とにかく、いろんな奇怪なことがいっしょになって、私たちをまどわせ、わけのわからない不安な気持をおこさせていたのですから、とてもそれを一つ一つ思い出して数えあげることはできません。

あくる朝は、残りのくだもので朝ごはんをすませ、荷物をまとめて、旅をつづけることになりました。最後の荷物の荷づくりにとりかかったときに、チーチーとポリネシアは、ちょっとさきへ行って道の下見をしてくるからといって、出かけました。このふたりは、こういう仕事にあつらえむきの組合せでした。ポリネシアは森の上を飛んで、高い空から、ゆく手のだいたいのようすを見わたすことができ、チーチーのほうは木の上や地面から、もうすこし低いところのようすを、くわしくしらべることができました。

先生と私が、たがいに相手の背中へ荷物をしょわせていると、そこへチーチーが顔色を変えて、とびこんできました。歯をガタガタいわせながら、ろくに口もきけないほどでした。

「先生、なんだと思います?」とチーチーは、とぎれとぎれにいいました。「あそこに、足あとを見つけました。人間の足あと! でも、ものすごく大きい! とても想像つかないほどです。早くきて見てください。」

私(わたし)たちに打(う)ちとけてくれないのは、ほんとに気味(きみ)のわるいことでした。

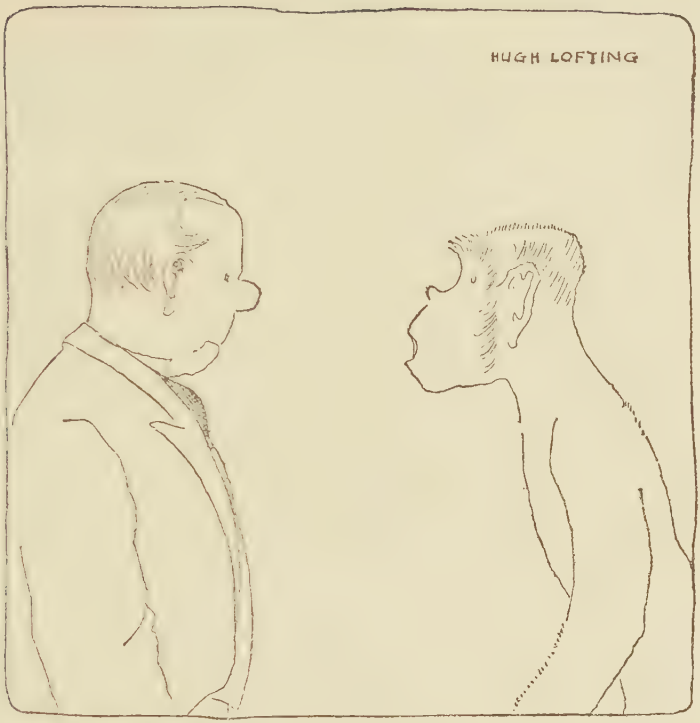
三十分ほどゆくと、湖の上手のすみにそそいでいる川の入り口へ出ました。そこから、こんどはこの川づたいに、チーチーのあとについて、およそ一キロ半くらいも歩いたでしょう。やがて川岸の幅がひろくなって、森が川岸からずっと遠ざかってきました。地面は、あいかわらず、きれいな固い砂地でした。まもなく、ゆく手に、私たちを待っている小さなポリネシアの姿が見えました。

近づいてみると、ポリネシアは、ものすごく大きな足あとのそばに立っていました。それが人間の足あとだということは疑いありません。こまかいところまで、はっきりとよくわかります。いままでに私は、こんな、ばか大きな足あとを見たことがありません。それは長さ三メートル以上もある、はだしの足あとでした。しかも、一つだけではありません。川岸のほうへ向かってかなりのあいだ、点々とつづいています。その足あとのはなれぐあいから見て、この足あとを残した巨人の一またぎの、ものすごい大きさが想像されました。

チーチーとポリネシアは心配そうな顔で、先生が何というかと、だまって、じっと先生の顔を見ていました。

「なるほど！」と、しばらくして先生はつぶやきました。「ではやっぱり、ここにも人間がいるのだな。だが、まあ、なんと大きな人間だろう！　ひとつ、この足あとをたどってみようではないか。」

むろんチーチーには、そんなのは、こわくてならないことでした。チーチーもポリネシアも、この足あとの主からすこしでも遠ざかるほうがよいと思っていることはあきらかでした。ふたりの目には、おそれとおどろきの色が浮かんでいました。しかし、ふたりとも反対はしませんでした。そこで一同は無言のまま、た



「先生、なんだと思います？」とチーチーはいいました。

顔色を変え、ふるえあがっているサルのほうを、先生はじっと見て、何かたずねようとするふうでしたが、やがて気が変わったらしく、また荷物に手をかけました。そして荷物をしょってしまうと、何か忘れものはないかと、野宿をしていたあたりをもう一度見まわしました。

私たちは、これから湖の向こう岸のほうへゆこうというのではなくて、湖を右に見て左手のほうへ進むところです。けれど、いますこしのあいだ、湖の岸づたいにゆかなければなりません。これからどんな新しいできごとが、私たちを待ちうけているのだろうと思いながら、一同はチーチーのあとについて、だまって湖の岸を歩いてゆきました。

ていないかと、長いことかかってしらべました。けれど、何一つ手がかりになるようなものはありませんでした。そこで、この巨人はただ、水を飲みに川へおりてきたのだろうということにして、もうこの上あとをつけるのはやめて、また元の道を進んでゆきました。

またしても私は、この探険によい仲間といっしょだったことを感謝しました。この旅は、まったく奇妙な風変わりな旅でした。みんなだれもあまり口をききませんでしたが、口をきくと、みんなが同じようなことを考えているのでした。

私たちが月の裏がわ——つまり、いままで人間の見たことのないがわへ進むにつれて、あたりの森はいよいよう気味わるいものになってきて、まるで生きもののように見えてきました。第一に、奇妙な楽の音がしだいに大きくなってきます。第二に、木の枝がますます盛んに動くようになり、うでのような形をした大枝や、手の指のように見える小枝の集まりが、不気味なかっこうで、ゆれたり、動いたり、空をつかんだりするのでした。風は、あいかわらず規則正しく、たえまなく、そよそよと吹きつづけていました。

けれど森のなかは、どこもかしこも陰気なのではありません。思いがけないほど美しい場所もたくさんありました。何キロ四方にもわたって、見わたすかぎり、色とりどりの花が咲きみだれている場所もありました。その花の色は、ちょっといいあらわすことのできない、夢のなかで見るような色あいで、しかも、じっさいに見たあざやかな絵のような、はっきりとした印象を残すのでした。

みちみち、先生はほとんど口をききませんでした。何か口をきくと、それはきまって同じ問題——先生の

巨人のはだしの足あと

ぶんおとぎ話に出てくるような人間と思われる、この奇怪な人間の足あとをたどってゆきました。

しかし残念なことに、そこから一キロ半ほど行ったところで、この足あとは森のなかへ消えてしまいました。森のなかのコケや落葉の上では、足あとが全然のこらないのです。そこで私たちはあとに引き返して、この人間がもう一度、川岸におりてきたかどうか見るために、川のふちをかなり遠くまで行ってみました。けれど、二度と出てきたらしいあとは見えませんでした。チーチーも先生にたのまれて、森のなかに巨人の通った道を知る手がかりが残っていないか——木の枝が折れたり、地面にあとがのこったりし

ではどうだろう！　もちろん、いくらかの土もある。――また、落葉もすこしはある。しかし、森へはいってから、まだ、枯木というものを、ほとんど見ないようだ。たぶん、なんらかの――その――バランスがあるものと思われる。何か特別の仕組が――その――ええ――どうも説明できない……まったくわけのわからんことだ。」

私はそのときにはまだ、先生の話の意味が十分にわかりませんでした。しかし、とにかく私たちの頭の上に高くそびえている木は、どれもこれも、朽ちたり枯れたり病気になやまされたりすることは全然なしに、平和に伸びつづけているようでした。

なおも進んでゆくうちに、ふいに森はおしまいになって、目のまえに、また山や丘の多い景色がひらけました。でも、このまえに見た山や丘とはちがいます。こんどの山や丘は、植物でおおわれていました。このゆるやかにうねっている土地は、小さな灌木やヒースのやぶなどで、濃くおおわれているために、通りぬけるのが容易でないこともたびたびありました。

しかし、ここにも枯葉や枯木のないことは、まえとおなじでした。腐葉土もほとんど、いやまったくといっていいくらい、ありませんでした。先生は、これはたぶん一つには、気候のせい――気候の変化のないせい――ではあるまいか、と説明しました。そして、おそらく月世界では、ほんとうの冬とか夏とか、区別がないかもしれん、といいました。地球で見るような生存競争という点から考えると、これはまったく新しい問題でした。

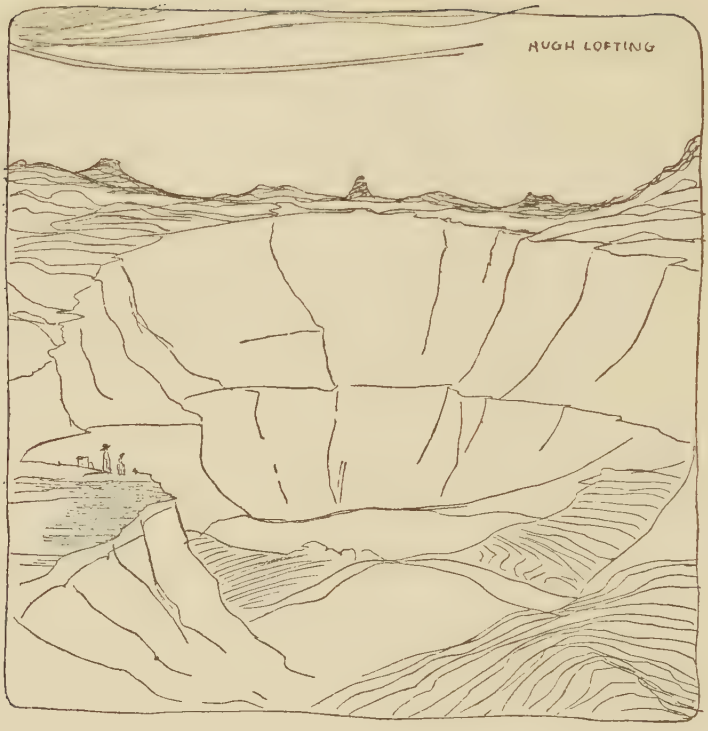
手足のように見える枝が、ますます盛んに動いていました。

いわゆる「腐蝕現象の欠けていること」についてでした。

「スタビンズ、まったく、どうもわからないことだ。」と先生は、みんなが休んでいるとき、いままで心のなかにたまっていた考えを、はき出すようにいいました。「じっさい、ここには腐葉土というものが、ほとんどない！」

「先生、そんなことが何か問題になるのでしょうか？」と、私はききました。

「それはね、地球の木は、おもに腐葉土を養分にして生きているものだ。森の草や木が養分になって——わしのいうのは、枯れた木や、くさった葉でできた土のことだがね。——苗木がそだって、ついには新しい木になってゆく。それが、ここ



それは、スリバチのような穴でした。

「でも、わたしたちの見たのは、火ではなくって煙でした。」と、私はいいました。

「そのとおりだ。たぶん、何かまだわれわれの知らない、変わったものを使ったにちがいない。わしは、灰を試験してみれば、それがわかると思った。が、わからなかった。しかし、いずれそのうちに、わかることもあろう。」

いまのところ、二つの理由から、先生は森のある場所をあまりはなれないほうがいいと思っていました。(そのときにはまだ、いま通ってきた森以外に、ほかにも森があるということはわからなかったのです。)第一の理由は、食べ物を手にいれる便利を失わないためでした。私たちはジャングルのくだものや草を食べて

8 うたう木

私たちは、この新発見のヒースにおおわれた山地を、何キロも歩いてゆきました。すると、やがて奇妙なものにゆき当たりました。それは高い山の上にある、まわりを山にかこまれた、大きなスリバチのような穴でした。奇妙なことに、そこにはまた、あの川岸で見たような巨人の足あとがあるばかりでなく、まぎれもなく火を焚いたあとがありました。大きな窪地の砂の上に灰が残っていました。先生はこの灰に非常に興味をもって、それをすこしとって薬品を加え、いろいろ試験してみました。けれどしまいに、この灰の成分はまるっきり見当がつかないといいました。しかし先生は、とにかくこの一行がたずねあてた場所こそ、あのパドルビーで見た煙の信号の打ちあげられた場所にちがいない、といいました。いま考えると、フクロのトートーが月のふちからパッと煙のあがるのを見たといい出したのは、もうふしぎに遠い昔のことのように思われます。あの晩、私たちの家の裏庭に、大きなガが弱りはてて落ちていたのでした。けれど、あれはいつのことだったでしょう？　じつはたった五、六日まえのことにすぎないのです。

「スタビンズ。」と、先生はいいました。「われわれが地球で見た合図は、たしかに、ここから打ちあげられたのだよ。この穴は、直径何キロもあるだろう。しかし、われわれが、家で見たような、あんな大爆発を起こすのに、どんな材料を使ったのか、それは見当がつかん。」

私たちはあっけにとられてじっと見ていました。

しぎなくらい平和にみちたものでした。このことについては、またのちに話します。

私たちはまる三日をついやして、あのどこからともなくひびいてくる奇妙な音楽の調査をしました。みなさんもおぼえていらっしゃると思いますが、ドリトル先生は笛を吹くことがじょうずで、音楽が大すきです。先生はこの奇妙な音に、非常に興味をもちました。何回か森のなかを歩きまわっているうちに、私たちはジャングルのなかで木の音楽のいちばん上等なのがきこえる場所を見つけました。

もう疑う余地はありません。たしかに木が音をたてているのです。しかも、木がじぶんの意志で、音をたてているので

いたのですから。もう一つの理由は、先生が月の植物界の研究に夢中になっていたからです。先生は、これらの植物には、博物学者たちをおどろかすような変わった性質があるにちがいない、と考えていました。

最初のうち私たちは、たえずなんだか不気味な、ぞっとするような気持におそわれて、どうしても心がおちつきませんでしたが、しばらくするうちに、だんだんそれになれてきました。私たちは、こんな不安な気持が起こるのは、ここの森や植物が地球の森や植物とあまりちがうためだろう、と思いこんでしまいました。この森には、べつに私たちに敵意をいだいているものはないのだ、私たちはただ監視されているだけなのだと、めいめいがじぶんの心にいいきかせました。監視されていることだけはたしかでしたが、やがてそれもしだいに気にならなくなりました。

先生は森のはずれに新しい根拠地をつくることにきめました。みんなでかかってテントをはってしまうと、私たちはジャングルのなかをあちらこちら、しらべて歩きました。そして私はまた、先生の実験や研究の結果を、せっせと筆記しつづけました。

月の植物界を観察して第一に発見したことは、ここでは植物界と動物界のあいだに、まったく争いというものがないことです。地球では、馬やそのほかの動物がどしどし草を食べ、そのほか、この二つの世界のあいだに、たえず争いがつづけられているという例は、いくらでも見受けられました。ところが、ここでは動物(というより、もっと正確にいうと昆虫です。ほかの種類の動物は、まだ一つも見つかりません)と植物とは、争って亡ぼしあうより、むしろ助けあっているように見えました。まったく、月世界の生活は一般に、ふ

先生はやぶのまえに腰をおろして、長いことじっと見つめていました。

ました。また、ときには——ごくたまのことですが——同じふしまわしが二度くりかえされることもありました。だいたいからいって、そのメロディーはひどく風変わりな、奇妙な悲しげなものでした。しかし音楽のことにかけて、まるっきりしろうとの私の耳にも、それが何かオーケストラふうの試みだということは、よくわかりました。ソプラノの部があり、バスの部があって、それが気持よく美しい調和をもっていました。

私もおもしろくてたまりませんでしたが、先生は、生まれてはじめてといったほどの興味をおぼえ、すっかり夢中になっていました。

「スタビンズ、これがどういうことだ

す。ちょうど風神琴を適当な角度で風に向けておくと、ひとりでに鳴りだすように、木が枝を動かし、風に当てて、じぶんの思う音を出しているのです。この「うたう木」をはじめて発見した日の晩、先生は私に、この日を探険日誌のなかで特別たいせつな日として記しておくように、といいました。私はその木を見つけたときのことを忘れることができません。それは、私たちがもう何時間も、例の奇妙な音をたどって歩きまわっていたときのことでした。先生は手に持った音叉をときどき鳴らしながら、あたりの音をしらべていました。ふいに私たちは小さな空地へ出ました。その空地のまわりに、巨人のような大木がずらりとならんで立っていました。そして、ちょうどオーケストラのようなことをやっているのです。まず、ある一つの木が、つぎにはほかの木が、かわるがわる枝を動かして、たえずそよそよ吹いている風のなかに差し出すと、澄んだ美しい音がうす暗い空気のなかにひびきわたるのでした。私たちはあっけにとられ、立ちどまってじっとそれを見ていました。こんどは、その木が三、四本そろって、いっしょに枝をふりました。すると、合奏の音が鳴りひびき、その音がジャングルの奥へ伝わってゆきました。まったく奇怪な夢のような話ですが、だれでもこれを見たりきいたりした人は、木がじっさいにじぶんで音を出していることを疑うことはできないでしょう。木はじぶんの出したいと思う音を、風の助けをかりて出しているのでした。

もちろん先生もいうように、風がたえず同じ強さで吹きつづけていなければ、こんなことはできないでしょう。先生はこの木の音楽に、どんな音階が用いられているか、しらべるのに夢中になっていました。私がきいたところでは、ただその音楽はいくらか快いというだけのものでした。たしかに、ちゃんと拍子もあり

ういう方法で話をしていないかと、長いことじっと見つめていました。

かわかるかね？――じつに大したことだ。もし、この木がうたうことができて、合唱隊員たちが、たがいに相手の気持がわかるというなら、そこにはことばがなくてはならん。木が、話をすることができるのだ！植物界にも、ことばがあったのだ！　われわれは、それをしらべなくてはならん。わしは、そのことばをおぼえることができるかもしれないのだ。スタビンズ、きょうはじつに大した日だな！」

そんなわけで先生は、こんな場合にはいつもそうでしたが、仕事に夢中になって、じぶんのからだのことなど、そっちのけにしてしまいました。何日も、ときにはごはんも食べず、ときには夜も眠らずに、新しい研究をつづけました。私は、いつも筆記のノートを用意して、先生のあとについてまわっていましたが、先生は私よりも、もっともっとたくさん余分の仕事をしたにちがいありません。というのは、先生はテントへ帰ってからも、長いことメモをとったり、新しい機械を組み立てたりして、いっしょけんめい働いていることがよくありましたから。

私たちが地球をたつまえから、ドリトル先生が、月のツリガネソウは何かの方法で、たがいに話をかわしているのではないかといっていたのを、あなたがたはごぞんじでしょう。月のツリガネソウが、おかれた場所でじぶんのからだをあちこち動かすことができるということは、はっきりたしかめられていたのです。けれど、私たちはそれには慣れてしまって、いまさらそのことを考えてもみませんでした。先生は、そういうように植物が幹や枝や葉を動かすことが、もしかすると何か話をかわす手段ではあるまいか、一種の手旗信号のようなものではないか、と考えたのです。それで先生は、よく木ややぶのまえに腰をおろして、木がそ

大きな影が、やみのなかに消えてゆくのが見えました。

いともかぎらないでしょう。

それからまた、先生はよく私の両親の話をしました。先生が私の両親に、非常にすまながっていることは、たしかでした。——私がガに乗せられて、ここへ運ばれてきたのは、けっして先生のせいではないのですが。もちろん、そのころ先生の心は何かと、さまざまな考えごとでいっぱいでした。けれど科学上の研究にすこしでも合間ができると、先生はよくこの話をもち出すのでした。

「スタビンズ、きみはくるべきではなかった。……それは、むろん、きみが、わしのためにきてくれたことは、わかっている。だが、おとうさんのジェーコブや、おかあさんがたは、きみが姿を消し

9 植物語の研究

このころ、先生と私がいつも思い出して、あの人がいてくれたらと、いつも思っていた人物がありました。それは私たちがクモサル島で出会ったインディアンの博物学者、ロング・アローでした。むろん、ロング・アローにしても、じぶんが植物とことばをかわしたことがある、といったわけではありません。しかし、この人物は植物や植物の歴史について、なみなみならぬ知識をもっていますので、この人がいてくれたらずいぶん助かるだろうと思いました。ロング・アローはゴールデン・アローのむすこで、研究論文など一つも書いたことはありません。どうして、そんなものが書けるでしょう。――ロング・アローは字が書けないのですから。けれど、ある色のミツバチが、ある色の花に集まるのはどういうわけか、このガがこの木にたまごを生むのはなぜか、この幼虫がこの水草の根をかじるのはどういうわけか、というようなことになると、なんでも知っているのでした。

よく、晩のひととき、先生と私はロング・アローのうわさをして、あの人はいまどこで何をしているのだろうと話しあったものでした。私たちがクモサル島を舟で出てきたとき、ロング・アローは島にとりのこされました。といって、そこにいつまでもいるとはかぎりません。生まれつきの風来坊ですから、天候や、いわゆる自然の法則などを、うまうまと出しぬいて、いまごろは南北アメリカのどこかに姿をあらわしていな

はなればなれになるのを不安に思っているようでした。たぶん先生は、例のふしぎに正確な本能の力で、私たちの仲間を、はなればなれに引きはなそうとするたくらみを、おそれていたのだろうと思います。でも、こまりきっているとき、チーチーとポリネシアがいてくれることは、ほんとにありがたいことでした。このふたりは、どちらも力のつよい勇士とはいえませんが、見張番や案内役としてはこの上もなく重宝でした。ドリトル先生はよく、野蛮人の国を旅行するときには、十個連隊の兵隊に護衛してもらうより、サルのチーチーとオウムのポリネシアがいてくれたほうがよい、といっていました。

ときには、私たちは、ちょっとした実験用具を持って、ヒースのやぶの奥ふかくわけ入って、ゆるやかな丘の上に茂っている、美しい花をつけた灌木について、いろいろの実験を行ないました。また、あるときは、川の流れを何キロもさかのぼって、川岸のスゲのなかにみごとな頭をふり動かしている、大きな大きなユリの花を観察しました。

私たちの骨おりは、すこしずつ報いられてゆきました。

やがて私は、先生がこの探険のために、ほんとにゆきとどいた用意をしてきていたことを知って、おどろきました。植物語の研究をはじめることになってから、まもなく、先生は私に向かって、われわれはもう一度、はじめ着陸した場所へ行って、あそこにおいてきた残りの荷物をとってこなければならない、といいました。

そこで、あくる朝早く、先生とチーチーと私は、元きた道を引き返してゆきました。ポリネシアだけは、

どうすることもできない。とにかく、研究をつづけることにしよう。」

そういって先生は新しい研究にとりかかり、この話は、それでとぎれることになるのでした。――けれども、つぎにまたその問題が先生の心をなやますのでした。

右足の一またぎが、左足の一またぎよりかなり長くなっていることを見つけました。この奇怪な月の住人は、たしかにびっこをひいて歩いているのです。けれど、これほどの大またで歩く人間は、いずれにしても、おそろしい人間にちがいありません。

元の場所へ帰って、運んできた包みや箱をひらきはじめたとき、私はまえにいったように、先生がこの旅行のために、じつにゆきとどいた用意をしてきていることを知りました。先生はこの旅行に、ちょっとでもいりそうなものを全部用意してきていました。——オノ・針金・クギ・ヤスリ・ノコギリ、そのほか、月で手に入れることのできないようなものは、みんなそろえてありました。ふつうの旅行に出かけるときの先生の旅支度といえば、たいてい小さな黒い薬袋と、着ている着物だけにかぎられていましたが、こんどはそれとは大ちがいでした。

例によって、食べ物を二口三口つめこみながら、ひとやすみしただけで、さっそく先生は仕事にとりかかりました。先生は十以上もの、いろいろな機械——音をテストする機械、振動をテストする機械など——を、すぐにも組み立てようとしていました。ノコギリやオノや、そのほかの道具の助けをかりて、一時間ほどのうちに、テントのまわりに五つ六つの小さな小屋ができあがりました。

先生はいりようなものを全部用意してきていました。

おいてゆきました。なぜおいてゆくのか、先生はそのわけをいいませんでしたが、あとで考えると、例によって先生には、ちゃんとした考えがあったのでした。

この旅は、なかなか手間のとれる苦しい旅でした。ゆきは一日半かかり、荷物をしょって帰ってくるのに二日かかりました。最初着陸した場所に行ってみると、私たちの荷物のおいてあるまわりの砂の上に、例の巨人の足あとや、そのほか見なれない足あとが点々とついていて、ここでも何者かが姿を見せずに、こっそりと、私たちのようすをうかがっていたことがわかりました。

巨人の足あとがいちばんはっきり残っている場所をしらべて、先生は、巨人の

忠実なチーチーは、三時間目ごとに、奇妙なくだものを運んできました。

出したり、ちょっと出したりして、また、枝をいろんな角度に向けて風にあて、いろいろちがった音階を出したりして、そのほか、さまざまの変わったやりかたをしていることがわかりました。

私は朝から晩まで、せっせと筆記をつづけるので、毎晩、寝床につくころには、死んだようになりました。私の書きとめたノートは、ぞくぞくたまってゆきました。先生は、ノートにする紙をさいげんなく用意してきているようでした。

チーチーは、私たちの食事の世話をしてくれました。これはありがたいことでした。そうでもしてくれなかったら、おそらく私たちは、働きすぎて死なないまでも、飢え死にしてしまったことでしょ

10 月世界のマジェラン

いったい私たちは、なんのために月世界によばれたのだろう。なぜ月世界の動物たちは、私たちに、へんな態度をとっているのだろう。なぜ巨人は用心ぶかく私たちを避けているのだろう。そういうような不安は、さしあたっていっさいおあずけにしておいて、先生は、わき目もふらず植物語の研究に心を打ちこむことになりました。

先生は、こんなふうに無我夢中で働くことが楽しいのでした。食べることも眠ることも、思いついたとき、ちょっと簡単にするだけでした。こうして火の玉のような勢いで、興味ある手がかりを追ってゆく先生と歩調をそろえて働くのは、ほかの者にはずいぶん骨のおれることでした。しかしまた、やりがいのある仕事でもありました。一日半ほどのうちに先生は、木がじっさいに枝を動かしてたがいに話しあっている、という事実をたしかめました。けれど、これはまだほんの序の口にすぎませんでした。やがて先生は、木の身ぶりをまねる練習をかさね、みずから木のような身ごしらえをして森の空地へ出かけてゆき、ジャングルの老木たちと、どうにか話をすることができるようになりました。

そうしているうちに、ほかにまだ——またほかのやりかたで、何かことばのようなものがかわされているということ——がわかりました。たとえば、においを出すにも、一定の方法でモールス記号のように、長く

一とびに二、三メートルもとんでしまうのが、あたりまえのことでした。

この一周旅行の準備のため、先生はとくに私にやかましくいって、毎日歩いた距離を正確に記録させました。これで方角ということが問題になってきました。私たちはいままでのところ、一定の方向へまっすぐ歩いたことがあまりないのです。それは一つには、なかなか容易でないからです。また一つには、研究しようと思うもの——木の葉、足あと、水のある場所、地質など——の研究のため、私たちは、いろんな方角へ歩きまわるからです。でも、ここで方角というのは、地球の地理学でいうような磁石で見る方角ではありません。まえにいったように、先生がパドルビーから持ってきた磁石は、まるっきりまともな働きをしてくれませ

う。忠実なチーチーは、私たちがどんなところにいるときでも、三時間目ごとに、例の奇妙なくだものと野菜のごはんに、きれいな飲み水をそえて、運んできてくれるのでした。

私はこの探険旅行の正式な記録係として(これは骨のおれる仕事でしたが、私はこの任務をほこりにしていました)、先生の博物学上のおぼえを記録する一方、いろいろな測定の結果を記録するのでした。温度や気圧や時間などのことは、まえにすこしお話ししたと思います。そのほか測定しなければならないことがらのなかには、その日に旅をした距離の計算などもふくまれていました。これは、なかなかむずかしいことでした。先生は歩数記録計(1)を持ってきていました。けれど地球と月世界では引力の強さがちがうので、一歩というのが地球の一歩とは全然ちがいます。しかも、それがいつも、まちまちです。くだり坂になっているところでは、ことさら大またに歩くつもりでなくても、一とびに二、三メートルもとんでしまうのが、あたりまえのことでした。のぼり坂のところでさえ、ふつうの足幅よりずっと大またに歩くことが、よくありました。

先生が月を一周する計画をもち出したのは、ちょうどこのころでした。みなさんもごぞんじのように、世界をはじめて一周した人はマジェランです。それは、じつに大した手柄でした。地球には陸の部分より水の部分が多いのです。それに反して、月世界では水の部分より、かわいた土地のほうが多いのです。大きな海といったものは一つもありません。水といえば、わずかに湖とか、湖のいくつかつづいたものくらいでした。ですから月を一周することは、距離にすれば短くても、マジェランの航海よりも、はるかに困難な仕事でした。

まったく同じでした。それが何千万キロもはなれていても、そんなことは問題ではありません。とにかく、それは私たちにとって、なじみの深いものでした。

私たちが爆発性の木を見つけたのは、こうして磁石の代用になる道具を研究しているときでした。先生は、方角を知る手がかりになりそうなものを、いろいろ試験したすえに、ある日、突然こういいました。

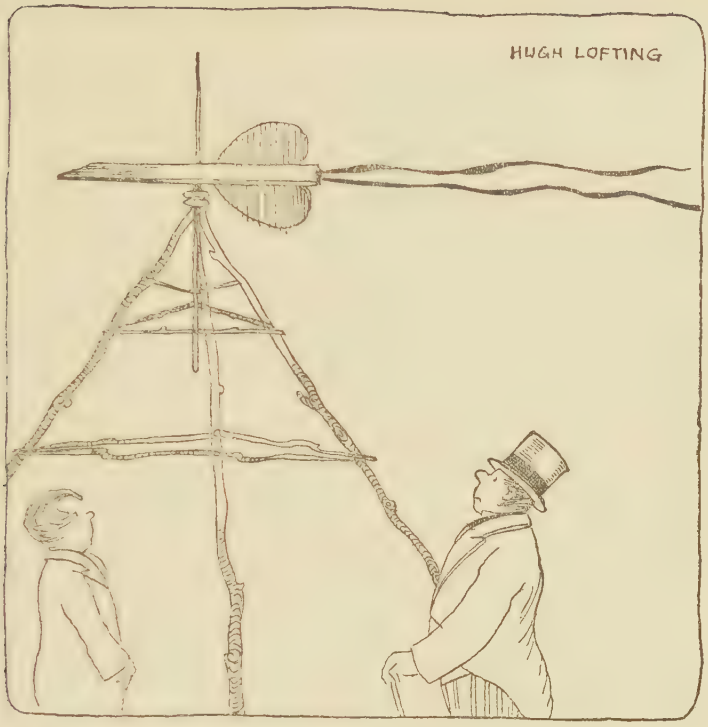
「そうだ、スタビンズ、わかったよ。——風だ！　風はいつも同じ調子で吹いているだろう。それに、どうも同じ方角から吹いているようだ。——多少の変化があるにしても、それは予測できる規則的な変化にちがいない。とにかく、しらべてみることにしよう。」

さっそく私たちは、風をテストするいろいろな機械の組み立てにとりかかりました。私たちは木の皮をむいて、軽い長いリボンをつくり、それをとりつけて風見をつくりました。そのとき、先生が煙のことを思いついたのです。

「煙を適当な方法で出しておけば、風が変わったときには、においでわかるだろう。そうすれば、われわれは、一方では植物や植物語の研究をつづけることができる。」

そこで私たちは、火を——煙のもくもく出る焚火を——焚く用意にとりかかりました。この煙をたよりに、風がどのくらい方向を知る手段として信頼できるか、しらべようというのです。

（1）歩数記録計——ポケットに入れて歩くと、何歩あるいたかということが記録される小さな機械で、それをもとにして歩いた距離を計算することができる機械。



私たちは、風見をつくりました。

ん。それで、何か磁石にかわるものをさがすことが必要になりました。

例によってドリトル先生は熱心にこの問題と取り組みました。先生はすぐれた数学者です。ある日の午後、先生はノートと航海暦をひろげて、星の位置からじぶんの位置や進んでゆく方向を見つけ出す表をつくりあげました。ふしぎなことに、ここでは星を見ていると、妙に心がなぐさめられるのでした。地球にいたときには、遠い遠い空のかなたにある、手のとどかない縁どおい星が、ここでは、にわかに親しみのあるものに思われてきました。きっとそれは、星だけが、まえと変わらないただ一つのものだからでしょう。月から見る星は、地球で見る星と

なるべく、木の生えてない丘の上をえらびました。

実験が成功するかしないかは、いろんなことに影響をおよぼすので、じつにやっかいな仕事ですが、しんぼうづよくやるほかありません。そこで私たちは、またジャングル地帯へ引き返し、いろんな木の見本を集めて試験することになりました。

この見本を集める仕事は、かなり手間どりました。この仕事のできるのは、先生と私だけですから。チーチーも小枝を集めて手つだってくれましたが、私たちがいちばんほしいのは、そうとう大きな木で、かなり長く燃えつづけるものでなくてはいけません。

とにかく、何種類かの木を集めることができたので、それを燃やしてみると、

11 月世界一周の準備

私たちはこの焚火を、どういうふうに仕掛けたらいちばん満足な結果がえられるか、いろいろ苦心して工夫をかさねました。まず第一に、火を起こす場所を注意ぶかくえらびました。なるべく、木の生えてない丘の上や山の肩などをえらびました。火が下草に燃えうつって、火事になるおそれのないようにするためです。つぎの問題は、燃料でした。どんな木が煙を出すのにいちばんいいでしょう？

まえにもいったように、ここには枯木というものがほとんどありません。ですから、立木を切りたおして、それをかわかして使うよりほかありません。

そこで私たちは木を切りはじめました。けれど、いくらも切らないうちに、先生はふと良心のとがめをおぼえました。話をすることのできる木には、感覚があるかもしれないと気がついたのです。それと気がつくと、おそろしくなりました。私たちは木に向かって、そのことをたずねてみる勇気もありませんでした。一同はそれからというもの、もっぱら地面に落ちている大枝小枝ばかりを集めました。そのために焚木を集める仕事は、いっそうむずかしくなりました。はるか遠くから見たり、においをかいだりできるような、大きな焚火をするためには、ずいぶんたくさんの燃料が必要です。

いろいろ相談したすえ、この仕事はいそがず、ゆっくりやるほかない、ということにきまりました。この

「合図を送ってよこしたのは、あの男だというのかい？」とチーチーがいいました。

でしょう！　あれほど遠くから見える煙を出すには、何千トンという焚木を積みあげたにちがいありません。」

「そして、いったい、だれがそんな焚火をしたのでしょう？」と、チーチーがいいました。

しばらくのあいだ、みんなだまりこんでいました。やがて、ポリネシアが口をひらいて、ちょうど私が思っていたとおりのことをいいました。——たぶん先生も同じことを考えていたにちがいありません。

「あの焚火をした人間は、」とポリネシアが、しずかにいいました。「一日のうちに、ずいぶんたくさん材木を運ぶことができたにちがいありません。」

あるものはぜんぜん燃えませんでした。またあるものは、よく燃えましたが煙を十分に出さないのです。

たぶん五番目くらいの木を試験したときだと思いますが、私たちは、あやうく大きな事故をおこすところでした。月世界では、火の燃えたあとというものを、めったに見かけません。（あの煙の合図の打ちあげられた場所だけはべつですが。）私たちがしらべてみたかぎりでは、森のなかにも焼跡らしいものは一つも見られませんでした。それで私たちは、焚木の試験のため、マッチをするとき、とても用心ぶかく気をつけていたのです。

ところが、ある日の夕方、先生がシダのような（竹に似た）木に、マッチを近づけたとたんに、その木が火薬のようにパッと燃えあがり、もうすこしのことで先生は大やけどをするところでした。

チーチーと私は、先生を助け起こして介抱しました。危機一髪というところでしたが、さいわい、たいしたけがもないことがわかりました。手がすこし火ぶくれになっている程度のことで、先生は私たちにいいつけて、小さな黒い薬袋から、炎症をとめる薬を取り出させました。

木が燃えあがったときには、白い濃い煙がもくもくと立ちのぼりました。そして、火薬が爆発するような音がしてから後も、何時間ものあいだ、濃い煙が、もうもうとあたりの丘のまわりに立ちこめていました。

私たちが先生に応急手当てをすると、先生はこっちに向かって、いま、いきなり、わしに尻餅つかせたこの木こそ、あのパドルビーで見た信号の煙を打ちあげるのに使った材料にちがいない、といいました。

「でも、ほんとに先生、」と、私はいいました。「あんな遠くから見えるなんて、どんな大きな焚火だったん

「スタビンズ、わしには、わからんよ。」と先生は、むっつりした顔でいいました。

りになるものが見つかったようなものだな。」

私はその後、ポリネシアとチーチーがそばにいないとき、一、二度、先生に向かって、私たちをここへよんだのは月の動物たちでなく、月の巨人だという考えについて、先生にたずねてみました。みんながそろっているときより、私ひとりのほうが、先生も心おきなく話せるかもしれないと思ったのです。けれど先生は、何か妙に話したくないようなようすでした。

「スタビンズ、わしには、わからんよ。」と先生は、むっつりした顔でいいました。「ほんとに、わからんのだ。じつをいうと、いま、わしはそのことを、あまり問

「では、合図を送ってよこしたのは、あの男だというのかい？」とチーチーが、おどけた小さな目を、あきれたようにみはっていいました。

「そう思ったって、かまわないでしょう。」ポリネシアはそういって、考えこんでしまいました。そしてチーチーが何をきいても、ひとことも返事をしませんでした。

「きっとそうだ。」と、しまいにチーチーがいいました。「もし、あの男が合図したのだとすれば、ほかのこともみんな、あの男がしたのにちがいない。ガを迎えによこしたのもあの男なら、先生の力をかりるため、先生をここへよんだのもあの男にちがいない。」

チーチーはじぶんのこの考えについて、先生がどういう答えをするかと、先生の顔を見あげました。けれど、先生もポリネシアと同じように、何もいいませんでした。

とにかく、こんな小さな事故もありましたが、煙で風の向きをしらべるテストは上首尾におわりました。風は、すくなくとも三、四日のあいだ、たえず同じ方向に吹いていますので、それを知る手がかりとして、りっぱに役立つことがわかりました。

「よいかね、スタビンズ。」と、先生はいいました。「われわれは、一周旅行に出るまえに、もう一度テストしてみなくてはならん。いま、この風は、たえず一つの方角に吹いているが、一週間したら、べつの方角に変わるかもしれないからな。それから、風が山脈にあたると進路がまがるから、それにまよわされないように気をつけなければならん。しかし、いままでしらべたところでは、とにかくこれで、どうにか磁石のかわ

12　おしゃれのユリ

もちろん、月のような小さな天体でなかったら、私たちの旅はこんなにうまくはゆかなかったでしょう。思えば、おとなひとり、少年ひとり、サル一匹、オウム一羽という顔ぶれの探険隊で、月世界の一周をくわだてるということが、そもそもおかしなことでした。

最初着陸した地点を出発するときには、まさか私たちは、月の一周旅行をすることになろうとは思っていませんでした。ところが自然のなりゆきで、そういうことになってしまいました。はじめのうち、私たちは、やがて何か動物が姿をあらわすだろうと思って歩いてゆきました。けれど動物は出てきませんでした。なおも進んでゆくうちに、例の植物語の問題がもちあがって、先生は熱に浮かされたようにその研究におぼれたので、もっとさきへ進むことが必要になりました。私たちは一つの場所からほかの場所へ何かをしらべにゆくときには、かならず用心のため、目じるしになるもの――野宿の荷物――を残しておき、もしこまったときには、いつでもそこへ引き返して、食べ物と寝床にありつけるようにしておきました。

こうして、道をさぐりながら旅をするときには、ポリネシアが非常に役に立ちました。もはや先生は、まえもってかならずポリネシアを空に放って道の下見をさせ、ようすを報告させることにしていました。それをきけば、つぎにはどんなことに出会うか、だいたいの見当がつきました。先生はまた、携帯用の小さな測

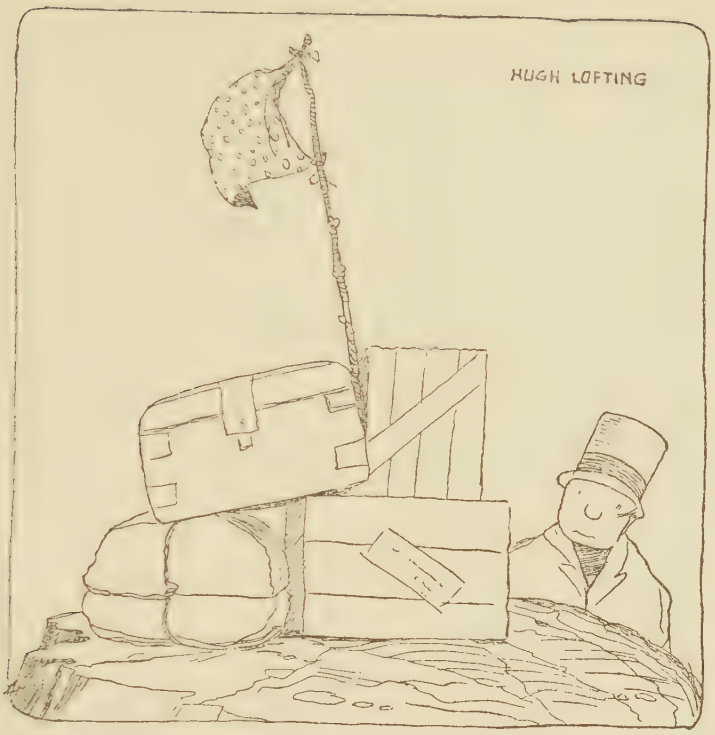
題にしていないのだ――すくなくとも、それはいそいできめる必要はあるまいと思っている。いっぽう、月の植物界の分野は、百人もの植物学者が、一年も二年もかかって研究するほどの大問題だ。われわれはまだ、ほんのうわっつらをなでたにすぎんのだ。これから、月の反対がわの、まだ知られていない地方に進むにつれて、どんな大発見をするか――それは、その――とうてい、だれにもわからんのだ。月世界の住人や動物が、われわれと連絡しようという気になれば、またなんとかいってよこすだろう。それまでは、われわれには、われわれの仕事がある。――ありすぎるほどの仕事がある。ほんとにわしは、いろんな専門家を――測量技師、地図製作者、地質学者など、みんなつれてくるべきであった！　考えてごらん、われわれはいま、新しい世界の道をさぐりさぐり歩いているが、じぶんのいる位置さえ満足にはわかっていないのだ。もっとも、わしは、いままで歩いてきた道筋の、だいたいのことくらいはわかっているようだ。わしはその道筋を、地図にして書きとっているのだがね。しかしスタビンズ、ほんとうなら、わしは本式の地図を――山や谷や、川や湖や高原を、のこらず書きこんだ地図をつくらなくてはならんのだ。――どうしてどうして、たいへんなことだよ。とにかく、できるだけのことは、やらなくてはならん。」

た。もう私たちは安心して、いままでの森をはなれ、月の裏がわの神秘な世界へ分け入ってゆくことになりました。

だんだん奥地へ進むにつれ、先生の植物語はめきめき上達してゆきました。ときどき、私たちは四、五日も一つところに足をとめて野宿しました。すると先生は新しい機械を組み立てて、植物語の新しい問題と取り組むのでした。植物語の研究は、しだいにたやすくなってきたようでした。あたりの植物は、たしかに、ますます生き生きとして、形も複雑になってきました。このころには、もう私たちも植物界の怪しいできごとにだいぶなれていました。そして、私のように科学を心得ない人間の目にも、このあたりの花や灌木が、たがいに、さまざまな方法で、自由にことばをかわしていることが、はっきりわかりました。

私は、のちに先生が「おしゃれのユリ」と名づけた花に、はじめて出会ったときのことを忘れません。それは長い、すんなりした茎をもった、あざやかな色の大輪の花でした。そして、ちょうどお茶の会に集まった人々が、たがいに話をしたり、ささやきあったりしているように、首を集めてざわざわと身動きしていました。その花は、はじめ遠くから見たときには、さほど動いていませんでした。けれど、私たちが近づいてゆくにつれ、まるで私たちの姿を見て、心配するか、またはおもしろがっているかのように、しだいにはげしく動きはじめました。

たしかにこの花は、いままで見た花のなかでいちばん美しい花でした。風は、あいかわらず同じ調子で吹いていました。それだのに、このたくさんの花の群は、私たちが近づくにつれて、ざわざわとはげしく頭を



私たちは、かならず用心のため、目じるしになるものを残しておきました。

量機械をいくつか持ってきていましたので、私たちが進路を変えた場合には、その機械を使って、およその地点を地図に書きこむことにしていました。

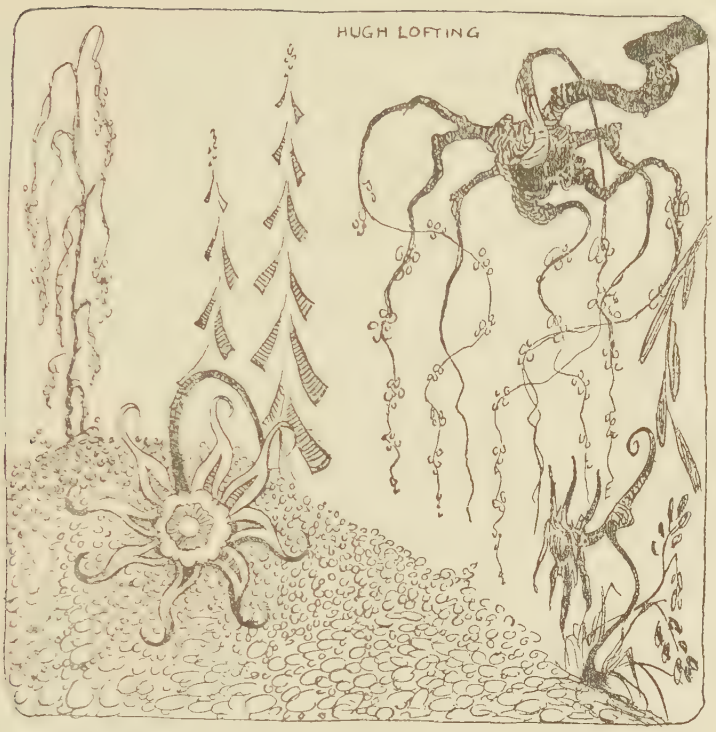
はじめのうち私たちは、最初に見つけた、くだもののみのる森を、あまりはなれてはいけないと思っていました。私たちは、その森のくだものや野菜を、ごはんのかわりに食べていたのです。けれど、まもなくポリネシアの偵察報告によって、ゆく手にあたって森がまだいくつもあるということがわかったので、さっそく、その道の専門家であるチーチーを調査にやりました。やがてチーチーが帰ってきて、このさきの森には、いままでの森より、もっとよい食べ物があるといいまし

私たちは、静かにして、軽く夕はんをすませると、ごろりと横になって、毛布を引きかぶりました。あたりが暗くなるにつれて、森の音楽がしだいに高まってきました。それは森じゅうの植物が、じぶんたちのすみかにずかずかはいりこんできた旅人のことを、話しあっているようでした。

そしてまた、木の音楽にまじって、何かブンブン飛びまわるような物音が、私たちの寝つくまで、たえずきこえていました。例によって大きな昆虫が、よその星からやってきた人間どもを見張って、あたりを飛びまわっているのでした。

私が出会った月世界の植物のなかで、「おしゃれのユリ」はいちばん変わった、いちばんおもしろい植物だったような気がします。二日ほどのあいだに、先生のユリ語の研究はめざましい進歩をとげました。先生のお話では、それは先生の手柄というよりも、むしろこの花が特にすぐれた知能をもっていて、進んで研究を助けてくれたおかげだということでした。けれど、もし先生が、あらかじめ木や灌木の植物語を相当深く研究していなかったら、いくらユリの花でも、もちろん、これほど早く先生とことばをかわすことはできなかったろうと思います。

最後の三日目に、チーチーとポリネシアと私は、先生がじっさいにユリの花と話をしているのを見て、びっくりしました。先生はもう、「おしゃれのユリ」が、おたがい同志でことばをかわすときには、おもに花を動かして話をするということも見つけていました。ユリの花は、ほかの種類の植物や木と話をするときには、ほかの方法を用います。また、鳥や昆虫と話すときにも、べつな方法を用いることが、のちになってわかり



あたりの植物はますます生き生きとしてきました。

ふりだしたので、ひとまず先生はここに足をとめて、その花を調査することにしました。

私たちは野宿する用意をしました。

——月では、テントをはることもいらず、火をおこすこともいらないので、めんどうはありません。ただ荷物をとき、食べ物をとり出し、寝床を用意すればよいのです。

私たちは一日じゅう歩きつづけたあとだったので、くたくたに疲れていました。ユリの花園(ユリは沼地のような場所にありました)の向こうには、また新しく見つけたジャングルがあって、いよいよふしぎな木や、花をつけたツルクサなどが生い茂っていました。

の知識などぜんぜんない人でも、また月世界の植物のことを知らない人でも、このふしぎな花を見たら、こういう風変わりな特徴にすぐ気がつくでしょう。ちょっと見ただけで、相手が植物というよりも、人間を見るような感じをおこさせます。そして、この花と話をすることは——または、話をしようとすることは——ごくあたりまえのことのように思われます。

先生の持ってきたたくさんのノート・ブックのうち、私はその二冊に、「おしゃれのユリ」と先生との会話を、どっさり書きこみました。先生はその後も、月世界の植物について知りたいことが出てくると、よくこのユリの花のところへたずねてゆきました。それはなぜかというと——先生のお話では——この花は植物のなかで（月と地球で見るかぎり）最も高度に進化したものでした。

花の直径は四十五センチぐらいもあったでしょう。

ました。けれど、おたがい同志で話をするときには、花をゆり動かすのがふつうのやりかたでした。

　このユリの花が、ひろい川岸にいちめんに咲きみだれているところは、目もさめるばかりの美しいながめでした。花の直径は四十五センチぐらいもあったでしょう。ラッパのような形をした、あざやかな色の花でした。花びらの地色はほんのりとしたクリーム色で、中心のまっ黒いしべのまわりには、その地色の上にスミレ色とオレンジ色の大きな点々がついていました。葉は濃いオリーブ色でした。

　けれど、この花でいちばんふしぎなことは、妙にかしこい生きもののようなようすをしていることでした。たとえ博物

はじめてそれをかがされたとき、チーチーは気絶してしまいました。

ました。ユリの花は、じぶんのもっているかぎりのにおいを、つぎつぎに出してみせましたが、このいやなにおいだけは、先生にたずねられるまで出さずにいました。はじめてそれをかがされたとき、チーチーはほんとうに気絶してしまいました。それはちょうど毒ガスのようなものでした。それが目にはいると涙がポロポロ出てきました。先生と私は、気を失っているサルをだきかかえて逃げ、あやうく窒息をまぬがれることができました。

「おしゃれのユリ」は、じぶんがたいへん迷惑をかけたのに気がついて、いままで私のかいだこともないような快い、ふんわりとしたにおいを、大いそぎでふりまきはじめました。たしかに、ユリの花

13 さまざまのにおいを出す花

私たちがはじめて「おしゃれのユリ」の咲いている沼地に足をふみこんだとき、もう一つふしぎな気がしたのは、さまざまの種類のにおいが一度に鼻をおそったことでした。そのあたり一キロ四方には、ほかに花らしいものはないのです。沼地はぜんぶユリの花に占領されていて、ほかの植物がそのなかにまじっているとも見えません。それだのに、すくなくとも六種類以上のにおいが、はっきりとかぎわけられました。はじめのうち、たぶんこれはジャングルのほかの植物か、ヒースの花のにおいが、風にのってくるのだろう、と思っていました。でも、しらべてみると、風はまちがいなく砂漠のほうから吹いていて、こんな強いにおいが風にのってくるはずはありません。

もしかするとユリの花が、幾種類ものにおいを自由自在に出せるのではあるまいかということを、最初に思いついたのは先生でした。さっそく先生は、その研究にとりかかりました。そして四、五分のうちに、はたしてそうだということを、たしかめました。先生は、犬のジップがいなくて残念だ、ジップのすばらしい鼻は、この研究に非常に役立っただろう、といいました。しかし、ユリの花が先生の頬みに応じて、すくなくとも五、六種類のにおいを出せることぐらいは、ふつうの人間の鼻にも、はっきりわかりました。

そのにおいは、たいてい非常に快いにおいでしたが、なかに一つ一つ、気絶しそうなほどいやなのがあり

「スタビンズ、用意はいいかね？」

す。うす暗がりなら本当の夜なのです。

——キャンプを出かけるとき、先生はうしろをふりかえって、肩ごしに、今晩は研究がはかどるかもしれないから、ノートを一冊余分に持ってきなさい、といいました。それで私は三冊も余分にノートを用意して、先生についてゆきました。

ユリの花園の二十歩ほど手前で立ちどまると(ユリの花がチーチーを、あやうく窒息させかけた事件があってから、私たちはキャンプを数百メートル遠くへうつしていました。)先生は地面にしゃがんで、しきりに首を左右にふりはじめました。すると、すぐにユリの花もそれに答えて、頭をふったり、うなずいたり、ゆらゆら動かしたり、だらりとさげたり

はいっしょけんめいになって、私たちをよろこばせ、私たちと親しくなりたがっているように思われました。はたして、その後、ユリの花とドリトル先生がかわした会話によると(その会話を私は一句もらさず筆記したのですが)この花たちは、月世界のすみかからひと足も外へ出たことがないにもかかわらず、偉大なる博物学者ジョン・ドリトル先生の名まえをききおよんで、もう長いこと、先生のおいでを待っていたのだということでした。このユリの花に会って、はじめて私たちは月世界で、友だちらしいものに出会ったような気がしました。

先生と月世界の植物がどんな会話をかわしたか、それをみなさんにわかっていただくためには、私の日誌のなかから先生と花の会話の一部を、そのままここにうつしてみるのがよかろうと思います。もちろん、この会話は、私が筆記できるように、先生がその場で通訳してくれたのです。しかし、これを読んでもまだ、そもそも人間が花と話をすることができるかどうか、疑いをもつ人もあるでしょう。でも私は、そんなことはあまり気にかけません。ドリトル先生がいままでに、動物語、鳥語、虫語を、つぎつぎとおぼえていったいきさつを知っている人は、とうとうこの偉大な学者が、まれに見るすぐれた知能の植物に出会って、話をかわすことができたとしても、それほど意外には思わないでしょう。

できごとの多かった当時の日記をめくってみると、先生がはじめてこの花と話をかわしたときの光景が、ありありと目のまえに浮かんできます。それは、たそがれになる一時間ほどまえのことでした。月世界で、たそがれどきというのは、昼間の弱々しいあかるみがすこし弱まって、うす暗くなるまでのひとときで

べったりしながら、世間のニュースをきかせます。これ以上、よくばることはないでしょう?」

先生「そうだ、たしかにそうだ。いや、なにもおまえが、不足に思うはずだというのではない。しかし、おまえも、ときには動いてみたい——旅行してみたいと思わないかね?」

ユリの花「とんでもない! あんなに走りまわって、何になるのでしょう? けっきょくは——住みよい家なら、わが家にまさるところなしですもの。わたくしたちは、楽しい、安全な生活をしています。あたふた、かけずりまわっている人たちは、いつも事故をおこすでしょう。足を打ったりなんかして。わたくしたちは、そんな目にあうことはありません。わたくしたちは、じっとすわって、世のうつりかわりを見ています。そして、ときどき、おたがいの仲間同志、おしゃべりをします。また、鳥や虫が、いろんな話をきかせて楽しませてくれます。」

先生「そして、おまえは鳥や虫のことばが、ほんとにわかるのだね! ——じつに、おどろくべきことだ。」

ユリの花「そうです、よくわかります。それに、カブトムシやガのことばも、わかります。」

これは先生とユリの花との会話を、はじめてノートにとったときの記録ですが、話がこのあたりまで進んだときに、私たちは「おしゃれのユリ」が、ものを見ることができるという、おどろくべき事実を発見しました。まえにもいったように、いつも月世界の光線はいくぶんうす暗いのです。先生はユリと話をしているうちに、タバコを一服のみたくなったので、ユリたちに、タバコのにおいはいやでないか、とたずねました。

しはじめました。

「スタビンズ、用意はいいかね?」と、先生はいいました。

「はい、よろしいです。」と私は、鉛筆の芯が十分出ているかどうか、たしかめました。

「よし、それでは筆記して。」と、先生はいいました。——

先生　「おまえは、こういう固着生活——つまりそれは、いつも一つところにいて、動くことのできない生活という意味だが、おまえはそれがすきかね?」

ユリの花　(五、六本、声をそろえて答えているようすで)「ええ、もちろんすきです。動けなくたって、かまいません。世のなかのできごとはみんなわかりますから。」

先生　「だれからそれをきくのかね?」

ユリの花　「ほかの植物や、ミツバチや、鳥などが、何もかも知らせてくれます。」

先生　「おや、そうするとおまえたちは、ミツバチや鳥なんかとも話をするのたね?」

ユリの花　「そうです、もちろんです!」

先生　「だが、ミツバチや鳥などは、おまえたちとはべつの種類の生きものではないか?」

ユリの花　「それは、そのとおりです。でもミツバチは、わたくしどものところにミツを集めに参ります。鳥は——ことにさえずる小鳥たちは——わたくしたちの葉にとまりにきます。そしてうたったり、しゃ

こめて、マッチの火から顔をそむけたのを見て、マッチの火くらいの光でも、月世界の昼間のあかるさより、はるかにあかるいことがわかりました。

先生はマッチをすりました。

ユリの花は、タバコというものをかいだことがないから、わからない、といいました。そこで先生は、それではパイプに火をつけてみて、もしユリたちがいやだったら、やめることにしよう、といいました。

先生はポケットからマッチ箱をとり出して、マッチをすりました。その火がパッと燃えあがると、私たちはいまさらのように、月世界の光線が、いかにもやわらかで、ほのぐらいのに気がつきました。しかし、煙を出す木の試験をしたときには、もっと大きな焚火をしたのですが、あの実験の結果に気をとられて、ほかのことには気がつきませんでした。いま私たちは、ユリの花がいっせいに頭を引っ

先生が、手で花のまわりに輪をかきました。

先生はこの宿題をとくために、何時間も何日も研究をつづけました。でも先生は、どうもはかばかしい結果が得られない、といいました。(この花は、ふつうの目に似た器官などぜんぜんもっていませんが)それで先生は、はじめ視覚だと思ったものは、何かほかの感覚ではあるまいか、それがただ高度に発達しているために、視覚と同じ働きをしたのだと、さしあたって、そう考えるよりほかありませんでした。

「ねえ、スタビンズ。つまり、これを要するにだね。」と、先生はいいました。「つまり、われわれ人間に五感しかないからといって、ほかの生物に五つ以上の感覚があってはならん、ということには

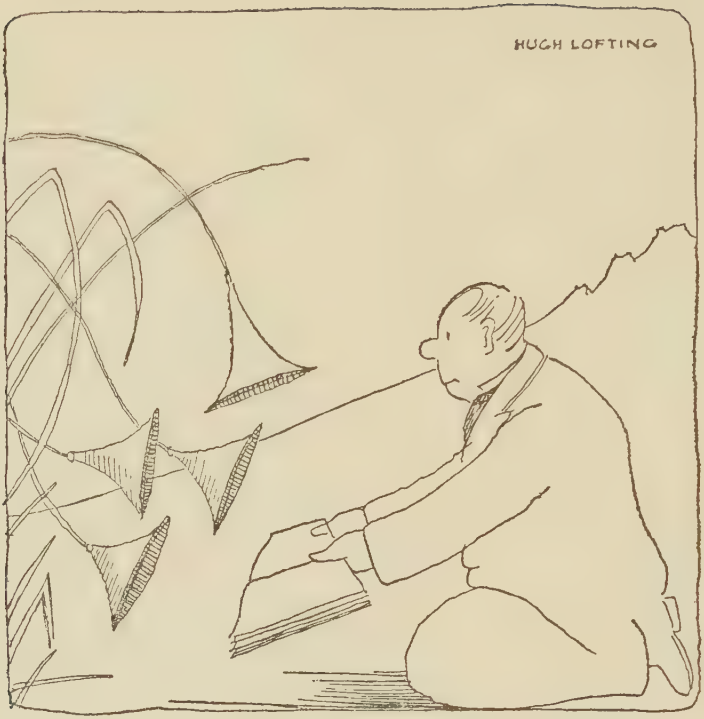
14 花にも鏡を

ユリの花がマッチの火に顔をそむけたので、これを見た先生は非常に興味をおぼえました。あかるい光が見えたとしても、ユリの花がこんな反応を示すことは、まったく思いがけないふしぎなことでした。

「ねえ、スタビンズ。」と先生は、ひそひそ声でいいました。「まさかユリの花は、火の熱さを感じるわけではあるまいがね。こんなにはなれているのだもの。もし、光のせいで頭を引っこめたとしたら、この花は光を感じる器官をもっているわけだ。そして、おそらく、物を見ることができるのではあるまいか。ひとつ、それをしらべなくてはならん。」

そこで先生は、ユリの視覚について、できるだけのことを知るために、ユリたちに向かっていろいろなことをたずねました。たとえば片手をつき出して、わしがいま何をしたかわかるか、とたずねました。きかれるごとに、ユリの花は(先生がなんの目的でそんなことをきくのかはわからないにしても)先生の動作をまちがいなくいいあてました。先生がまた、大きなユリの花のそばに近づいて、手で花のまわりにぐるぐる輪をかくと、花は手の動きを追ってその方向へ頭を向けるのでした。

この実験の結果、「おしゃれのユリ」はなんらかの方法で、物を見るということが、はっきりとわかりました。ただ、目の役目をする器官が、花のからだのどこいらにあるか、それがなかなかわかりませんでした。



先生は、色ずりの花の絵を、ユリの花のまえに出しました。

いま見た花がだれなのか、知りたくてたまらないようすでした。そして、いかにも人間じみたやりかたで、その花の(というよりは、その花の一族の)うわさをはじめました。私たちは、先生がのちに「植物の社交界」と名づけたもののありさまを、このときはじめてのぞくことができたのです。美しい花たちは、見なれぬ花の肖像を見せられると、ちょうど人間の貴婦人たちのようにおどろいて、あの外国の名花はだれなのか、どういう暮らしをしているのか、いろいろと知りたがっているようすでした。

じつは、このユリの花が、こんなに容貌ということに強いあこがれを見せたので、先生はこの花の一族を「おしゃれの

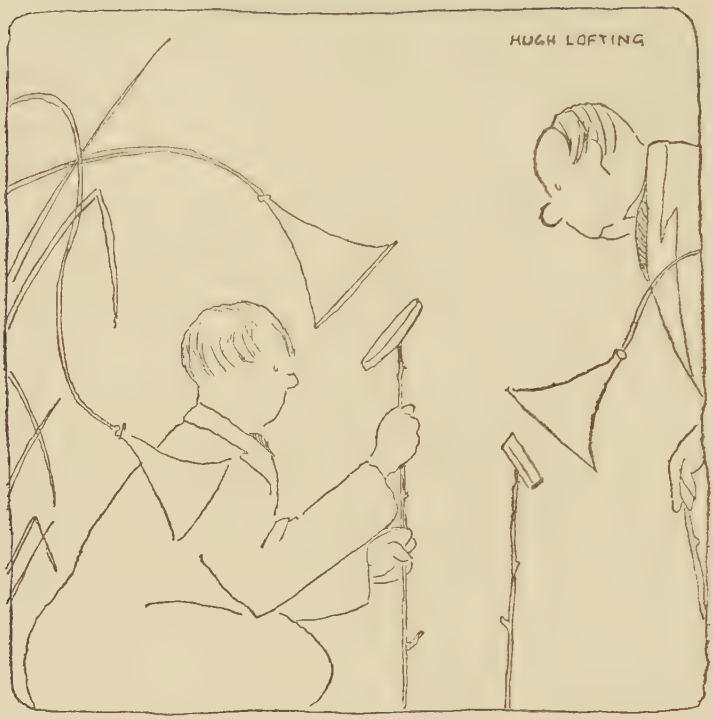
ならないからね。ある種の鳥に第六感があるらしいことは、もう久しい以前から知られている。だが、この花が――目をもっていないのに――光を感じ、色や、動きや、形を知って、まるで見たようにいい当てる。どうもこれは……ええい！　そうだ、もしかすると、目よりほかのもので見ることができるのかもしれん。」

その晩、一日の仕事が終わってから、先生は荷物のなかをかきまわして、書類のあいだから、荷づくりのときにまぎれこんだ色ずりの、花の種のカタログをさがし出しました。ドリトル先生は、ふだんから熱心な園芸家で、ほとんどイギリス全国の種屋や苗屋から、カタログを取りよせていたのです。

「そうだ、スタビンズ！」と先生は、美しいカタログのページをめくりながら、嬉しそうに大きな声でいいました。「いいことがある。あのユリの花が、もし目が見えるなら、これでテストしてみればいいわけだ。――この色ずりの花の絵で。」

あくる日、先生はそのカタログを持って、「おしゃれのユリ」に会いにゆきました。その結果、いろいろおもしろいことがわかりました。先生は、アサガオや、キクや、タチアオイなどの、色あざやかな絵をとり出すと、よく光線があたるようにして、それをユリの花の顔のまえに出しました。その絵が、たちまちユリの花のあいだに大評判をまきおこしたことは、チーチーや私の目にもすぐわかりました。ラッパ型をした大きな花たちは、絵をもっとよく見ようとして、すんなりした茎をゆらゆら曲げながら、身をかがめてまえへのり出しました。そして、おたがいに顔を見あわせて、品さだめでもしているかのようにしていました。

あとで先生は、花の会話を翻訳してくれましたので、私はそれをノートに書きとめました。ユリたちは、



空罐のふたなどを棒のさきにつけて、立ててやりました。

その話をきいた先生は、すぐに研究のほうはあとまわしにして、この不幸なユリのために、干あがってしまった水鏡のかわりに、何か姿をうつす道具をつくってやることにしました。

私たちの持っていたまともな鏡といえば、先生のひげそり鏡くらいなものでした。しかし、これをやってしまってはちょっとつごうがわるいので、食料袋のなかから、くだものの罐詰の空罐や、いわしの空罐などの、いろいろのふたや底を見つけ出しました。それを粘土でみがいて、棒のさきにつけ、ユリが姿をうつせるように立ててやりました。

「ねえ、スタビンズ。」と、先生はいいました。「じっさい、自然界のすべての

ユリーと名づけたのです。ユリの花は、その奇妙なことばで、いま絵姿で見た外国の花について、何時間もくどくどと先生にたずねているのでした。先生が地球の花のじっさいの大きさを話してきかせると、ユリたちはひどくがっかりさせられたように見えました。けれどまた、外国に住んでいる同族が、すくなくとも大きさの点では、とうていじぶんたちに及ばないのを知って、いささか満足したようにも見えました。またドリトル先生が、地球の花や植物は(いままでわかっているかぎりでは)人間や鳥やそのほかの動物と、ことばをかわすことはないと説明してやると、花たちはふしぎそうにしていました。

容貌ということについて、なお質問をつづけているうちに、先生はユリの花がじぶんのみめかたちを、どんなにひどく気にしているか、わかったので、びっくりしました。ユリの花は水にうつるじぶんの姿を見るために、たえず水の上に身をかがめるということでした。また、鳥やミツバチが飛んできて、みごとなユリの花びらの上に、花粉を散らしたり、めしべの位置をゆがめたりすると、花たちが大あわてをすることもわかりました。

先生は、いろんなユリのグループとも、話をして、また、ひとりひとりにも会って話をききました。そうして調査をつづけているうちに、あるひと群のユリの花から、身の上ばなしをきかされました。そのユリたちは、もとはきれいな池や川のほとりに住んで、水に姿をうつしながら平和な生活を送っていましたが、悲しいことに、いつしか水が干あがって、いまでは姿をうつそうにも、ひからびた土しかなくなってしまったということでした。

きつけて私たちを殺そうとするかもしれないので、私たちはたえず、びくびくしていました。

やはり「おしゃれのユリ」が教えてくれた植物のうち、もう一つべつな植物から、先生は「繁殖の方法」について多くのことを学びました。たとえば、ある種の灌木は、じぶんの思うままに、ぐんぐん成長して、一年に何回も種をまきちらし、あたりの雑草や、ほかの灌木を押しのけてしまうことができる、ということでした。

私たちは、この植物をさがしまわっているうちに、「月のツリガネソウ」がいちめんに茂っている野原を通りかかりました。見わたすかぎり、つやつやしたオレンジ色の花が咲きみだれ、じつにみごとな光景でした。「ツリガネソウ」の、さわやかなにおいが立ちこめていました。先生の見こみでは、もしかしたらこのあたりに、あの大きなガの足あとがあるかもしれない、ということでした。それで私たちは、そのへんを五、六時間もぶらぶらしてみましたが、虫類の歩いたようなあとは、ほとんど見かけませんでした。

ものは、じぶんがかくありたいと思う姿に成長する傾向があるのだね。この花たちは、どんなものが美しいか、どんなものがみにくいか、はっきり感じる力をもっている。だから、われわれのつくってやったあの道具は、おそまつなものではあるが、ユリの進化に大きな影響をおよぼすだろう。」

月世界の冒険の思い出のうちで、いちばんはっきり私の心に浮かぶのは、「おしゃれのユリ」が新しい鏡をつくってもらったときの、嬉しそうなようすです。ユリたちは、花粉におおわれたじぶんの花びらが、やわらかな光に映えるのを見ようとして、首をあちらこちらに向け、また、風にゆられながら、たがいに姿をくらべたり、ささやいたり、おたがいのうわさをしたりしていました。

じっさい私はそう思うのですが、もしほかにさまたげられるできごとがおきなかったら、先生はまだ何カ月も満足して、この非常に進化した植物の研究をつづけていたことでしょう。たしかに、この花からは多くの学ぶべきことがありました。たとえば、この花は、やはり同じユリのなかにも、のちに先生が「毒ユリ」または「吸血ユリ」と名づけた種類のものがあることなど、教えてくれました。「毒ユリ」は、広い土地を占領するのがすきな性分で、ほかのものを押しのけるために、たまらなく、いやなにおいを出すそうです。そのにおいは「おしゃれのユリ」の出してみせた、あのいやなにおいよりまだ猛烈で、そのために、あたり近所のものはまもなく死に絶えてしまう、ということでした。

私たちは、「おしゃれのユリ」に教えられた道をたどってゆき、とうとう「毒ユリ」をさがし出して、この花とじっさいに会話をとりかわしました。でも「毒ユリ」は、いつなんどき、きげんを損じて、毒ガスを吹

「トミー、あなたはむやみに背が高くなるようですね。」

ときのお膳立ては、すべて月の住人どもがやったんだ。——なんでそんなことをしたのか、わからないがね。だけど、もし月の住人が、いつまでも姿を見せないで、ぼくらがじぶんの力で帰らなくっちゃならないとしたら、どんなことになるだろう。まず、二度と地球へ帰りつく望みは、ないといっていいだろうね。」

みんな、ぎくりとさせられて、暗い気持になったので、——しばらく話がとぎれました。

「いや、大したことはない。」と、先生がいいました。「なあにまだ、どんづまりとまでゆかないのに、思いわずらうことはないのだよ。とにかく、あの連中が——ええと、その——どんな者かわから

15 新しい着物をつくる

「さっぱり、わけがわからん。」と先生は、不きげんにいいました。「すくなくとも、われわれをここへつれてきてくれた、あのガだけは、われわれから逃げかくれするわけがないはずだがね。」

「ガが、かくれているのは、ガの本心ではないかもしれません。」とポリネシアが、つぶやくようにいいました。

「それは、どういう意味だね?」と、先生がききました。

「それはですね。」と、ポリネシアはいいました。「だれかしら、ガやそのほかの連中を、わたしたちから遠ざけているのかもしれません。」

「それは月の巨人のことかね?」と、先生はききました。

でも、ポリネシアが返事をしなかったので、この話はそれっきりになりました。

「そんなことは、ぼくは、それほど心配していないんだがね。」と、チーチーがいいました。

そこで、ちょっと話がとぎれました。けれど、チーチーのいうのをきくまでもなく、みんなはチーチーが何を考えているか気がついていました。

「心配なのは、地球へ帰るときのことなんだよ。」と、やがてチーチーがいいました。「ここへやってくる

先生の身長は、月へきてから約七センチのびていました。

んと知っている。――一メートル六十センチだ。荷物のなかに、五十センチのものさしがあるからね、さっそく、あの木のところで、じぶんで計ってみる。」

ものさしで計ってみると、先生の身長は、月へきてから約七センチものびていたので、先生はびっくりしました。私は、月へくるまえのじぶんの身長を、はっきりおぼえていなかったのですが、とにかく計った結果は、思ったよりずっと高くなっていました。胴まわりも、むろん、だんぜんふとくなっていました。そう思ってよく見ると、チーチーまでが、たてよことともに大きくなっていたようです。ポリネシアは、からだが非常に小さいので、まだまだ、よほど大きくならないと、

んが――あの連中が、われわれに敵意をもっているかどうか、まだはっきりわかったわけでもない。あの連中は、何かわけがあって、わざとゆっくりかまえているのかもしれん。あの連中の目には、われわれは、変てこな、奇怪きわまるものに見えるかもしれん。ちょうど、われわれには、あの連中や月世界のことが、奇妙に思われるのと同じことだ。これを忘れてはならん。われわれは、いらざる心配をして、びくびくすることはないのだ。ここは居ごこちのよい土地だし、研究したいことが山ほどある。植物は、たしかに、われわれに好意をもっていてくれる。もすこし気長に待てば、ほかの者――ええと、その――あの連中も、いつかは好意をもつようになるかもしれんのだ。」

ちょうどこのころ、もう一つ問題がおこりました。それは月世界の食べ物が、私たちのからだにおよぼす影響についてのことでした。それを最初にいいだしたのは、ポリネシアでした。

「ねえ、トミー。」と、ある日、ポリネシアが私にいいました。「あなたは、むやみに背が高くなるようですね。――それに、ふとってきましたね。」

「ええ、そうかね？」と、私はいいました。「そういえば、どうもこのあいだから、バンドがすこしきつくなったと思ってたんだ。だけど、ぼくは、あたりまえに育っているためだと思っていた。」

「それに、先生もそうなんです。」と、オウムがいいました。「ほんとに、先生も背が高くなられました。――もし、わたしの目がへんになったのでなければね。」

「よろしい、背丈を計るのは、ぞうさもない。」と、先生がいいました。「わしはじぶんの背の高さを、ちゃ

つで、しめつけられるようだ。いままでこれに気がつかずにいたとは、おかしな話だね。しかし、われわれは非常にいそがしくって、みんな仕事にばかり気をとられていたのだね。」

じっさい、月世界では珍しいものがつぎつぎに出てくるので、私たちはそれに心をうばわれて、ついじぶんたちのからだの変わったことには気がつかずにいたのです。けれど、それから三、四日たつと、からだがおどろくべき速さで大きくなりだしたので、私たちはほんとうに心を痛めました。私の上着は、文字どおり、はちきれました。先生の上着も同様でした。それで私たちは、この問題についていろいろ相談して、月世界で新しい着物をつくる方法があるかどうか、研究してみることになりました。

先生は裁縫の心得はないのですが、さいわい、着物や織物をつくる原料や植物に、いささか関係のある博物学なるものを心得ています。

「さて、どうしたものだろう。」と、ある日の午後、先生がいいました。私たちの着ているものは、たいていみんな小さくなって、このうえもう着られないことがわかっていたのです。「木綿は、まるっきり問題にならん。よしんば、綿の実があっても、つむいで糸にするのに、たいへんな時間がかかる。それをまた、織らなければならんのだからね。では、麻はどうか？　いや、これもだめだ。――ここでは麻のような植物は、何ひとつ見かけない。そうすると、残るのは木の根の繊維ぐらいのものだがね、あんな代物を、じかに肌に着なくてはならんとは、なんたることだ！　いや、とにかく調査して、何か見つかるか、どうか、しらべなくてはならん。」

そのちがいが月につきません。

けれど、私たちが月へきてから、めっきり大きくなったことは、もう疑う余地がありませんでした。

「なるほどね。」と、先生はいいました。「これは、もっともなことだろうな。すべて月世界の植物や昆虫は、地球の同じ種類のものとくらべると、お話にならんほどに大きい。植物や昆虫を、こんなに大きく育てあげるものは——気候だの、食べ物だの、空気や気圧や、そのほかいろんなものだろうが——それが、われわれのからだにも同じ作用をおよぼすにちがいない。このことについては、生物学者や生理学者の研究すべき問題が、いろいろあると思う。四季の変化が、ゆっくりしていること——というよりも、四季の変化が、ほとんどないこと——そのほか、いろんなことが原因になって、ここでは、動物や植物の寿命が非常に長くなっている。もし、われわれが永久にここで暮らすとすれば、同じようなわけで、われわれの寿命は何百年ものびるにちがいない。おまえたちも、先日『毒ユリ』と話をしたときのことをおぼえているだろう。ここでは、折られた花でも多少のしめり気さえあれば、数週間も、ときには数カ月も生き生きとしているという。あのユリが話をしていたね。わしはそれをきいて、ガの持ってきた『月のツリガネソウ』が、パドルビーにきてからも、ずっと生きいきしていたわけが、よくわかった。たしかに、月の気候と地球の気候は、ぜんぜんちがったものと考えなくてはならん。月の気候のことでは、これからまだどんなおどろくべきことに出会うかもわからんね。なに、地球へ帰れば、われわれのからだはちぢんでいって、また元のとおりの大きさになるだろう。それにしても、あまりむやみに大きくならないでくれるとよいがね。わしの上着は、もうきゅうく

「われわれは、ロビンソン・クルーソーの子孫みたいだね。」

「それから、はきものはどうしたらいいでしょう?」と、私はズボンをはき、上着を着てからいいました。「わたしの靴のさきは、すっかり裂けてしまいました。」

「こんなの、やさしいことです。」と、チーチーがいいました。「このまえ、わたしが、くだものをさがしているときに、よい木をジャングルで見つけました。その木の皮は、簡単に剝げます。その皮を切って、サンダルをつくれば、そうとうはけるでしょう。ただ一つめんどうなのは、それを足にゆわえるのに、丈夫なひもをあむことですがね。」

チーチーはその木のところへ、私たちを案内してくれました。そして、さっそ

私たちはチーチーの助けを借りて、森のなかをさがして歩きました。五、六日もさがしてまわったすえ、やっと手ごろな材料が見つかりました。それは沼地に生えている奇妙な形をした木で、大きな、やわらかい葉がついていました。その葉を、うまいぐあいにかわかしたものは、かたくなったり、もろくなったりせずに、かなりのしなやかさを保っていることがわかりました。それでいて、縫っても裂けないくらい丈夫です。チーチーとポリネシアが縫い糸を工面してくれました。それは、あるツルクサの巻ヒゲをとって――ごく細いものですが――それを裂いて、より合わせて糸にしたものでした。そこで、ある晩、私たちは仕事にとりかかって、新しい服を裁ちはじめました。

「じゅうぶん大きくしておいたほうがいいよ。」と先生は、裁縫台の代わりになっている岩の上で、ハサミをふりながらいいました。「じきに小さくなってしまうかもしれないからな。」

そして、ようやく着物ができあがると、私たちはそれを着て、相手が腹をかかえて笑うのを、おたがいにおもしろがらなくてはなりませんでした。

「われわれは、まるでロビンソン・クルーソーの子孫みたいだね。」と、先生はいいました。「だが、けっこうだ。これでも、じゅうぶん着物として役に立つからね。寒いのときは、毛皮を着ますがね。」

下着は、持っているかぎりの着物を切りほぐし、その二、三枚ぶんをあわせて、一枚に仕立てた衣裳にしました。いまのところ、まだ新発明の着物を肌にじかに着るだけの勇気がありませんでした。さいわい、気候がきわめておだやかなために、たいした身支度はいらないのです。

16　チーチーの語る月の伝説

ある日のこと、それはちょうど、新しい種類の植物をさがしにゆく途中でした。私たちのあいだに、占い月の歴史の話がもち出されました。私たちは、「ささやくツルクサ」という植物が、葉をすりあわせて、その音で話をするということをきいたので、その植物をさがしに出かけるところでした。

「ねえ、チーチー。」と、先生はいいました。「おまえは、おばあさんが大むかしの話をしてきかせたとき、何か変わった木か植物の話をしてくれたのを、おぼえていないかね？」

「わたし、そんなおぼえはございませんです。」と、チーチーは答えました。「おばあさんの『むかしむかし、月のなかったころ』の話は、たいてい、いつも人間や動物の話だけでございました。木や植物の話は、めったに出ませんでした。どこそこの国には深い森が多いとか、砂漠で木がなかったとか、それくらいの話はありましたですがね。でも、なぜですか？」

「というのはね、こういうわけだ。むろん、わしもほかの科学者たちと同じように、大むかしは月が地球の一部だったにちがいないと信じている。それならば、地球と同じ種類の木や植物が、どうしてここにもっとたくさんないのだろうと、それがふしぎだね。」

「でも先生、いろいろあるじゃございませんか。」と、ポリネシアがいいました。「たとえば、アスパラガス

く私たちは、すくなくとも一週間はもちそうなはきものをつくりあげました。

「さあ、よし！」と、先生はいいました。「とにかく、これで当分のあいだ、着物の心配をしないですむね。だから、もっとたいせつなことに心を向けることができるだろう。」

「はてな。」と、チーチーは考えこみました。

ことにしました。私たちは、キャンプから歩いて二、三時間ほどのところにいました。けれど、月では非常に速く歩けるので、歩いて二、三時間といっても、地球での計算よりずっと遠いところです。先生はキャンプに植物研究のための特別な装置をすえつけていたのです。私たちはこの一週間ほど、ここのキャンプを足だまりにして、毎日、「おしゃれのユリ」の花の教えてくれる新しい種類の植物をさがしに出かけていました。しかし日暮れまでには、かならずキャンプにもどることにしていました。ところで、この日のお昼ごはんのとき、先生はごろりところがって、黄色いヤマイモの大きなきれを、むしゃむしゃ食べていました。——この

の木なんか、いかがです？」

「まったくだ。」と、先生はいいました。「形の上では、地球の植物を思わせるものが、たくさんある。もっとも、大きさという点では、くらべものにならないほど大きいがね。しかし、ここの木や植物は、話をするとか、そのほかまた、いろいろと社会的に進歩した傾向を示すのが、当然のことのようになっている。それで、こういうことは、もしかすると大むかし――つまり、むかしむかしその昔、月のなかったころ――地球ではじまったものではないかと思うのだ。ただ、地球の博物学者がぼんやりしていて――つまりその――そういうことまで思いつかなかったのではあるまいか。それで花や木のあいだには、ことばをかわす手段がないと思われているのではあるまいか？」

「はてな。」と、チーチーは、両手で頭をかかえて考えこみました。

「いえ、ちがいます。」と、やがてチーチーがいいました。「わたし、うちのおばあさんから、そんな話をきいたおぼえは、ぜんぜんございませんです。ただ、大むかしの彫刻家のオーソ・ブラッジの話をきいたときに、ブラッジが、石のノミとか、そのほかいろんな道具に、木の柄をつけたとか、台所道具を木でつくったとか、そんな話をききました。たとえば、ブラッジが水を入れるおわんをつくるのに、どんな木を使ったか、そんな話ならきいたことがございます。でも、ことばをかわす木や植物なんて、ついぞきいたこともございません。」

お昼近くなったので、私たちは「ささやくツルクサ」をさがしにゆく途中、ひと休みしてお弁当を食べる

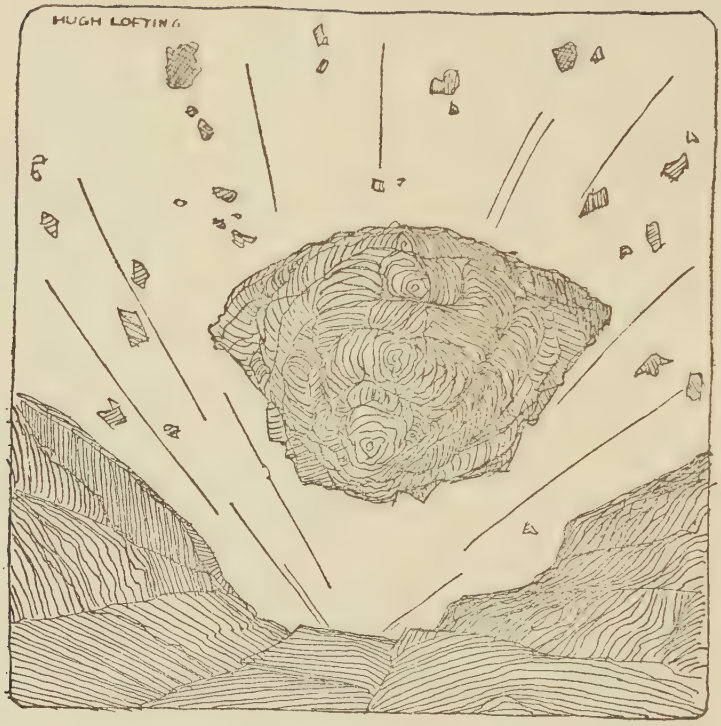
先生はごろりところがって、黄色いヤマイモの大きなきれを食べていました。

た。この少女は、オーソの見た水にうつるおのが姿のほかにはたったひとりの人間でした。あわれな角彫りの名人、ひとりぼっちのオーソ・グラッジは、仲間がほしくてならなかったのです。しかし少女は、じぶんはここにとどまることはできない——じぶんは妖精で、あなたのような人間ではないのですもの、と叫びながら、夕もやのなかに永久に姿を消してしまいました。オーソは、少女のひざまずいていた岩のそばへかけよりました。けれどそこには、少女の手首にはめていた青い石の玉の腕輪が、たった一つ落ちているばかりでした。悲しみにくれたオーソは、その腕輪をひろってじぶんのうでにはめ、昼も夜もそれを身につけて、

イモはジャングルの入り口でとれ、それに非常に栄養があることがわかっていましたので、私たちはおもにそれをごはんのかわりにしていました。

「ねえ、チーチー、さっきの話だがね。」と、先生はいいました。「大むかしの彫刻家、オーソ・ブラッジの物語のおわりは、いったいどんなことになっているのだね？　あれは非常に興味ふかい話だが。」

「でもねえ、わたし、知っているだけのことは、もうたいていお話ししてしまったように思います。」と、チーチーはいいました。『むかしむかし、まだ月のなかったころ』――というのが、おばあさんが話をはじめるときのきまり文句でございました。そのころは、人間といえばオーソ・ブラッジだけ、この人が、たったひとりぼっち住んでいて、獣の角や骨に石の刀で絵をほりつけるのを楽しみにしておりました。この人のいちばん大きな野心は、人間の肖像をほることでした。けれど肖像をつくろうと思っても、人間といえばオーソ・ブラッジひとりきりですから、モデルにする人がありません。ある日ブラッジが、たれか肖像の手本にするような人がいてくれないかなあ、と大声でいいました。そのとき、ひとりの美しい少女が――ピーティーパという名まえでしたが――肖像をほってくれといわんばかりに、岩の上にひざまずいているのが目にはいりました。オーソはさっそく、その少女の姿をトナカイの角の平らなところにきざみました。これはオーソのつくったもののなかで第一ばんの傑作でした。少女は右の手首に、青い石の玉をつないだ腕輪をはめていました。肖像ができあがったとき、少女は初めあらわれたときと同じように、どことも知れず山の夕もやのなかに、夢のようにふたたび姿を消してゆきかけました。オーソは少女に、ゆかないでくれと叫びまし



つづいておそろしい爆発がおこりました。

のことをたずねたときにも、やはりそんなようなものでした。そういう洪水があったのは、もうまちがいないことなんです。でも、なぜ洪水がおこったか、そのときでも、また、そのすぐあとでも、地球のありさまはどんなであったか、そういうくわしいことは、ほとんど伝わっていないんだと思われます。ごくわずかなこと以外はべつですがね。わたしが思うに、この大きなできごとは、二つとも地球の大変動だったのでしょう。——たぶん、この二つのできごとは同時におこったのかもしれません。——それで、あらゆるものが大混乱におちいって、そのさわぎで、だれも記録をとるどころではなかったのでしょう。さわぎがすむと、ぼ

たえず少女の帰ってくるのを待っていたということです。

お話は、これだけです。わたしは子どものとき、よくおばあさんに、この話のつづきをしてくれとせがみました。これではあまりにも悲しい、物たりない終わりですもの。けれど、いつもおばあさんは、それでおしまいなんだから仕方がない、といいました。角彫りの名人、ひとりぼっちのオーソ・ブラッジは、たぶんそれからまもなく、まるで地の底に吸いこまれたように、すっかり姿を消したものと思われます。」

「ふうむ！」と先生は、つぶやきました。「それがいつごろのことか、わかるかね？」

「いいえ、わかりません。」と、チーチーはいいました。「おばあさんの話のうち、時や場所のことは、おばあさん自身でもはっきりとはわからないのです。そういう話は、ちょうど、わたしたちがおばあさんからきいたように、おばあさんは、そのまたおかあさんやおばあさんからきいただけなんですから。でも、わたし、きっとそれは、ノアの大洪水のころのできごとにちがいないと思います。おばあさんは、いつも話を二つにわけてしていました。むかしむかし月のなかったころのお話と、それから後にあったお話です。彫刻家のオーソ・ブラッジという名まえは、はじめのほうのお話にだけ出てきます。」

「なるほどな。」と先生は、考えこんでいいました。「それでは、おばあさんがそのうつりかわりの時期――つまり一つの時代がおわって、つぎの一つの時代がはじまったときのことを　何か話したのをおぼえていないかね？」

「あまり、おぼえておりません。」と、チーチーはいいました。「わたしたちがおばあさんに、ノアの大洪水

は、ひとりもなかったということです。でも、わたし、どうもこれは疑わしいと、以前から思っておりました。そして、ずっと後の世になってからのことですが、人間社会がまた元のような状態に立ちなおると、こんどは人類のあいだに大戦争がおこりました。」

「なんのための戦争だね？」と、先生がききました。

「それはですね。」と、チーチーがいいました。「このころまでには、人間の数もそうとうふえてきて、そこかしこに大きな町がたくさんできました。戦争の原因は『月は女神か、そうでないか？』という争いでした。古い太陽崇拝者たちは、『月は太陽の娘か妻だから、礼拝をささげるべきだ』といいました。いっぽう、月は地球のわき腹から飛び出したものだと考える人たちは、太陽を礼拝することをやめました。この人たちの考えは、『地球が、このように新しい星を生み出す力をもっているならば、地球こそ、すべてを生み出す母なる地球として、あがめられるべきだ。太陽を拝む必要はない。太陽は、いままで一度も子どもを生んだことがない。これを見ても、地球が万物の中心だということがよくわかる』というのでした。それからまた、『太陽と新しい地球を、神として拝むべきだ』という人たちもありました。またほかの人たちは、『全能なる力をあらわす三角形を形づくるためには、太陽と地球と月が三つともなくてはならない』といいました。この戦争は、はげしい戦争でした。何千という人間が、たがいに殺しあいました。サル仲間は、それを見て、すくなからずおどろきました。サルの目から見ると、どの説をとなえる人も、この問題の真相について、たしかなことを知っているわけではないのですからね。」

んやりとして、できごとをはっきり思い出せなくなったのだろうと思います。でも、わたし、おばあさんがこんなことをいったのを、おぼえています。——空にはじめて月があらわれた晩、わたしどもサルの御先祖は、山のいただきに一団の人間がひざまずいて、月を拝んでいるのを見たというのです。そのころまで人間は太陽を拝んでいたのですが、月は太陽の妻にちがいないということで、こんどは月にも祈りをささげるようになりました。」

「しかし、月は地球からわかれて、飛んで行ったものだ。それを人間は、知らなかったのだろうか?」と先生は、ききました。

「そこのところは、あまりはっきりわからないんです。」と、チーチーはいいました。「わたしどもは、たびたびおばあさんに、そのことをききました。けれど、おばあさんの話には、何だかずいぶんたりないところがありました。おばあさんの話は、地球のあちらこちらで見た、ばらばらな話のよせ集めで、あとになってからのうわさやいい伝えを、それにくっつけたようなものですからね。それに第一、月ができたときには、ものすごい混乱だったと思われます。地球はやみにおおわれて、つづいておそろしい爆発がおこって、たくさんの命が失われました。それから、新しくできた穴に、海の水がどっと流れこんで、そのために、なおさらえらい被害がおこりました。人間や獣は、逃げ場を求めてほら穴にかくれるのもあり、気違いのように山の上をかけまわるものもあり、だまってすわりこんだまま、おそろしい光景を見まいと目をおおうものもありました。サルの歴史の伝えるところによりますと、このできごとを目のあたりに見た人で、生き残った者

17 「会議」のことを知る

私たちが「ささやくツルクサ」をさがしに出かけた日は、とりわけ収穫の多い、おもしろい一日でした。

このツルクサの安住している場所は、たいへんに美しいところでした。そこはジャングルの近くにある岩の谷間ですが、まわりの絶壁にツルクサが厚いカーテンのようにたれさがり、谷底には泉からわき出る水が小さな池をつくっていました。見るからにそれは、うすやみのなかから妖精がおどり出してきそうなところのようでした。それとも猛獣のすみかか、山賊の根城にでもなっていそうなところでした。

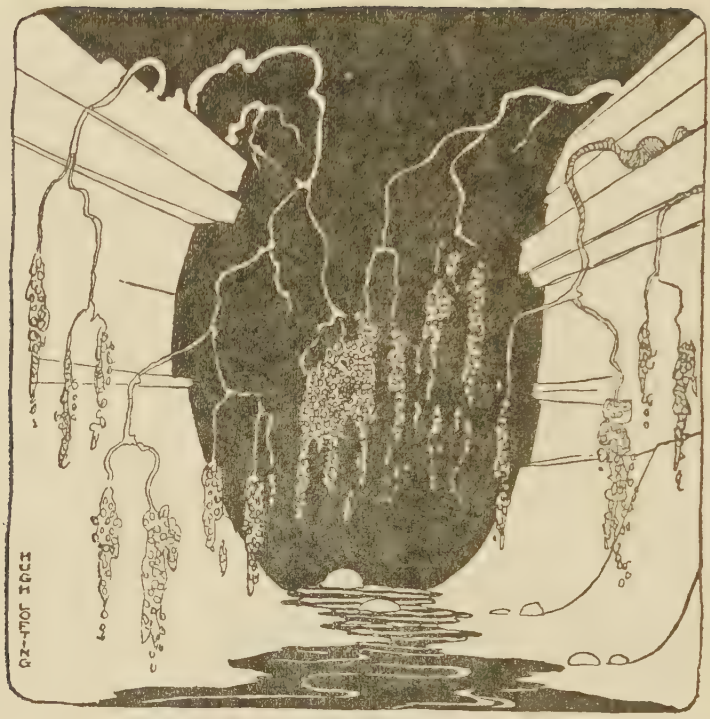
ポリネシアは、ギーとひと声鳴くと飛びあがって、岩にたれさがっているツルクサにとまりました。するとツルクサは、たちまちいっせいに波打って動きながら、私たちの耳にもはっきりきこえるくらい、ざわざわと、ささやき声をたてました。ツルクサたちは、見知らぬ鳥が飛びこんできたのを見て、かなりびっくりしたようすでした。ポリネシアのほうでも、ぎくりとさせられて、すぐに逃げて帰りました。

「ああ、びっくりした！」とポリネシアは、おもしろくなさそうにいいました。「こんなところなんて、ないね。まったく、ぞっとする。あのツルクサのやつ、わたしがとまると、ヘビのようにもぞもぞとして、のたくったりするんだもの。」

「それはポリネシア、あのツルクサは、おまえを見なれていないからね。」と先生は笑いました。「おまえは、

「さてさて、なんということだろう。」と先生は、チーチーの話が終わったとき、きげんを悪くしていいました。「はじめての宗教戦争だね。——たくさんの宗教戦争の、最初のものだ。だが、なんという残念なことだろう！　じぶんが正直にして、人のためになる生活をして、幸福に暮らしていたら、ほかの人が何を信じたってかまわないだろうに、それをとやかくいって！」

（1）右の手首——『ドリトル先生と月からの使い』の一五九ページの図にあるように、ピピティーパは右腕に青い石の玉の腕輪をしているのですが、この本の原書では、右の足首に足輪をはめていることになっていました。年少の読者のことも考え、右手の腕輪に統一しました。



そこは岩の谷間でした。

たてました。

「ねえ、スタビンズ。ツルクサたちは、お目にかかれて嬉しいと、いっているのだよ。」と、先生は私のほうを見て、嬉しさで引きつるような声を出しました。

「ほんとに先生、ばんざいです！」と、私はいいました。「またたく間に、大成功でしたね。こんなことは、はじめてですね。」

「あの草たちは、以前、人間と話をしたことがあるのだね。」と先生は、またいいました。「それにちがいない。どうも、あれが話をするようす……えっ、なんだね？」

先生がふりむくと、チーチーが先生のそでを引っぱっているのでした。かわい

ツルクサたちを死ぬほどびっくりさせたにちがいない。どれどれ、あれと話ができるかどうか、ひとつ、ためしてみることにするかね。」

そのためには、もと先生が『うたう木』と話をした経験が、たいへんに役立ちました。私は気をつけて見ていましたが、先生は、もう仕事の勝手がだいたいわかっているふうで、持っていた小さな機械を使って研究にとりかかりました。そして、おどろくほど早く、まるで日ごろからこの草と話をしていたかと思われるように、気軽に話をはじめました。

やがて、先生は私のほうを見て、ちょうど私が考えていたのと同じようなことをいいました。

「ねえ、スタビンズ。この植物は、わしの問に、いかにもやすやすと答えてくれる。どうも、このようすでは、この草はいままでに、人間と話をしたことがあるようだね。見ていてごらん、わしはこの草と、口で話をするからね。ふつうの人間と話すように、ね。」

先生は手にしていた小さな機械を下におくと、歯のあいだからそっと息を出して、一種のささやくような音をたてました。それは、鼻歌とシューシューという音の、あいのこのような奇妙な音でした。

いつもなら先生は、奇妙な人間じみた月世界の植物たちとおたがいの気持を通じあうようになるまでには、数時間も、ときには数日もかかるのでした。けれど、このツルクサは先生のささやくことばに、すぐ返事をしてみせたので、チーチーと私はおどろいてしまいました。ツルクサは、葉の茂ったツルをゆり動かして、それを適当な角度でそよ風にあて、いま先生が出したのと同じような、鼻歌に似たシューシューという音を

まぎれもなく鳥たちは、私たちの見張りをしているのでした。

の頭の上をすぎてゆきました。空からだれかおそってきたか、敵がきたかと、私たちは、おそろしくなって空を見あげました。すると、私たちをこの神秘な世界につれてきてくれた、あのガと同じ種類の大きなガが、ゆっくりと空をよこぎって、はるか向こうへ消えてゆきました。

ものの三分もそのうえも、だれひとりとして口をききませんでした。

「なるほどね。」と、やっと先生がいいました。「ついに動物界のものが、われわれと近づきになる決心をしたのかもしれん。それならばたいへんけっこうなことだ。あれは、われわれがここで見た最初の鳥だ。——それから、あれも最初に見た昆虫だ。例の、あのガとわかれて以

そうに、チーチーがこんなにふるえあがったのは見たことがありません。日ごろおしゃべりのチーチーも、どもったり、つかえたりして、口をきくことができないのでした。

「なんだね、チーチー。」と、先生がいいました。「どうしたのだ?」

チーチーは、声をのみこんでいましたが、「あそこ!」と、やっとのことでいいました。

チーチーは、崖の根にある池のふちを指さしていました。私たちは、なるべくツルクサに近づいて話すため、崖の棚のようなところによじのぼっていたのです。チーチーの指さしているほうを見ると、池のほとりの黄色い砂の上に、いつか湖の岸で見たような巨大な足あとが、二つ、はっきり見られました。

「月の巨人!」と先生は、ひそひそ声でいいました。「なるほどね、たしかに——このツルクサは、まえに人間と話をしたことがあるにちがいない。もしかすると——。」

「しっ!」とポリネシアが、話をさえぎりました。「こちらが見ているのを、向こうに気づかれないようにして。でも、見えないようなふりをして、崖の左がわの肩を見てごらんなさい。」

先生と私は、ツルクサと話をつづけるようなふりをしました。そして私は、耳をかくように見せながら、オウムのいったほうを見あげました。そこには五、六羽の鳥が見えました。その鳥たちは、なるべく葉かげに姿をかくそうとしていました。けれど、まぎれもなく鳥たちには、そこから私たちの見張りをしているのでした。

私たちがまた仕事をするようなふりをしていると、ものすごく大きな影が、太陽の光をさえぎって私たち

先生は、また「ツルクサ」と話をはじめました。

い、植物はほかの植物とあらそい、鳥は昆虫とあらそうというありさまでした。けれど、いまではもうそんなことはありません。」

「では、どうして?」と、先生がききました。「二つのべつな生物が、両方とも同じものがほしいときには、どんなやりくりするのかね?」

「それはみんな『会議』できめています。」と、ツルクサは答えました。

「あ——ちょっときくが、」と、先生はいいました。「わしは、どうもよくわからん。会議とは何かね?」

「つまり、それはですね。」と、ツルクサはいいました。「何百年かまえのこと——もちろんこれは、わたくしたち、た

来だが。しかし、鳥が昆虫よりも、ずっと小さいというのは、おかしなことだ。いや、くわしい話は、あれらがきかせてくれるだろう。さしあたって、わしはまだ、ここにたくさん仕事がある。スタビンズ、きみはノートを持っているかね？」

「はい、持っています、先生。」と、私は答えました。「いつでも用意ができています。」

そこで先生は、また「ささやくツルクサ」と話をはじめました。そして、やつぎばやにいろんな問答がかわされたので、私は目のまわるようないそがしさで、先生のいうのを筆記しました。

まえにもいったように、このときの調査は、月の生物（動物、植物）に関する調査のうち、とくべつ満足のゆくものでした。それはこのツルクサが、姿は「おしゃれのユリ」のように人間に似ていなくても、月の生活一般について豊かな知識をもっていたからです。先生は、このまえたずねた植物からきいた戦争の話について、ツルクサにたずねました。――ある植物が、もっと広い土地がほしいとき、じゃまになる植物を追いはらおうとしておこる戦争についての話です。そして、私たちが「会議」というものについてきき知ったのも、このときが初めてでした。

「おや、あなたがたは、」と、ツルクサがいいました。「ある一つの種類の植物が、じぶんの利益のために、ほかの植物の権利や生命におかまいなしに、戦争をはじめることができるなんて、そんなことをお考えになってはいけません。それは許されません。わたくしたち月世界の者は、そんな時代はもうとっくに卒業してしまいました。むかしは、ここにも、たえず争いのつづいた時代がありました。生物にはほかの生物とあらそ

月には、一種の大トカゲがはびこっていた時代がありました。

植物は、動くことができないだろうに。」

「いえ、それは、」と、ツルクサがいいました。「わたくしたちは、動くことができません。でも、ほかの者に、じぶんの考えを伝えることができます。ですから、鳥や昆虫を使者として、いわば会議に参加することができるのです。」

「それは、どのくらいむかしのことかね？」と、先生はたずねました。「つまり、いつごろからここでは、動物と植物が、おたがいに話をすることができたのかね？」

「はっきりしたことは、わからないんです。」と、ツルクサはいいました。「もちろん、よほど大むかしから、何万年もまえから、話をする何かの方法があった

いていの者が知っているころのことですが、わたくしたち……。」

「あ、ちょっときくが、」と先生は、また話のじゃまをしました。「おまえのいうのは、ここの植物や昆虫や鳥が、もう何百年も長生きしているという意味かね？」

「だって、そうなんです。」と、ツルクサはいいました。「もちろん、なかには特別に年をとった者もおります。でも、この月世界では、植物でも鳥でもガでも、二百歳より下のものは、ほんのまだ子どもだと思われています。木や動物のなかには、千年以上もまえのことをおぼえているものが、いくらかあります。」

「ほほう、それはそれは！」と、先生はつぶやきました。「むろん、おまえたちの寿命が地球の生物の寿命より、はるかに長いことは、わしも気がついておった。だが、それほど長生きするとは思わなかった。まったく、大したことだ！――では、どうぞ話をつづけてもらいたい。」

「むかし、わたくしたちが『会議』をつくるまえには、いろいろとおそろしいむだなことや、殺生が行なわれておりました。」と、ツルクサは話をつづけました。「いい伝えによりますと、ひところ月の上には、いたるところに一種の大トカゲが、はびこっていた時代がありました。そのトカゲが、むやみに大きくなって、あらゆる青々したものを、ほとんどみんな食べつくしてしまいました。木も灌木も草も、種かみのるまでもちこたえることができません。葉が萌したかと思うと、この飢えた獣がガツガツ食べてしまいます。それで、わたくしたちが寄りあつまって、どうしたらいいか相談をしました。」

「あ――ちょっときくが、」と、先生はいいました。「寄りあつまってというのは、どういう意味かね？

18 議長

それから「ささやくツルクサ」は、いままでちょいちょい話のなかに出てきた「会議」という制度について、先生にくわしく話しました。これは動物界と植物界との、両方のメンバーで組織された委員会、または統治機関のようなものでした。そのおもな目的は、ふたたび戦争のおこらないように、月世界の生活の規律を保ってゆくことです。たとえば、もしある種の灌木がのびひろがるために、もっと広い土地がほしいのだが、ほしいと思う土地を、たとえば、すでにイグサが占領しているという場合には、まずこの問題を、「会議」にもち出すことになっていて、相手をいきなりおしのけることはゆるされないのです。また、ある種のチョウが、ある化のミツを食べたいのだが、ミツバチやカブトムシがじゃまをするという場合にも、直接行動に出るまえに、この問題を「会議」にかけて、投票できめなければなりません。

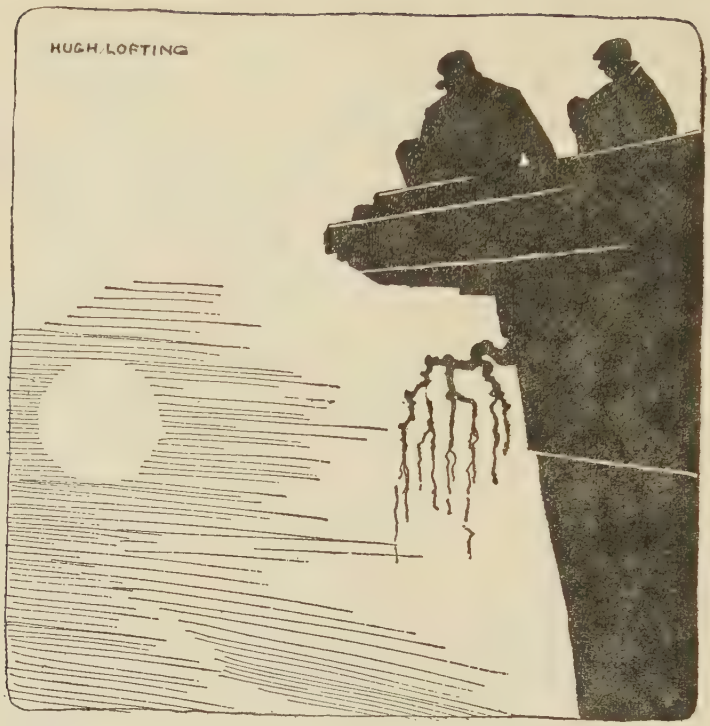
この説明をきいて、いままで私たちの疑問に思っていたことが、いろいろよくわかりました。

「ねえ、スタビンズ。」と、先生がいいました。「ここに住むあらゆる生物の、あのおどろくべき大きさ、あの植物の知能の発達、そのほかいろんなことは、もしこの『会議』の制度が行なわれていなければ、おそらくありえないことだろうね。地球は、月からいろいろと学ぶことができる。——月なんか、じぶんの子どもだからと思って、けいべつしている、その月からね。地球上の生物の生活には、勢力のつりあいとか、生命の

ことは、いうまでもありません。けれど、それはいまのように便利なものではありませんでした。長い年月のあいだに、それがたえず改良されてきたのです。いまでは、月のこのへんで何かすこしでも変わったできごとがあると、それはかならず二、三分のあいだに、木や草や昆虫や鳥などを通じて、月世界のすみずみにまで伝えられます。たとえば、先生とその一行の方々がこの世界に着陸なさってからの動きなど、わたくしたちはほとんど残らず知っています。」

「これはおどろいた！」と先生は、ひとりごとのようにいいました。「それとは知らなかった。だが、まず話のつづきがききたいね。」

「もちろん、はじめからそうはゆきませんでした。」と、ツルクサは話をつづけました。「けれど、『会議』ができてから、連絡や協力がずっとぐあいよくなって、だんだんに改良され、いまのような仕組になったのです。」



地球が、丸くぼんやりと写り出ているのでした。

トラもおりません。」

「もっともだ、スタビンズ。」と、先生はいいました。「おまえのいうとおりだ。しかし大きな肉食動物のあいだの争いと同じく、やはり昆虫界にも、種属間の争いが行なわれていることを忘れてはいけないのだ。だが、いまから百万年の後には、現代の人間とハエとの戦いを、この時代の最も重要な事件として説明する科学者が出るようなときがこないともかぎらない。そして、それにトラだって、肉を食っていたかどうか、だれにもわからなくなるときがこないともかぎらない。」

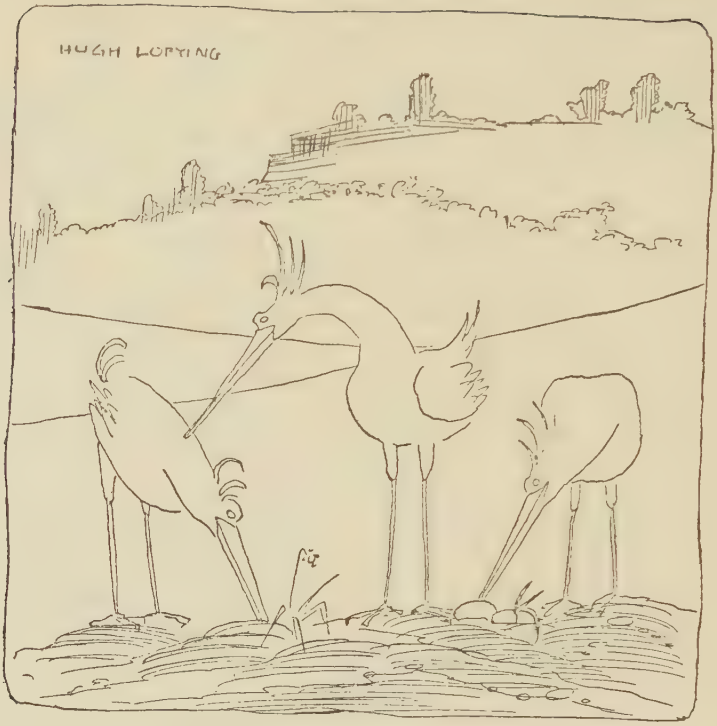
そこで先生は、ツルクサのほうを見て、またもや質問をつづけました。それはたいてい「会議」についての話でした。

安全というものがない。われわれのあいだでは、むかしもいまも、『タコがタコの手を食っている』わけだ。」

先生は頭をふって、空のかなたに目を向けました。そこには、われらの母なる地球が、丸くぼんやりと写り出ているのでした。パドルビーにいたころには、私はよく、ちょうどこんなぐあいに昼間の月をながめたものでした。

「そうだ。」と先生は、いきなり真剣な顔つきになって話をつづけました。「地球は、じぶんでは非常に進歩したつもりでいるのだが、われわれ地球の世界には、ここで見るような知恵もなければ、深い考えもない。争い、争い、争い、いつも争いばかりではないか！　われわれ地球の住人は、そういう暮らしをしているのだ。――『適者生存』などといっているがね。ねえ、スタビンズ、わしは動物を助けるために、じぶんの一生をささげてきたが、それを不平に思っているわけではないよ。わしは動物と友だちになることをおぼえて、動物たちの友情を得たおかげで、ほんとに楽しい日をすごしてきた。もし、わしが生まれかわってくるようなことがあれば、また同じようなことをやりたいと思っている。しかし、いままでに、わしはじぶんのこの努力が、けっきょく失敗に終わるべきものだということを感じさせられた。しばしば、じつにしばしば、それを感じさせられた　ところで、ここで行なわれている制度　生物の会議　生物間の協調　これこそ、そういう努力を成功させ、すべての者に幸福をもたらすカギではないか、と思うのだ。」

「でも、先生、」と、私はいいました。「わたしたちの世界と違って、ここにはいくら見ても動物というものが一匹もいません。昆虫と鳥ばかりです。ここには、生きるためにシカや野ウサギをつかまえるライオンも、



くちばしの長い鳥が、種を一つのこらず、掘り出してしまいました。

を持ってきたので、ここの気候では、どんなふうに育つか見たかったのだ。だが、いまのところ、まだ一つも芽は出していないがね。」

ツルクサは、ゆらゆらとゆらいで、葉ずれの音をたてました。それはちょうど、おかしがって、くすくす笑っているようにきこえました。

「先生、お忘れになりましたね。」と、ツルクサがいいました。「月世界では、ニュースはたちまちにひろがります。先生が実験のために種をまかれたことは、すぐに見つかって『会議』に報告されました。それで、先生たちがキャンプに帰られたあとで、くちばしの長い鳥が、先生のおまきになった種を一つのこらず、

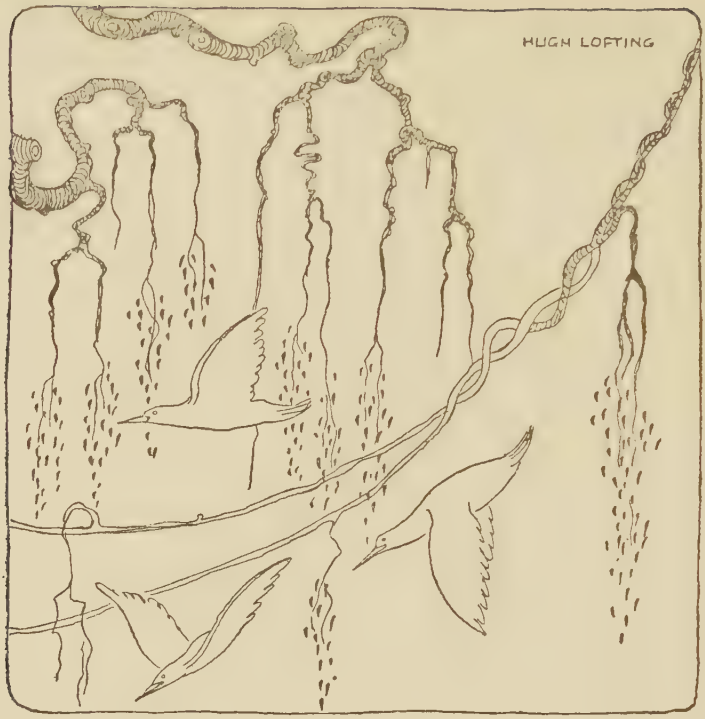
――会議は、どういうふうにして運営されているか、どういうメンバーからできているか、何回ぐらいひらかれるか、というようなことでした。その答えをきいて、いままで私たちがなかば想像したり見たりしていた月世界の、生活全体の姿があきらかになりました。

月の生活を書くにあたって、私はじぶんが偉大な詩人であったら、――そうでなくても、じぶんが十分に筆のたつ人間だったらいいと思います。とにかく、この月の世界は、まったくおどろくべき平和な国でした。歌をうたう木、ものを見ることのできる花、またミツを吸いにゆく植物ともことばをかわすチョウやミツバチ、そういうものが、父母のような「会議」に保護されて、大きいものも、小さいものも、強いものも、弱いものも、みんな一様にじぶんの利益を守られているありさま――それはすべて、私のつたない筆ではいいあらわせないほどに、平和と善意と幸福の世界をあらわしていました。

「いま一つ、わからないことがある。」と先生は、ツルクサにいいました。「おまえたちは、種まきをするとき、どういうふうにしているかね？　ある草が、あまりたくさん種をまきちらして、ほかの者が、めいわくするほどたくさん実を結ぶようなことは、ないのかね？」

「それはですね。」と、ささやくツルクサがいいました。「鳥が気をつけてくれます。鳥は、いろいろの植物の種を、一定のきめられている数だけ受けて、あとは食べてしまうように命じられているのです。」

「なんだって！」と、先生はいいました。「もしかすると、わしは、『会議』の規則に、そむいたかもしれん。じつは、最初ここへついたとき、実験のためにすこしばかり種をまいたのだ。地球から五、六種類の種



ツルクサのかげから鳥がぞくぞくと飛び立ちました。

「『会議』の議長です。」とツルクサは、しばらくためらってから答えました。

「いや、それはわかっている。」と、先生はいいました。「だが、何が、だれが議長なのかね？」

しばしのあいだ、なんの返事もありませんでしたが、岩壁にたれさがっているツルクサのあいだに、またしてもざわめきとさわぎがおこりました。たしかにツルクサたちは、私たちにはわからないように、気をつけろとか用心しろとか、たがいにいましめあっているようすでした。

そのあげく、さっきまでみんなを代表して話をしていたツルクサが、先生にことばをかけました。

「お気のどくですが。」と、そのツルク

念入りに掘り出して、始末をつけてしまいました。『会議』は、種のことについては特別やかましいのです。また、そうしなければならないのです。もし、ある種の草か雑草か灌木が、一つだけはびこるようなことがあれば、この平和な、つりあいのとれた状態がやぶれて、何がおこるかわかりません。それに、議長さんが……。」

この話をしていたのは、先生の肩のすぐそばにたれさがっている三本の大きなツルクサでした。それが話の途中で、だしぬけに妙なそぶりをして、話をぷっつり切ってしまいました。ちょうど、いうべきでないのに、うっかり口をすべらしてしまった人のようでした。すると崖のまわりにたれさがっているツルクサたちのあいだに、ただならぬざわめきがおこりました。ツルクサたちは、ゆれるやら、のたうつやら、くねるやら、ざわざわいうやら、たいへんなさわぎでした。そのとき、けたたましい叫び声がきこえたと思うと、あかるい色をした鳥の群が、葉のカーテンのかげから飛び出して、私たちの頭の上の岩角をかすめて飛んでゆきました。

「先生、どうしたのでしょう？　何ごとかあったのでしょうか？」と、私がきいているあいだにも、ツルクサのかげから鳥がぞくぞくと飛び立って、遠くへ姿を消しました。

「わしにもわからんよ、スタビンズ。」と、先生がいいました。「だれか、ちょっとしゃべりすぎたのかもしれんな。ところで――」と先生は、またツルクサのほうを見て、たずねました。「議長というのは、だれのことかね？」

「まったくですよ。」と、サルのチーチーがいいました。「正直にいって、あの秘密主義には腹がたちましたね。わたしの気持としては、とにかくパドルビーへぶじに帰れることを、早くはっきりさせてもらいたいんです。冒険はもう、たくさんですからね。」

「まあまあ、心配しないがいい。」と、先生はいいました。「大丈夫、それは受けあってくれるだろう。われわれをここへよんだ人は、いずれにしても善意でしたことにちがいない。だから、わしに頼みたいという用事がすみしだい、ちゃんと手はずをととのえて、地球へ送りかえしてくれるだろう。心配しないがいい。」

「そうかしら！」と、私たちの頭の上で、枝にとまって木の実をわっていたポリネシアがいいました。「そうゆけば、けっこうですがね。しかし、どうもわたし安心はできません。——いや、油断なりませんよ。」

サがいいました。「わたくしたちには、わたくしたちの掟があります。あることがらは、お話しすることを禁じられているのです。」

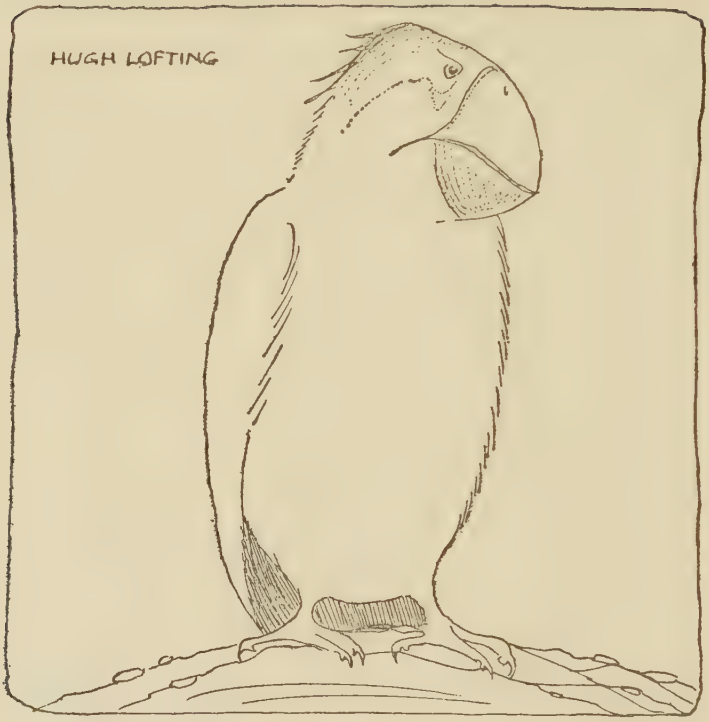
「だれが禁じたのかね？」と、先生がききました。

けれど、それっきり、どのツルクサもひとことも返事をしなくなってしまいました。先生は何度もツルクサにまた話をさせようとしましたが、うまくゆきませんでした。とうとう私たちはあきらめて、引き返してくるよりほかありませんでした。キャンプへついたときには、もうずいぶんおそくなっていました。

先生とチーチーと私が、木の実ばかりの夕飯の用意をしていると、ポリネシアがいいました。

「わたし、思うのですけれど、きょうは、月世界の連中を、すくなからずあわてさせたようでしたね。まったく、こんなような国は見たこともありません。——わたし、ずいぶんいろんな国を見ましたけれどもね。さぞいまごろは、月じゅうのハチや雑草が『ささやくツルクサ』のうわさをして、ツルクサが議長のことで口をすべらせた話をしているでしょうよ。議長ですって！　なんて、ばからしい！　まるで、セント・ピーター様か何かみたいに、もったいをつけて。いったい、何をこんなに大さわぎして、秘密にしてるのかわかりませんよ。」

「いや、もうじきわかるだろう。」と先生は、大きなメロンに似たくだものに、切れ目をいれながらいいました。「たぶん、かれらも、もうこれ以上、われわれを警戒しなくてもよいことが、そろそろわかったろう。——とにかく、そうなくっちゃいけないのだ。」



古ぼけた顔を、ただごとならぬ顔つきにして……

全部の者がやってきて、わたしたちの寝床のまわりをうろついたんです。もし、そうでないというものがあったら、よっぽど、おかしいですね。」

「どうしたのかね?」と、先生はききました。「何かあったのかね?」

「まあ、きてごらんなさい。」オウムはそういって、私たちの寝床や荷物のまわりの空地へ、私たちをつれてゆきました。

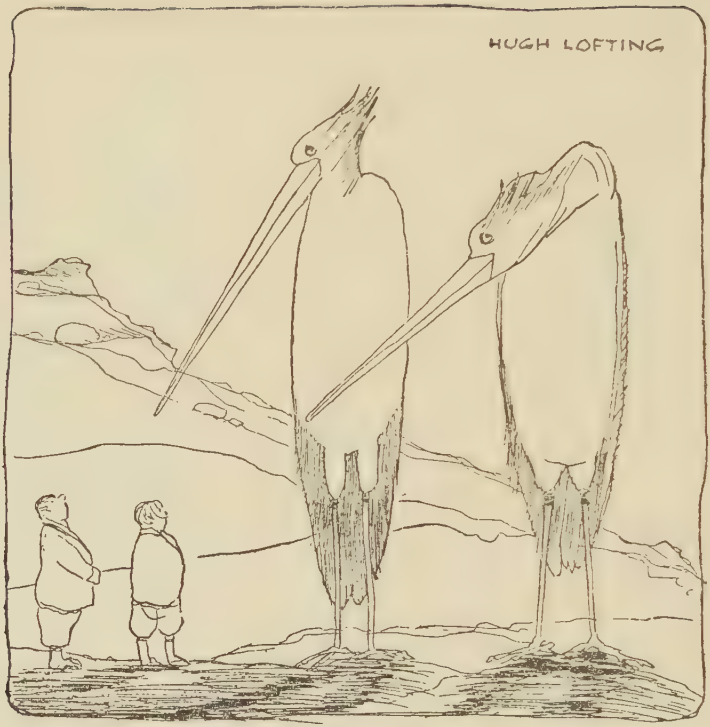
私たちはもうキャンプのまわりに足あとを見かけることにはなれていましたが、ポリネシアが見せたこの足あとは、たしかにふつうのものではありませんでした。私たちのキャンプのぐるり百メートル、またはそれ以上にもわたって、土の上も砂の上も泥の上も、いちめんに足あとだ

19 月の巨人

その夜は、私たちが月で暮らしていたあいだじゅうで、おそらくいちばん心を痛めた夜でした。だれひとりとして、ぐっすり眠ることもできないし、また長く眠りつづけることもできませんでした。その一つは、私たちのからだがおどろくほどすごい勢いで大きくなっていましたので、私たちの夜具が(月では、気候がおだやかですから、毛布をかけないで敷いて寝ていましたが)からだの大きさにくらべると、お話にならないほど小さくなったことでした。ひざもひじも毛布の外にはみ出して、かたい地面にあたるので、痛くてたまりません。それだけでも気持がわるいのに、そのうえ、夜どおしふしぎな物音や気配になやまされつづけました。みんな不安な思いに沈んでいるようでした。ふと私が目をさますと、先生とチーチーとポリネシアが、三人とも同時にねごとをいっていました。

夜があけると、寝不足の私たちは、くぼんだ目をして、めいめいの寝床からはい出すと、口もきかないで朝飯の支度にとりかかりました。古強者のポリネシアがいちばんさきにおちつきをとりもどして、キャンプのまわりの地面をしらべに出かけましたが、やがて、その古ぼけた顔を、ただごとならぬ顔つきにして引き返してきました。

「いや、たいへんですよ。」と、ポリネシアはいいました。「わたしたちの眠っているあいだに、月に住む



そのほかのものは信じられないくらい大きいのでした。

つづいて、さまざまの鳥があらわれました。なかには、まえにツルクサの葉かげに見た鳥もいました。けれど、まだ見たことのない鳥も、たくさんいました。

——大きなコウノトリ、ガチョウ、ハクチョウなど。そのなかの半分くらいは、地球の同じ種類の鳥よりいくらか大きいというだけのものでした。けれど、そのほかのものは信じられないくらい大きくて、かなり色も形もちがっていました。

——もっとも、どの種類の鳥ということは、たいていわかりました。

私たちは、かわるがわる何かいおうと口をひらきかけて、また閉じました。つぎつぎと新しい、もっと珍しい鳥が飛んできて、仲間にはいってゆくからです。

らけでした。奇妙な昆虫の足あともあれば、鳥の足あともあり、なかでもいちばん目につくのは、例の巨人の足あとが数かぎりなく残っていることでした。

「なになに。」と先生は、むずかしい顔で、舌打ちしていいました。「いずれにしてもかれらは、われわれに危害は加えない。われわれが眠っているあいだに、かれらがのぞきにきたって、かまわんではないか。ポリネシア、べつにさわぎたてるほどのことではないよ。それよりも、朝ごはんを食べることにしよう。すこしくらい余分の足あとがあったって、大したことではない。」

私たちは引き返してきて、朝ごはんにしました。

けれど、動物たちが遠からず私たちに近づいてくるだろう、というドリトル先生の見通しは、思いがけなく、にわかに、まことになってあらわれることになりました。私はヤマイモのきれにミツをつけて口へ持ってゆきかけたとき、何かすごく大きな影が頭の上を飛んでゆくのに気がつきました。ふり仰いで見ると、それははじめ私たちをバドルビーからつれてきてくれた、あの大きなガではありませんか！　私はしばらく、じぶんの目を信じることができませんでした。ガは大きなつばさを、ふわりとひとふりしたと思うと、私のすぐそばへ舞いおりてきました。こんなたしかな着陸のしかたにも、日ごろからなれているらしいようすでした。ふたりがならんだところは、まるでハツカネズミと巨象のようでした。

私たちがガのきた話をするひまもないうちに、また同じ種類のガが二匹三匹と、どこからともなくあらわれて、大きなつばさで私たちに砂ぼこりを吹きつけながら、仲間のそばへおりてきました。

にしても、これはまったく妙なことでした。私たちの足もとの地面が、まるで地震のようにズシンズシンとゆれるのです。それでいて、それが足音にちがいないことがわかるのでした。

チーチーは先生のそばにかけ寄って、上着の下にかくれてしまいました。ポリネシアは身うごきもせずに、じっと木の枝にとまっていました。じれったそうな不きげんな顔をしていながらも、あきらかに興味を感じているらしいようすでした。私はポリネシアの見ているほうを目で追いました。ポリネシアの勘は、私にはいつもたしかな道しるべでした。ポリネシアはキャンプのまわりの空地をとりかこんでいる森のほうを見ていました。そして、ガラス玉のような小さな目で、ずっと私の左手のほうの、地平線をかぎる森がクサビ型に切れこんだあたりを、じっと見つめていました。

おかしなことに、私はいつもこういうだいじなときには、ポリネシアのほうに目を向けるようになるのです。といって、それはけっして先生にしたがうことを忘れたわけでもなく、また、先生の命令どおりに動く用意をしていないわけではありません。でも、このようにふしぎな、わけのわからないことがおこると——ことに、それが動物に関係していることなら——私は思わずオウムを見て、オウムがどんなようすをするか知りたくなるのです。

いまポリネシアは、首をいっぽうにかしげ——これはポリネシアの、おとくいの姿勢ですが——壁のようにつづいている森の、切れ目のあたりを見あげています。そして、何か口のなかでつぶやいています。（たぶん、それはスウェーデン語でしょう。ポリネシアは毒舌を吐くときには、いつもスウェーデン語を使いま

そのつぎにきたのはハチでした。私は地球にいたころ、いろんな種類のハチを見たことを思い出しました。(特別に研究したわけではありませんが)そういうハチが、どれもこれも、夢に見るおそろしい化物のような大きさになって、群をなしてあらわれてきました。——大きな黒いマルハナバチ、小さな黄色いマルハナバチ、ふつうのミツバチ、きらきらした緑色で、すばやく飛ぶやせたハチもいました。ハチの群といっしょに、ハチのいとこや親類どもも残らずやってきました。しかしこれは、どの種類のものも二匹二匹ずついるだけのようでした。

かわいそうにチーチーは、すっかり胆をつぶしてしまいました。それも、むりはありません。こんな大きさの昆虫が、しずしずとまわりにむらがってくるのを見ては、いくら大胆な人でもぞっとするでしょう。けれど私は、それほどこわいとは思いませんでした。たぶん、知らず知らずのうちに、先生の気持が私にも乗りうつったのかも知れません。先生はこんなことにおどろくよりも、むしろ大いに興味を感じるというほうでした。それに、この虫や鳥のようすが、どうも敵意をもっているようには見えません。ある一つの計画にしたがって、しずかに規律正しく集まってくるところのように思われました。私は、やがて何ごとか起こって、このわけがわかるにちがいないと思っていました。

はたして数分ののち、キャンプのまわりの空地が、大きな虫と鳥で文字どおり、すきまなくうずめられていったとき、足音がきこえてきました。ふつう、戸外では足音はほとんど(ときには、まったく)きこえません。——もっとも月では、どんな音でも地球より遠くまで伝わるということを忘れてはなりませんが。それ

それは人間でした！

歩くたびに、見あげるような森の木が、まるで人間が細い小枝でもふむように、メリメリポキポキと、踏みくだかれるのでした。さすがの私も、こんどこそ不気味なおそろしさにおそわれました。そして、かわいそうなチーチーのおくびょうにも、同情することができました。ところが、おかしなことにチーチーは、この月世界で出会ったいちばんおそろしい瞬間に、いっこうかくれようともしないのです。チーチーは先生のそばに立って、心をうばわれたように、森の上にそびえ立つ大きな影をじっと見ていました。

どしんどしんと、その者はしだいに近づいてきました。もうそれが何だかまちがいありません。その者は、森のなかか

すから。）でも私には、低い、不きげんそうな、ブツブツいう音しかきこえません。私がポリネシアと同じ方角を見ていると、やがて森の木がゆらゆらとゆれたようでした。そして大きな丸いものが、森の切れ目のところにあらわれました。

もうそろそろ暗くなりかけていました。虫や鳥たちが集まるのに、まる一日かかったということを、そのときふいに私は気がつきました。私たちはできごとに気をとられて、ごはんを食べることも忘れていました。じぶんの目を信じることなど、とうていできるものではありませんでした。先生はきゅうに立ちあがろうとしたので、かわいそうにチーチーを地面の上にほうり出してしまいました。森のこずえの上にあらわれた、大きな丸いものは、ますます大きく高くなりました。それが、ゆらりゆらりとゆれながら、こちらに進んでくると、いっしょに森もゆさゆさゆれました。ちょうどネコが通るときに、草むらがざわめくようなものでした。

私はいまにも先生が何かいい出すかと思いました。いま近づいてくるその者は　何だか、だれだかわかりませんが——とにかく、ものすごく大きなもので、いままで月世界で出会ったほかのものは、これとくらべたら、ほんのちっぽけなものにすぎませんでした。

ポリネシアはまだ木の枝にじっととまって、しめり気の多い晩の南京花火のように、しきりと何やらブツブツピチピチいっていました。

やがて、その者が近づくにつれて、地震のような足音のほかに、別の音がきこえはじめました。その者が

「ごらんなさい！　右のうでを！」

ばかりでした。

先生はじぶんのことばが月の巨人に通じないのを見て、巨人にわかりそうなことばをいろいろならべました。私の思うに、先生ほどたくさんのことばを自由にあやつることのできる人は、むかしからいままでに——おそらくこれからも——ほかにはないでしょう。先生は現在地球で使われていることばや、いま残っている古代のことばなど、さまざまな人間のことばを、つぎつぎとならべてためしました。けれど、どのことばも月の巨人には、さっぱり手答えがありませんでした。それで、こんどは動物語のほうをためしてみると、これはすこし手答えがありました。ところどころに、一つぐらいわか

らすっかり姿をあらわしました。集まって待っていた虫や鳥たちは、通り道をあけました。ふと気がつくと、その者は長い手をぶらりと両がわにたれ、私たちの目のまえにそびえ立っていました。それは人間でした。

ついに私たちは月の巨人に出会ったのです。

「いやはや、なんたることかね！」と叫んで、ポリネシアは、おどろきあきれている私たちの沈黙を破りました。「あんたは、ここでは大したおえらい人かも知れませんがね。だが、いやはや、わたしたちをたずねてくるのに、えらい長くかかったものだね。」

これは、私たちびくびくしながらも、すこぶるまじめにしているときでしたが、ポリネシアがたて板に水を流すようにつまらぬことをいったので、私は思わずクックッ笑いだしてしまいました。そしていったん笑いだしたら、もうどんな大金持にしてやるといわれても、すました顔をしていられなくなりました。

この奇妙な会場には、もはや夕やみがおりていました。私たちのまわりに集まっている虫や鳥の目は、星の光をうけて不気味にかがやいていました。ちょうどネコの目が、ランプの光をうけているようでした。そして私がまた笑いをこらえようと、いっしょけんめいになっていると、私たちをたずねてきた巨人にあいさつするために、ドリトル先生が立ちあがりました。先生のからだは月の巨人にくらべると、お話にならないほど小さく見えました。

「お目にかかれて、嬉しいです。――ほんとに、ようやく。」と先生は、れっきとした上品な英語でいいました。ところが、このていねいなあいさつに、巨人はただ、わけのわからぬ奇妙なゴロゴロいう音をたてる

てきた、あのオーソ・ブラッジです！」

ることばがあるようでした。

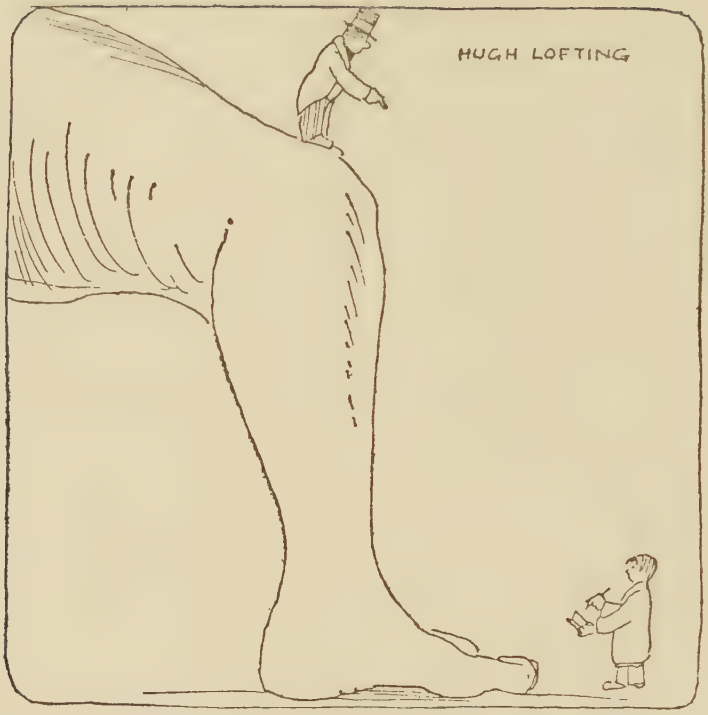
けれど最後に先生が、虫や植物のことばをためしてみると、月の巨人はきゅうに目がさめたように、興味を示しはじめました。チーチーとポリネシアと私は、先生と巨人がたがいに通じることばをさがし出そうと苦心しているのを、じっと見ていました。時間は一分また一分、一時間また一時間とすぎてゆきます。とうとう先生が背中のうしろで私に合図をしましたので、私は先生の口述の用意ができたことに気がつきました。私は地面に取りおとしていたノートと鉛筆を取りあげました。

そして、私が筆記にとりかかろうと思って、ノートのページをめくっていると、チーチーがただならぬ叫び声をあげました。

「ごらんなさい！——右のうでを！——あれを！」

私たちはうす暗がりのなかをすかして見ました。……まさしく、巨人のうでには何かはまっていました。しかし、それはとてもきつく、ほとんど肉にくいこんでしまっているのでした。先生は、そっとそれにさわりました。けれど先生が口をきくまえに、チーチーがまた叫び声をあげました。チーチーの声は、いつもと違った、しわがれた、鋭いささやきとなって、あたりのしずけさを破りました。

「青い石の玉です！——わかりませんか？……からだが大きくなりすぎたので、大きさが合わなくなってしまったんです。けれど、この人は影刻家のオーソ・ブラッジです。あれはオーソが、妖精のピピティーパからもらった腕輪です。先生、この人が、むかしむかしその昔、月のなかったころ、地球から吹きとばされ



「スタビンズ、——おうい、スタビンズ！」

ころに何か巻きつけていました。それは私たちの新発明の着物——森で見つけた、しなやかな木の皮や木の葉でつくった着物——に似たようなものでした。髪は長くて、もじゃもじゃして、肩のあたりまでたれさがっています。先生がならんで立つと、巨人のくるぶしの骨と同じぐらいの高さでした。こんなにはなれていては、巨人は先生がじぶんと話をするのが容易でないと気がついたと見え、手をふって何か合図をしました。すると、私たちのいちばん近くにいた虫どもが、すぐに立ちあがって、ぞろぞろはって向こうへ立ちのきました。化物のような巨人は、地球からのお客様と話をするために、その空いたあとへ腰をおろしました。

20 先生と巨人

「よしよし、チーチー、わかったよ。」と先生は、いそがしくいいました。「待っておいで。どんなことがわかるか、しらべてみるからね。そう興奮してはいかんのだ。」

先生はこういってチーチーをしずめたものの、もう先生自身、とても興奮していました。それも、むりはありません。この毎日、ふしぎなことばかりおこる、気味のわるい世界へきてからというもの、私たちはいたるところで、ただならぬ巨人の足あとや威光を見るだけで、いったい、いつになったらその本人に会えるのだろうと、たえず待ち暮らしていたのですから。その巨人がついに姿をあらわしたのです。

私はじぶんの頭の上に空高くそびえている巨大な人間を見あげました。巨人が片足をちょっとあげると、何人もの人間を、アブラムシのようにつぶすことができそうです。けれどこの巨人も、ここに集まっている虫や鳥たちと同じように、私たちに敵意をもっているとは見えません。ただ、私たちがあまり小さいので、ちょっと困っているようでした。ドリトル先生もチー・チーのいうのをきいて、ちょっとびっくりしたものの、すこしもおそれていませんでした。先生はすぐさま、このふしぎな人間と話をする用意に取りかかりました。そして、こういう実験のときはいつもそうですが、相手のほうもよろこんで力を貸してくれました。

巨人はほとんど着物らしいものを着ていませんでした。ただ、わきの下からももの下あたりまで、胴のと

「じつに不親切きわまるもてなしというべきです。」

ていらっしゃるんだろうね。あんな、なりばかりでっかくて、あいそのわるいやつ、見たことがないよ。——毛虫の知恵も、なさそうじゃないか。それだのに、あのうすのろの、ばかでっかい、食いぶくれが、なんと、じぶんが訪ねてくるのに勝手をして、先生を——いやしくも、医学博士ジョン・ドリトル先生と、それからわれわれを、ぶらぶら待たせておくなんて！　しかも、じぶんのほうからよんでおいてだよ！　だから、わたしも、毒舌を吐かないわけにはいかないのさ。」

「でもねえ、」とチーチーは、うすやみのなかにそびえ立つ影を、じっと見あげていいました。「だけど、考えてごらん。——あの人がどんなに年寄だか、考えて

おかしなことに、これでもう私は、このおとぎ話か悪夢のなかに出てくるような巨人が、すこしもこわくなくなりました。巨人は大きな手をさしのべて、先生を人形みたいに持ちあげて、じぶんのはだかのひざの上にのせました。そこは、私の頭より、すくなくも九メートルは高いところでしたが、先生はそこからさらに巨人のからだをよじのぼって、巨人の肩の上へのぼりました。そこまであがれば、下にいたときよりもずっとうまく巨人と話をすることができるにちがいないのです。先生が背のびをすると、ちょうど巨人の耳までとどきました。やがて先生は、また巨人のひざの上へおりてきて、私を大声でよびました。

「スタビンズ、——おうい、スタビンズ！　ノートを持っているかね？」

「はあい、先生、ポケットのなかに持っています。筆記をはじめますか？」

「たのんだよ。」と先生は、叫び返しました。——ちょうど高い建物の上から、大工の親方が大声に指図をしているようなものでした。「書いてくれ。話はまだよく通じないんだがね、そのまえに、ちょっと前書きを書いておいてもらいたいんだ。いいかね？」

じつのところ、先生は熱心のあまり、いたってたやすく巨人と話ができるように思っていましたが、それはまちがいでした。私は鉛筆を手にして、一時間あまりも待ちかまえていましたが、筆記することばは一つも伝えられてきませんでした。とうとう先生はむこうにむかって、もうすこし大きな客人と親しくなるまで、筆記はのばさなくてはならないと、どなってよこしました。

「ばからしいね！」とポリネシアが、不平そうにいいました。「先生は、なんだってあんな奴に、とりあっ

私はチーチーが、眠そうにこくりこくり頭をたれるのを見ていました。

当な扱いをうけ、一応のめんどうをみてもらえるように、あの男が気をくばるべきではありませんか。——それを、案内人もつけずに食べ物あさりをさせたり、綱をたよりに崖によじのぼらせたりして。じつに不親切きわまるもてなしというべきです。」

「ポリネシア。おまえ、忘れてやしないかね。」と私は、ことばを荒だてないようにいいました。「われわれは、からだこそ小さいが、先生もいわれたように、巨人や月世界の者から見れば、ずいぶんおそろしく見えるかもしれないんだよ。——ちょうど、ぼくたちの目に、あの巨人や月世界のものがこわく見えるのと同じことだ。いくらじぶんでよんだにして

ごらん！　あの人は、月が地球からわかれたときから生きていたんだ！　それは、何万年も何百万年も、まえのことかもしれないんだ！　ほんとにまあ、なんという大した年寄だろう！」

「そうです。けっこう年に不足はないですからね。もちっと、ものがわかっていいはずです。」とオウムは、がみがみといいました。「すくなくも、もちっと行儀作法を心得ていいはずです。からだが、ばかでかくなって、ぶくぶく水ぶくれしたからといって、お客様に、こんな無礼きわまるもてなしする理由、ありませんよ。」

「おい、ポリネシア、もういいじゃないか。」と、私はいいました。「あの人はね、何千年も何万年ものあいだ、ほかの人間と切りはなされていたのだよ。ぼくらは、このことを忘れちゃいけないんだ。それにあの人が、地球にいたときに見た文化にしても、大したものじゃなかっただろう。――大むかしの石器時代のことだからね。そのころの世のなかは、ずいぶん原始的だったにちがいないんだ。むしろぼくは、あの人が数えきれないほど長い年月、つきあう人間もなしに暮らしていたというのなら、あの人がすこしでも人間らしい心をもちつづけているのが、ふしぎなくらいのものだと考えるんだ。ドリトル先生が、あの人となかなか話ができないのも、あたりまえのことなんだ。」

「へえ、トミー・スタビンズ氏、よくごぞんじですね。」と、ポリネシアはいいました。「お話は、なかなか科学的で、高等な議論のようにきこえますね。でもね、それにしたって、わたしたちをここへよびつけたのは、あの大きくなりすぎたうすのろの仕業にちがいないのです。ですから、すくなくとも、わたしたちは相

う朝ごはんの時間ですと叫びました。先生はそれをきくと、私のほうにうなずいて、それから巨人にむかって、いっしょにごはんを食べないかときいているようすでした。私は先生が、それを私たちの大きなお客様に、やすやすとわからせることができたのを見て、おどろきもし、嬉しくも思いました。ことばが通じた証拠に、すぐに月の巨人は、私たちのテーブル掛けにしていた帆布のそばにきて地面に腰をおろし、そこにならべてある食べ物に、とがめるような目を向けました。私たちは巨人に、例のおいしい黄色いヤマイモをすすめました。すると巨人は、はげしく頭をふって、手まねと、うなるような声で、先生に何かいいました。

「ねえ、スタビンズ。」と先生は、しばらくしてからいいました。「巨人は、この黄色いヤマイモが、からだのむやみに大きくなる第一の原因だといっているのだよ。この月世界のものは、すべてのものを大きくする働きをもっているらしい。しかし、この食べ物がいちばんいけないのだそうだ。巨人はわれわれに、もしじぶんのように大きくなりたくなければ、この食べ物はやめたほうがいいとすすめている。あの人は、もうずいぶんまえから、われわれのような寸法にもどりたいと、いろいろ骨おっているらしい。」

「先生、あの人に、このメロンをすすめてごらんになりませんか。」と、チーチーがいいました。

そこで、メロンをすすめると、巨人はよろこんで受けとりました。それからしばらくのあいだ、私たちは静かにしてごはんを食べました。

「先生、巨人のことばの研究のほうは、どんなぐあいですか?」と私は、しばらくしてからききました。

「まず、ぼつぼつというところだね。」と、先生はいいました。「それが、ふしぎなのだ。——とても、おか

も、やっぱり巨人はこわかったのかもしれないよ。おまえはあの人が、びっこをひいているのに気がついたかね？」

「気がつきましたよ。」とポリネシアは、頭をふり立てながらいいました。「あの男は、左足を引きずって、へんな足つきで歩いてました。えへへだ！　そんなことで、きっと先生をここによんだにちがいありませんよ。――リューマチか、足にとげでもさしたんでしょう。それにしてもわからないのは、あの男、どうしてジョン・ドリトル先生のことを知ったかということです。先生が有名だといったって、ここと地球のあいだには、何の連絡もありませんからね。」

先生が月の巨人と話をしようと骨おっているありさまは、見ていてなかなかおもしろいものでした。ふたりが最後にどんなことばを見つけ出すか、まるで私には見当がつきませんでした。

この巨人は長いあいだ人間の仲間と切りはなされていたのですから、どのくらい地球のことばをおぼえていることでしょう？

じつをいえば、その晩はそれ以上のことはわかりませんでした。先生はいつものように、時のたつのも何もかも忘れて実験をつづけていました。私はチーチーが、眠そうに、こくりこくり頭をたれるのをしばらく見ていましたが、そのうちにじぶんも、うとうと眠ってしまいました。

目がさめると、夜があけていました。先生はまだ巨人を相手に、たがいに話を通じさせようといっしょけんめいになっていました。けれど、だいぶ気をよくしているらしいことが、すぐにわかりました。私は、も

21 どうしてオーソ・ブラッジは月世界へきたか

先生はオウムにむかって、いってきかせました。月の巨人は(からだこそ大きいが)われわれをおそろしがっているにちがいない。ちょうどそれは、巨人や月世界のものが、われわれにおそろしく思われるのと同じようなものだ、というのですが、はたしてそれはそのとおりでした。朝ごはんがすんで、いつものとおり私がノートを出して、筆記にとりかかると、まもなくこの巨人は——おそろしそうに見える「会議」の「議長」は——世界一おとなしい人間だということがわかりました。巨人は私たちに、じぶんのからだの上をあちらこちら歩きまわることをゆるしました。そして、みんながこんなにじぶんに興味をもっていることを、心から嬉しがっているように見えました。しかし、先生にとっては、これはべつにおどろくほどのことではありませんでした。先生ははじめから巨人を友だちのように思っていたのです。でも、チーチーや私は、巨人がいまにも私たちを取って食うのではないかと思っていましたので、やっと胸をなでおろしました。

私はいまここに、月の巨人と先生のはじめての会話を、いちいちくわしく書きしるすことはやめます。それはたいへんに話が長くて、そのうえに、言語学や博物学の専門的なことがらにわたっていますので、一般の読者にはあまり興味がないだろうと思われます。でも、その会話のだいたいのことを話してゆくうちに、どんな会話がかわされたか、はっきりさせるために、だいじなところだけ、そのまま書きしるすかもしれま

しい。はじめ、わしは何か人間のことばのような、音声の変化によることばではないだろうかと考えていた。それで何時間も、そういうやりかたで話を通じさせようと骨おってみた。ところが、この方法では、やっと遠い大むかしの、ぼんやりした記憶を、わずかばかりよびおこすことができるにすぎなかった。もちろん、もし地球のことばと何かのつながりが見つかれば、わしは非常におもしろいと思っていた。最後に、虫のことばと植物のことばでためしてみると、あの人はこの二つのことばなら方言にいたるまで、完全に話せることがわかった。わしはだいたいとして、この調査の結果には非常に満足した。巨人のことばを、地球の古代のことばと関連させることはできなかったが、あの人が虫や植物のことばに豊かな知識をもっていることは、わしには大いにありがたいことだからね。」

「あの人は、なぜ先生をここへよんだか、話しましたですか?」と、ポリネシアがたずねました。

「いや、まだ話さん。」と、先生はいいました。「だが、われわれはまだ、やっとはじめたばかりなのだからな。時がくればわかるよ、ねえポリネシア、時がくればね。」

ました。そうです、巨人はうなずいて、もしかしたらじぶんは大むかしの彫刻家、オーソ・ブラッジかもしれぬと答えました。では、その腕輪は？——そうです、これはだれかが……そして巨人の記憶は、それっきりでした。——だれかというのは、だれのことでしょう？——そうです。とにかくじぶんのものになるまえには、だれか女の人がはめていたように思う。だが、そんなことは、どうだってかまわないではないか。大むかしの、遠い遠い昔のことだ。ほかにまだ、どんなことを知りたいか？

一つ、私もききたいことがありました。そのまえの晩、私とチーチーは、巨人のそばでまごついたとき、巨人のバンドに何か丸い平たいものがぶらさがっているのを見つけました。そのときには、暗くて、何だか見わけがつきませんでした。けれど、けさになってよく見ると、それはトナカイの角でつくった丸い板に、弓矢を手にしてひざまずいた少女をほりつけた、じつにみごとな彫刻でした。私は先生に、それについて月の巨人にきいてみたくはないですか、とたずねました。もちろん私たちは、いつかのチーチーの話から、それが何だかだいたいの見当はついていたのです。でも私は、これがきっかけになって、もし巨人が大むかしのことを思い出せば、先生の研究に役立つかもしれないと思っていたのです。私はまた、もし話がうまくゆけば、巨人はその彫刻をゆずるか、何かと取りかえてくれるかもしれないということも、そっとドリトル先生にささやきました。いくら私だって、博物館にならべてある古代の記念物は、素晴らしい値打ちがあるのを知っています。

先生は、まさしくそのことを巨人にたずねました。それは、木の皮でつくった細ひもでバンドにつるして

せん。とにかく、それは重大な会見でした。

まず先生は巨人に、サルのチーチーがおばあさんのサルからきいて、私たちに話してくれた例の物語についてたずねました。これについては、巨人はごくぼんやりした記憶しかないようでした。でも、サルの歴史にいい伝えられているいろんな話をしてきかせると、巨人はときどき心当たりのあるような顔つきをして、ときには、いかにもたしかなように、きっぱりと先生の話を打ち消したり、また、先生の話を認めたりしました。

いま私は、ここで巨人の顔のことをすこし話しておいたほうがよいと思います。月世界の朝の青白い光で見ると、巨人は、かなり利口なものわかりのよさそうな顔をしていました。けれど、案外に年寄くさくはありませんでした。むろん、人の顔つきをことばでいいあらわすのは、なかなかむずかしいものです。野蛮人に似ているというのではありませんが、しかし地球で見るふつうの人間の顔とはなんとなくちがいます。私のかんがえでは、それはたぶんこの巨人が長いあいだ、ひとりぼっちで暮らしていたためでしょう。その顔が動物に似ていることはたしかですが、それでいて荒々しいようなところは一つもありません。ここにもし、一ぴき動物がいるとして、それがじぶんのありったけの力を慈善や人助けのためにささげてきた親切な動物だとしたら、それはおそらく、私がこの朝いっしょにごはんを食べながら、はじめてはっきり見たときの巨人の顔に、いちばん近いものだろうと思います。

ドリトル先生はこの大きなお客様に、虫や植物の奇妙なことばで、やつぎばやにいろいろのことをたずね

なると思いました。植物は、種が多すぎて、どんどんふえます。鳥は、むやみにたまごを生みます。ハチは、わんわんふえてゆきます。いや、もう、ひどいことでした。あなたも、たぶん地球で、そういうありさまをごらんになったでしょう。」

「そうです、そうです、たしかにそのとおりです。」と、先生はいいました。「だが、どうか話をつづけてください。」

「いや、このほかには、話すことはありません。わたくしたちは、『会議』というものをつくって、もう戦争はしないことと、はっきりきめてしまったのです。」

「なるほどね。」と先生は、いいました。「だが、あなたがこのように長生きしているのは、どういうわけでしょう？　月が地球からわかれたのは、だれもわからないほど、大むかしのことです。あなたの年は、地球の人間の寿命にくらべたら、おどろくべきものにちがいありません。」

「それは、むろんそうでしょう。」と、巨人はいいました。「わたくしが、どういうふうにしてここへきたかということは、じぶんでもよくはわからないのです。だが、そんなことは、どちらだってかまわない。とにかく、わたくしはここへきました。そのころの記憶は、ぼんやりしていますが、いや、ちょっと待ってください。そうです、わたくしがはじめて正気づいたときには、いまにも息がつまりそうだったのが思い出されます。空気や、いろんなものが、まるっきりちがいますからね。しかし、わたくしは生きぬいてゆこうと、気を取りなおしました。この心がまえが、わたくしの命を救ったのだと思います。じぶんは生きぬこうと、

ありましたが、巨人はそれを取りあげて、しばらくのあいだじっと見つめました。すると、何やら思い出したふうで、巨人の目が、いっときパッとかがやきました。そして、いじらしいほど不器用な手つきで、それをじっと胸におしあて、その顔には、めずらしい、うっとりしたような表情が浮かびました。先生も私も、これはあまりに、へまなことをやりすぎたと気がついて、もう二度とその問題にはふれませんでした。

そのときには気がつきませんでしたが、あとで私の感心したことは、先生が人扱いのじょうずなことです。先生はこの巨人を、まるで生物学的に分類し、レッテルをはって博物館へ送る新しい標本のように、くわしくしらべあげました。しかし、それでいて、すこしも相手の気をわるくするようなことはありませんでした。

「なるほどね。」と、先生はいいました。「あなたが、石器時代の彫刻家オーソ・ブラッジだということは、これでたしかめられました。あなたは、月がはじめて空にできたとき、地球から吹きとばされた人なのです。ところで、話はべつですが、あの『会議』というのは、どんなものですか？　あなたは会議の議長で、その運営をつかさどっておられるときいています。それは本当ですか？」

巨人は大きな頭をかしげて、ちょうどそのときじぶんのうでに乗っていた、小人のような先生の姿をじっと見つめました。

「会議？」と巨人は、夢みるようにいいました。「ああ、そうです、たしかに、『会議』というものがあります。……わたくしたちは、そういうものをつくらなくてはならなかったのです。ひところは、もうたえず戦争、戦争、戦争ばかりでした。これはなんとか、うまく勢力がつりあうようにしなくては、ひどいさわぎに

わたくしは木の根を食べて命をつなぎました。

世界のガが、パドルビーへやってきて、わしにいっしょにきてくれといった。あのガを使いによこしたのは、わしの察するに、あなただと思うのだがね？」

「いえ、あのガを使いに出したのは、わたくしと、それから『会議』です。」と巨人は、先生のことばをいいなおしました。

「あなたのお名まえが、どうしてわたくしたちの耳にはいったかといいますと、この二つの世界のあいだには、おっしゃるように、めったに連絡がないのですが、それでもごくたまにゆききがあるのです。地球に何か変動がおこって、細かい土や石ころが空高く吹きあげられると、それが地球の引力の外に出て、こんどは月の引力の範囲にはいってくることがありま

かたく決心していました。あのころ、ここは、あの激しくうずをまいていた世界が、やっとおちついたばかりのときで、とても荒れはてたところでした。けれど、地球からいっしょに飛んできた木や草のなごりが、すこしはありました。はじめのうちわたくしは、木の根だのなんだの、あらゆるものを食べて命をつなぎました。もうこれは死ぬよりほかない、と思ったことも一度や二度ではありません。けれど、わたくしは死にませんでした。——生きぬこうとかたく決心していたからです。そして、とうとうわたくしは生きぬきました。しばらくすると植物が生え出して、植物についてきた虫もふえてきました。鳥もふえました。——鳥も、わたくしのように生きぬく決心をしていたのです。こうして新しい世界が、できあがりました。その後わたくしは、じぶんがこの社会の運命を導いてゆくべき者だ、ということをさとりました。そのころは、ほかの動物や植物よりも、すくなくとも、わたくしのほうが進んだ知恵をもっていましたからね。わたくしは、生物の種属と種属があらそいつづけていったら、どんなことになるだろうと考えました。それで『会議』をつくりました。そのときから——思えば、ずいぶん大むかし！——植物と動物はたがいに——その、ごらんのようなありさまになったのです。……それだけの話です。とても簡単なことなのです。」

「いや、よしよし。」と先生は、せきこんでいいました。「そのことはよくわかった。——あなたが、なぜ『会議』をはじめなくてはならなかったか、それはよくわかった。そして、わしの考えでは、それは非常にけっこうなことだったと思う。そのことは、いずれまたあとで話すとして、わしがどうもふしぎでならないことがある。ここと地球は、何の連絡もないのに、あなたがどうしてわしのことを知ったかということだ。月

土のかけらは、月の湖のなかに落ちました。

りに巣をつくっていたカワセミが、いっしょに吹きとばされてきました。そして、地球のかけらがいくつか月の上に落ちてきました。あるものは地面にぶつかってこなごなにくだけ、それに乗っていた動物は——たいていは虫類ですが——死んでしまいました。ところが、このカワセミの乗っていた土のかけらは、月の湖のなかに落ちたのです。」

これはおどろくべき物語ですが、私はじっさいの話にちがいないと思います。さもなければ、どうして先生の名声が月世界まで伝わることができるでしょう。もしカワセミが水鳥でなかったら、月の湖におぼれてしまったにちがいありません。土のかたまりは、落ちたとたんに、

す。そうすると月の引力に引きつけられて、月世界へ落ちてきます。何世紀もまえのことですが、地球で大きなつむじ風か、何かほかの大さわぎがあったとき、灌木や石がものすごい高さに吹きとばされて、地球との連絡を失って、ついに月世界へ落ちてきたことがありました。それがまた、えらいやっかいなことになりました。わたくしたちが、そんなものが落ちてきたとは知らずにいると、その灌木が種をおとして、みるみる野火のようにふえひろがってしまいました。その勢いをおさえるのに、わたくしどもは、たいした苦労をさせられました。」

「それは非常におもしろい。」と先生は、巨人の話を私に通訳するひまに、私がそれをノートに書きとめたかどうか念を押してから、巨人にいいました。「ところでこんどは、あなたが、はじめてわしのうわさをきいてから、わしをよぶことにしたときの話をしてくれないかね。」

「それは、たぶん火山が爆発したときだと思いますが、それがはじまりです。」と、巨人はいいました。「それまで長いあいだ、しずかで何ごともなかった地球で、一つの大きな山のてっぺんが、あるときふいに吹きとばされました。とても大きな、ものすごい爆発で、何トンという土や木や、いろんなものが空に吹きあげられました。そのなかで、月の方角へ吹きとばされたもののうちの、いくらかのものが、とうとう月の引力の範囲にはいって、月に引きよせられました。

そして、むろんこれは、ごぞんじのことと思いますが、土や植物が吹きとばされるときには、たいてい何か動物がいっしょについてゆくものです。この爆発のときには、鳥が――くわしくいうと、山の上の湖のほと

22　どうして月の住人は先生のことを伝えきいたか

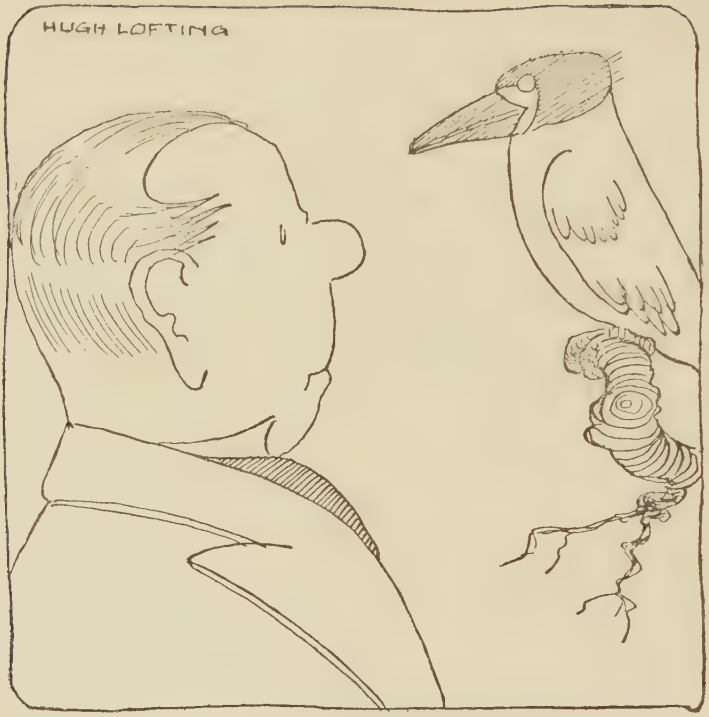
やがて、巨人のいま話したカワセミが（この鳥は月にきてから、「会議」のメンバーに選挙されたものとみえますが）私たちのまえへつれ出されて、先生に紹介されました。カワセミは、じぶんが月へ飛んできたときのことや、この新しい世界になれるまでのことなどについて、いろいろと有益な話をしてくれました。

その話によると、また、月の住人たちにジョン・ドリトル先生のことを話したのは、たしかにこのカワセミであったということです。この鳥は、先生が病気をなおす素晴らしいうでまえをもっておられることや、地球の鳥、獣、魚などのあいだに、先生が評判の高い人だと話したということです。

これもカワセミが紹介されたときにわかったことですが、そのとき私どものまわりに集まっていた大ぜいの鳥や虫たちは、月世界の「会議」のメンバー全部なのでした。もちろん、植物だけは歩くことができないので、そこにはきていませんでした。けれども植物を代表する鳥や虫が出席して、植物の利益が保護されるように、ちゃんと気をくばっていました。

たしかにこの日は、月の住人たちにとって、なみたいていの日ではありませんでした。私たちとカワセミとの会見がおわると、鳥や虫たちがそこかしこに集まって、何かしきりに論じているのが目につきました。それは、ばかさわぎに似た政治的な集会に似ていました。それで先生が巨人にむかって、なぜじぶんをここ

いきなり十五メートルも水にもぐってしまったのですから。けれどカワセミは、すぐ浮かびあがってきて、岸のほうへ飛んでゆきました。それにしても、カワセミが死なずにいたということは、奇蹟に近いことでした。たぶんカワセミは「死の地帯」をものすごいスピードで通りぬけたため、私たちのような特別な呼吸装置がなくても、どうにか窒息をまぬがれたのではないかと思います。



カワセミが、先生に紹介されました。

人は、ほかにはだれもないのです。わたくしたちは、そこで特別会議をひらきまして、地球に使いを送って、あなたをおよびしてくるように決議をしたのです。」

先生は何もいいませんでした。

「お考え願いたいのです。」と巨人は、まえよりもまだいいにくそうな口ぶりで、話をつづけました。「それに、あの使いに行ったガも、ほんとに命がけで出かけてゆきました。わたくしたちのうちで、特別からだの大きな鳥やガやチョウや、そのほかいろいろの虫が集まって、くじを引きました。からだの大きなものでないと、だめですから。それに長い旅だし、非常な耐久力がいるし……。」

巨人は大きな手をひろげて、話に——

へよんだのかと大きな声でいったので、みんな議論するのをよしました。

「とにかく、わしは非常にいそがしい人間だ。」と先生は、さわぎがしずまるのを待っていいました。「わしは、ここへよばれたことを非常に名誉だと思って、よろこんでいる。しかし、るすにしてきた地球のほうにも、しなければならない仕事やつとめがいろいろある。あなたは、何か特別の目的があって、わしをここへよんだのだろうと思う。その用むきを、わしに話してもらえないだろうか。」

おしゃべりずきの「会議」のメンバー一同は、しんとしずまりかえりました。見たところ、大ぜいの鳥や虫がじっとすわって、先生のことばに耳をすましているのは奇妙な光景でした。先生の話は、みんなの注意をひいたばかりでなく、何かめんどうな問題にふれたらしいのです。月の巨人まで、困ったような顔で、もじもじしていました。

「じつのところ、わたくしたちは、どうしても、よいお医者様がほしかったのです。」と巨人は、やっと口をききました。「わたくし自身も、足が痛くて困っています。それに大きな虫たちは　ことにキリギリスたちが――だいぶまえから、ひどいこと、からだのぐあいがわるいのです。わたくしはカワセミの話をきいて、わたくしたちを助けてくださる方は、あなたよりほかにないと思いました。あなたなら――つまりその――みんなが、こんなにあなたのお力をおかりしたがっているのですから、ここまできてくださるのではないかと思ったのです。どうかおっしゃってください。――わたくしたちが、こんなにあなたに信頼する気持になったのを、御迷惑と思っていらっしゃるのではないでしょうか？　この世界に、わたくしたちを助ける

「わたくしは鳥たちに、あなたのなさることを報告させていたのです。」

ちに――それから植物にも――いいつけて、あなたのなさることや人がらについて、いろいろ報告させていたのです。いままでのところは、カワセミの話だけが頼りでした。しかし、あなたが、いくら御自分の世界の生きものに情けぶかくて親切でも、月の住人にも同じような気持をもってくださるとはかぎりませんからね。でも、わたくしがみなさん方を、気持よくお迎えしなかったように見えましたら、まことに申しわけないことでした。けれど、そのへんのことは、お許しいただきたいと思います。なにしろこれは――どうもまるで――はじめてのことなので……。」

「そうとも、そうとも。」と、先生は、

切ないような身ぶりをそえました。先生は巨人を安心させようとして、あわてていいました。

「いや、いうまでもないことだ。」と、先生はいいました。「しかし、わしは——われわれは、よろこんでここへやってきたのだ。わしは地球にいるときには、いつも目のまわるほどいそがしい。だが、なにしろこんどのことは、博物学上でもはじめての、きわめて有望な試みだから、何もかもさしおいて、ここへ飛んできたわけだ。わしは、あなたがたのよこしたガと、ことばがよく通じなかったので、十分に支度をしてくることができなかったがね。しかし、われわれはここにきて、後悔しているなんて思わないでもらいたい。こういう経験は、何ごとにかえても取り逃がしたくないものだ。たしかにわしは、あなたがもうすこし早くわれわれと連絡をとってくれたらと思っている。だが、——わしの思うに、それにはまた、あなたのほうでもいろいろと、さしつかえがあったろう。きっと、あなたはいそがしかったにちがいない。」

「いそがしかった?」と巨人は、あきれたようにいいました。「いや、いそがしいなんてことはありません。ここの生活は、とてものんきで気持がよろしいのです。ときには、のんきすぎると思うこともあるくらいです。ときどき議員たちと会議をして、ときどきまた、国じゅうを見まわって歩くのが——これだけが、わたくしの務めの全部です。なぜもっと早く、あなたにお目にかかりにこなかったかといいますと、正直なところ、わたくしはすこしこわかったのです。なにしろ、ほかの星からたずねてきた人間を迎えるなんて、まったくはじめてのことですから。相手がどんな人間かもわからないし、何をするかもわかりません。それにわたくしは、あなたをしばらくひとりにしておきたかったのです。この数週間のあいだ、わたくしは鳥や虫た

焚きつけの火をスレートのような石の上にのせて持ってゆきました。

るんだね？」

「むろん、できます。」と、巨人はいいました。「月にはおそらく、何十万匹というハチがいるだろうと思います。けれど、わたくしたちはその一つ一つ、苗字と、名まえと家族を知っています。ところで、さっきのお話ですが――そんなわけでして、地球へゆく役目の貧乏くじを引いたのは、ジャマロ・バンブルリリイでした。ジャマロは、スポーツマンのようにいさぎよくて、いったんきまった以上、ちっともぐずぐずいいませんでした。けれど、ほかのものはみんな心配でした。なるほど、いままでにも、ごくたまには地球から月へ生きものがやってきたことがありました。でも、月から地球へ行っ

ドリトル先生月へゆく

いっしょけんめい、巨人に安心させようとしていいました。「どうぞ、それはもういわないでもらいたい。わしはよくわかった。それよりまだ、二つ三つ説明をききたいことがある。一つは、われわれはパドルビーで、あのガがやってきてまもなく、月から煙が立ちのぼるのを見たように思う。これについて、何かお話しねがえるかね？」

「ええ、お話しいたします。」と巨人は、すぐさま答えました。「あれは、わたくしの仕業です。わたくしたちは、非常にガの身の上を案じておりました。まえにも申しましたように、わたくしたちは、ガにあのような危険な仕事をいいつけたので、すまないことをしたと思っていたのです。くじ引きで、最後にしるしのついた札を引きあてたのが、あのジャマロでした。」

「ジャマロ？」と先生は、ちょっと合点のゆかないような顔でいいました。「くじ引きだって？　わしは――その――。」

「だれがゆくかをきめるための、くじ引きです。」と、巨人は説明しました。「わたくし、いま申しましたでしょう。わたくしたちは、くじを引いたのです。ジャマロ・バンブルリリイというガが、くじに当たって、その任務を引きうけることになったのです。」

「おお、そうか。わかった。」と、先生はいいました。「ジャマロ。なるほどな。この国では、虫にも名まえがあるのだな。もっとも、それはしごく当然のことだ。ここでは、虫がこんなに大きくて、国の政治や生活に大きな役割をはたしているのだからね。あなた方は、同じ種類の虫でも、一匹ずつ見わけることができ

ています。」

「だが、どうしてそれに火をつけたのかね？」と、先生はききました。

「摩擦して。」と、巨人はいいました。――「やわらかい木に、かたい木の棒を、キリのようにもみこんで火を出すのです。しかし、ジャングルや、やぶに、火のうつる心配のないところでないといけません。ここはごぞんじのとおり狭い世界ですから、わたくしどもは山火事を非常におそれます。それでわたくしどもは、木も草も生えていない岩の谷間に、ものすごくたくさんの木の皮を積んでおきました。それから、焚きつけの火をスレートのような石の上にのせて持ってゆき、それで焚木の山に火をつけました。そして目をかばうために、すばやく岩かげにかくれました。ものすごい大爆発がおこって、あとで煙がおさまるまで何日も、わたくしどもは咳が出てこまりました。」

たものは、だれひとりありませんでした。わたくしたちはカワセミの話をきいて、地球とはどんなところか、ごくおぼろげにわかっていただけでした。それだけわかるにも、ことばが通じないので、ずいぶん苦労なことでした。カワセミとわたくしたちが、いくらか話が通じるようになるまでには、何日も何週間もかかりました。そんなわけで、わたくしたちはジャマロ・バンブルリリイに、地球へついたらすぐに何か合図をして、ぶじでいることを知らせてくれとたのんでおきました。また、こちらからも返事の合図をすることにしていました。わたくしたちは、ずいぶん心配しながら、待ち暮らしていました。ジャマロはおそらく、この英雄的冒険の途中で、たおれてしまったのではないかとも思いました。けれど、ふとまた、こちらから合図をすれば、ジャマロはみんながじぶんの帰りを待っていると知って、元気づけられるのではないか、という考えが浮かびました。それで、煙の合図を打ちあげたのです。」

「そうだ。」と、先生はいいました。「わしはその合図を見たが、ジャマロは見なかったらしい。だが、いったいどうしてあんな大きな煙の合図をあげることができたのか、それを話してもらいたい。あれは、山のような大きさのものだったにちがいないね。」

「そうです。」と、巨人はいいました。「ジャマロが出発する二十日ぐらいまえから、わたしとからだの大きな鳥や虫たちが、みんなで森へ行って、ジングジングの皮を集めたのです。」

「何を集めたって?」と、先生はききました。

「ジングジングの皮です。」と、巨人はいいました。「ここに生えている木の皮で、とても強い爆発力をもっ

巨人はまゆをよせて、大きな手をひたいにあてました。

「じっさい――もう大むかしのことですから。」と巨人は、つぶやくようにいいました。「まえにも申しましたように、わたくしはもう何度か、あやうく死ぬところでした。最初の二、三カ月間は、命をつなぐ食べ物を手に入れるだけで、せいいっぱいでした。そのうちに食べ物の問題がうまく片づいたので、わたくしは初めてあたりの世界に目を向けました。すると、やはり鳥も虫も、わたくしと同じように難儀をしていることがわかりました。わたくしは月の上を、すみからすみまでさがしてみました。けれどほかには人間のかげも見えません。人間はわたくしひとりきりでした。相手がほしくてたまりませんでした。『よしよしこれからは虫や鳥を研究することにしよう。』と、わたくしはじぶんにいいました。鳥は、わたくしよりもずっと早く、新しい世界になれてきました。わたくしと同じ身の上の鳥たちは、よろこんでわたくしと力をあわせて、おたがいの幸福のためにいっしょに働こうとしているのでした。もちろんわたくしは、生きものを殺さないように気をつけました。それは一つには、殺したくなかったからですが、また一つには、こんなせまい世界で敵をつくりはじめたら、とうてい長く生きのびることができないと、気がついたからです。わたくしは初めから、じぶんも生き、ほかのものも生かすようにつとめてきました。話し相手になる人間が、だれひとりとしていないのですから、わたくしがどんなにひどくさびしい思いをしたか、とうていお話にならないほどでした。そのうちにわたくしは、鳥のことばを研究してみようと思い立ちました。たしかに、鳥にもことばがあります。鳥がさえずるのをきいた人なら、だれでもそのことがわかるでしょう。それから何年もかかって、

23 月世界の王様になった人

この長い会話のあいだじゅう(それは、じゅうぶん一日半かかりましたが)私たちは、くるりに群がる鳥や虫が、偉大なる「会議」の議員だということを、しじゅう思い出させられました。なぜかというに、目のとどかないほどはるか後ろのほうから、たびたび巨人にむかって質問がもち出されました。いろんな疑いやことづてが口づたえに送られてくるたびに、巨人はいそがしそうにそのほうに顔を向けるのでした。そして、ときには先生をうっちゃっておいて、すぐに奇妙な声と身ぶりとで返事をすることもありました。とにかく議員たちが、先生と巨人の会談を、すこしもききもらすまいとしていることはたしかでした。

またドリトル先生のほうは、知りたいことが山のようにあったのですが――はてしなく質問をつづけて、いつおしまいになるともわかりませんでしたので――早く地球へ帰りたい気持はあるのですが――なにしろ、これは地球の人間と月の人間との、はじめての会見ですから、それもむりのないことでした。

「あなたは、おぼえていますか?」と先生は、たずねました。「はじめて月の混乱がおさまったと気がついてから、どういうふうにしてこの新しい世界になれたのだね? われわれは、ここへついたばかりのころには、ずいぶん苦労した。空気がちがう、引力がちがう、音のきこえかたがちがう。あなたは、どんなにして、そこをきりぬけたか、話してくれないかね?」

わたくしは、鳥と短い話をするようになりました。

ただ、こまったことに、あなたが知りたいとおっしゃるのは、これよりまえの時代のことなのです。」

「いや、それは気にしないでよい。」と、先生はいいました。「いまは、これでけっこうだ。それから、あなたのいうその記録というのも、ぜひ見たいから、いずれあとでお願いして見せてもらいたい。」

それから先生は、いろんな問題について、月の巨人に長いあいだ質問をつづけました。(しかし、日付や、時代や、時に関係したことは、注意ぶかく避けて)その質問は、ほとんど虫や鳥の進化についてのことでした。先生は厳しく私のほうに目をくばって、私が残らずその問答をノートに書きこんだかどうか、たしかめ

鳥のことばを研究しました。いっこうに進歩しないので、すっかり力を落としたこともたびたびでした。けれど、最後に――それは、いつごろであったかわからないですが――わたくしは口ぶえをふいて、鳥と短い話をするようになりました。つぎには虫です。このときには鳥が助けてくれました。つぎは植物です。こんどはハチが手つだってくれました。ハチは植物語なら、方言までよく知っています。そんなふうにして……まあ、その……。」

「話をつづけてください。」と、先生はいいました。その声はしずかでおちついていましたが、先生は非常に興味をおぼえているようすでした。

「いや、しかし、こまったことだ。」と巨人は、いらいらしたように溜息をつきました。「こんな大むかしの話になると、時の記憶がまるっきりぼんやりしています。いま考えると、わたくしは生まれたときから、サギやゼラニウムと話をしていたようにさえ思われます。だから、いったいいつのころから、虫や植物と自由に話ができるようになったか、てんで見当がつきません。ただ、植物と話ができるようになるまでには、鳥や虫のときよりは、ずっとずっと長くかかった、ということだけおぼえています。どうもわたくしたちは、時の勘定ということでは、ずいぶん大ざっぱなものなのでして――すくなくとも大むかしのころは、たしかにそうでした。なにしろ、ほかにだいじな用事が山ほどあって、いそがしかったものですから。しかし、近ごろでは――といっても、この千年ほどのことですが――つとめて歴史の記録を残すように心がけています。ですから、そのあいだの大きなできごとなら、かなりたしかな記録をお目にかけることができると思います。

その記録というのは、石のおもてに、絵や記号を使ってほりつけたものでした。

ういう事情のもとで、できるかぎりのくわしい記録をつくりました。わからない部分だの欠けた部分が、ずいぶんたくさんありましたが、それでも非常におもしろい記録ができあがりました。それは月世界の発展の歴史でした。——そこには、はだか一貫で地球からほうり出された人間が、どのようにしてこの大変動に耐えて生きながらえ、ついに新しい国の情けぶかい王様になったかといういきさつが語られています。この巨人はじぶんのことを、ただ「議長」といっているのですが、じっさいはりっぱな王様です。しかも、その支配している国というのは、地球の人間の想像もつかないような素晴らしい国でした。巨人がここまでくるのに、

ました。くたくたに疲れた私は、よくもこう質問することがあるものだと、ただただ、あきれるばかりでした。先生の質問は、たとえば、月の巨人は最初どういうようにして、植物がじぶんと話をして、また協力したがっているのがわかったか？　どんなことから、ハチがミツを吸いにゆく花と話をするのがわかったか？　どんな野菜やくだものが、人間の食物に適しているとわかったか？　どんな方法で、毒にあたらない、栄養になる食べ物を見わけたか？　そのほか、まだまだいろんなことがありました。質問は何時間もつづきました。私はその問答の大部分を、ほとんど誤りなく書きとめたつもりです。けれど会話のおわりごろには、半分眠りながら手を動かしていたにちがいありません。

ただ一つ、このときの記録でこまったのは、いつも日付がわからないことでした。長い年月のあいだ、人間の仲間とはなれて暮らしたので、巨人の心はだんだんに時間というものを考えないようになってしまったと思われます。巨人がとくいげに、これだけは正確に日付がわかっているといった最近の千年間の記録でさえ、それを見せてもらうと、一世紀ぐらいの年代のずれは、いっこうおかまいなしという程度のものでした。

その記録というのは、大きな平たい石のおもてに、絵や記号を使ってほりつけたものでした。そこには大むかしの彫刻家オーソ・ブラッジのうでまえが、なかなかみごとにあらわれていました。彫刻としてみると、それはオーソの傑作、ひざまずいた少女の像にはとうてい及びませんが、そのかわりに、力強さとデザインの美しさがあって、その点で多くの人目をひきそうな作品です。

巨人の記憶にも、ほりつけた歴史にも、年代のあやまりはたくさんありましたが、とにかく、私たちはそ

「でもキリギリスとは、なんたることか！」

ることになったか——もしかしたら何か——と、あきらかに知りたがっているのでした。そのために、議長は、ちょっとのひまもないほどのいそがしさでした。

しまいに先生は、もう一度、巨人のほうを向いていいました。

「さて、それでは、あなたや虫たちは、診察をうけるのに、いつがつごうがよいのかね？　わしはよろこんで諸君のために、できるだけのことをしてあげたいと思っている。つごうがつきしだい、できるだけ早く地球へ帰りたい。」

巨人は返事をするまえに、後ろにひかえている議員たちと話しあいました。しかし、長たらしい議論をしていたところからみると、巨人のもち出した話は、み

どれほどの困難や難儀と戦わなければならなかったか、それを察することのできるのは、おそらく私たちだけではないかと思います。私たちは、巨人よりも、はるかに恵まれた条件と手助けとをもっていながらも、あれほどの苦労をしたのですから。

月の巨人と先生との長い長い会談は、やっとのことで一段落つきました。そこで私が、やれやれと寝ころんで、書きつかれた右手をのばして休めていると、ポリネシアが、よほどまえから腹のなかにたまっていたことを、このときとばかりにしゃべりだしました。

「どうです。」とポリネシアは、まゆをつりあげていいました。「トミー、わたしのいったとおりでしょう。ねえ、リューマチですよ！　先生が、なんのためにはるばるやってきたかといえば、リューマチのため！　それも、月の巨人のほうは、まあそれでもいいとして。あの人は、百人にひとりというくらいの、珍しい人だから。でもキリギリスとは、なんたることか！　まあ、考えてごらんなさい。たかが、わずかばかりのキリギリスの手当てのために、いやしくも、医学博士ジョン・ドリトル先生を何百万キロも（ポリネシアの距離の勘定は、少々いい加減のものでした。）はるばる呼びよせるとは！　わたしは……。」

けれど、ポリネシアの毒舌のつづきは、とくいのスウェーデン語とごちゃまぜになったので、私の耳にはききとれないものになりました。

まもなく先生と巨人にかわって、こんどは「会議」の議員たちが、さかんにおしゃべりをはじめました。大ぜいの議員たちはひとりのこらず、先生と巨人が何を話し、どんなことをきめ、新たにどういう制度をと

24　先生、月世界に診療所をひらく

その晩は、あのおしゃべりのポリネシアでさえ、もうあまりしゃべる元気がないほど疲れていました。それは私たちを非常にはりきらせた会見で、じっくりと休み時間もなしにつづけられたのでした。月の巨人と「会議」の議員たちが引きあげてゆくと、私たちはみんな着物も着かえず、ごはんも食べずに、すぐ眠ってしまいました。たしかにその晩は、たとえ世界じゅうに――いや、月世界に――どんなことがおこっても、私たちの眠りをさますことはできなかったでしょう。

日がさめたときには、ちょうど朝の光がさしはじめているところでした。だれがいちばんさきに目をさましたか、たしかなところはわかりませんが(たぶんドリトル先生でしょうか)、しかし、いちばんさきに寝床を出たのは、この私でした。

ところが、おどろくなかれ！　うすぐらい光のなかに、何百もの、いや何千という大きな虫たちが――それも、のこらず病人が――私たちのキャンプのまわりに集まって、はるばるかれらの病気をなおしにきた小人のようなお医者を、じっと見守っているのでした。その虫たちのなかには、いままで私たちが月世界で一度も会ったこともなく、また月世界にいるとは思いがけないようなものもありました。――まるで村の街道のように長い毛虫は、一ダースもあるような何本もの足が痛風にかかっていました。大きなカブトムシは、

んなから手いたく文句をつけられたようすでした。けれど巨人は、やっと議員たちをなだめて、また先生にむかっていいました。

「ありがとうございます。もしあなたが、おさしつかえなければ、わたくしどもは、あした治療をうけにきたいと思います。とにかく、ここへおいでくださって、ほんとにありがたいことでした。なにしろ、わたくしどもは、からだが大きいので、あまりお手数でなければいいがと思っています。でも、とにかくあなたは、この国の制度や政治を認めてくださったのですから、わたくしどもが非常にこまっているのをお助けくださるつもりなら、すこしは我慢してくださるでしょう。」

「ああ、もちろん、そうです。」と、先生は、すぐさまいいました。「わしは、ほんとによろこんで、助けてあげたいと思っている。わしは、もともと、それが仕事だからね。わしは医者だ。内科の医者なのだ。年をとってからは、博物学の研究のほうをやってはいるが。あした何時ごろからはじめたらいいかね？」

「明け方からお願いします。」と、月の巨人はいいました。こんなに進歩した今日でも、月世界での時間の考えかたは、おかしいほどに原始的です。「わたくしどもは、日の出の時刻に、あなたをお待ちしています。それでは、よい夢をごらんになって、ゆっくりお休みください。」

キリギリスは、不細工なほうたいをまいていました。

先生は、キャンプのまわりの広々とした空地を見わたしました。がらんとして人気もなく、そこには巨人の姿がただひとつ、しょんぼりと森の入り口にうずくまっているだけでした。

「これはしたり。」と先生は、ひとりごとのようにいいました。「わしは、あの人のことを、すっかり忘れていた。それだのに、あの人は、何ひとことといわずに待っていた。あの人は、どう見ても自分勝手な人ではない。だからこそ、この国を治めているのだろう。さっそくわしは、あの人のどこが悪いのか見てやらなければならん。」

ドリトル先生は急ぎ足に空地をよこぎってゆき、そうして巨人に話しかけまし

日の病気で苦しんでいました。三階建ての家くらいもある背のたかいキリギリスは、ぶかっこうなひざやひじに、不細工なほうたいをまいていました。大きな鳥は、さも痛そうに、だらりと片羽をたらしていました。先生のすみかは、またしても診療所に早がわりして——月世界のびっこや、よいよいたちが、のこらず戸口に押しかけてきたのです。

そこで私が先生を起こすと、この偉大な先生は飛び起きて、メロンを二きれ三きれほおばったかと思うと、ハチミツを入れた水といっしょに飲みこんで、それから上着をぬいで仕事にとりかかりました。

いままで長の年月、どこへ行っても、どんなときでも、例の貧弱な黒い小さな袋は、こんな急ぎの手当てのときには忠実に役立ってくれましたが、こんどばかりは、とうてい間にあいません。何よりもさきに、ほうたいが足りなくなりました。チーチーと私は、毛布やシーツを引き裂いて、どしどしほうたいをつくりました。すると、塗り薬がなくなりました。つぎには、ヨジュームや、そのほか消毒薬がなくなりました。しかし先生は、ここにきて月世界の木や草を研究している間に、リューマチにきく植物や、そのほかいろんな薬に使える植物を見つけて試験していました。そこで、すぐにチーチーとホリネシアにいいつけて、入り用な草や木の葉や根をさがしにゆかせました。

何時間も何時間も、先生はわき目もふらずに働きました。患者の長い行列は、いつ果てるともしれないほどでした。けれど、やっと先生は患者の手当てを終わりました。そのとき初めて先生は、月の巨人がほかの患者にみんな、じぶんよりさきに手当てをうけさせたことに気がつきました。もう夕やみの迫るころでした。

それから先生は、この大きな友だちに、いろいろ説明してきかせました。

「なに、ばかな！」と、先生はいいました。「あんな遠くから、ここの話し声はきこえまいよ。」

「月の世界では音が遠くまでひびきます。気をつけなければいけません。」と、オウムが注意しました。

「だが、どうしたのだ！」と、先生はいいました。「あの連中には、われわれがいつかは地球に帰らねばならんことがわかっているはずだ。われわれは、いつまでもここにいるわけにはゆかんのだ。わしは、地球にいろいろと用事がある。これは議長にも、じきじきそういっておいたではないか？　いや、なに、もしあの連中が、わしにぜひここにいてくれというのなら、わしはまだ、しばらくここに

た。巨人は、先生の診察をうけるために、大きな左足をのばしました。先生はその足の上を、まるでハエのようにいそがしくそこかしこ歩きまわって、ほうぼう、つまんだり押したりして診察しました。

「やっぱり痛風だ。」と先生は、しばらくすると、きっぱり診断をくだしました。「しかも、そうとうひどくなっている。ついてはオーソ・ブラッジさん、よくおききなさい。」

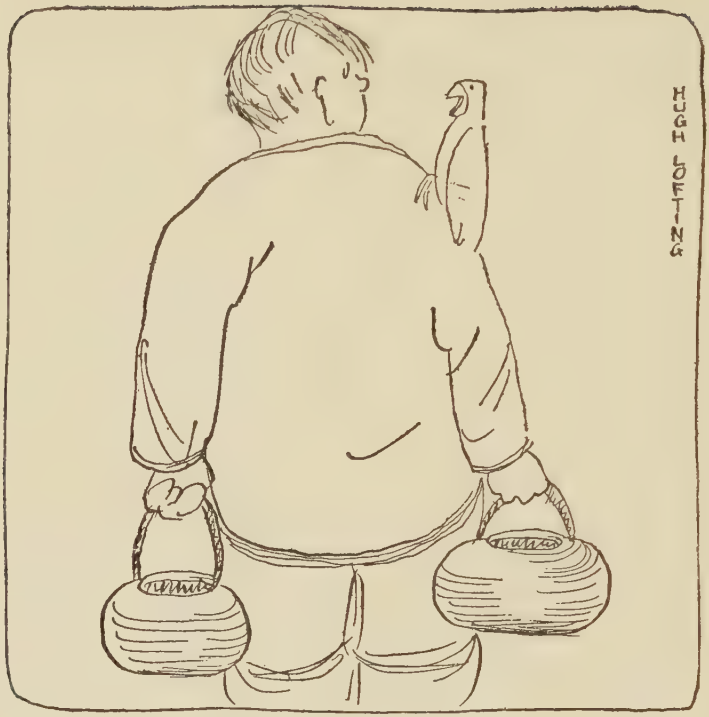
それから先生は、長いことかかって、このとほうもない大きな友だちに、いろいろ説明してきかせました。それは、おもに食餌療法についてのことでしたが、その話のなかには、解剖学とか器官行使とか水腫とか、むずかしいことばがたくさん入れてありました。

先生の説明がおわると、巨人はすくなからずその話に感服したらしいようすでした。気分もさっぱりしたと見え、まえよりずっと元気そうな、希望にみちた顔つきになりました。しまいには、くどくどと先生に礼をのべて、びっこをひきながら、またもや地ひびきをたてて帰ってゆきました。

またしても私たちは、くたくたに疲れて眠くてたまりませんでした。

「もう大丈夫だ。」と先生は、たった一枚きりになった毛布を、ベッドに敷きながらいいました。「だいたいこれで、われわれの仕事はすんだようなものだ。明日か――さもなければ、あさっては――このまま順調にゆけば、パドルビーへ帰る旅に出られるだろう。」

「しーっ！」と、オウムのポリネシアが、ひそひそ声でいいました。「だれか、たちぎきしています。たしかに――あそこの森のかげで。」



「トミー、気をつけるんですよ！」

の入り口までゆけば、そこからもうまっすぐに、いつもの水を汲む場所へゆく道を知っています。

しかし私がまだ、いくらもゆかないうちに、ポリネシアがあとから追いかけてきました。

「トミー、気をつけるんですよ！」とポリネシアは私の肩にとまって、意味ありげにささやきました。

「どうして？」と、私はききました。

「何かおこったの？」

「はっきりしたことは、わからないんですけれど。」と、ポリネシアはいいました。「でも、どうも気になるので、あなたに注意しておきたいと思いました。あのね、きのうは、たくさんの鳥や虫が、

いてもよいと思っている。だが、スタビンズのことがある。スタビンズは、おとうさんおかあさんに、どこへゆくか、いつ帰るか、何もいわずにきたからね。スタビンズのおとうさんおかあさんが、なんと思っているかわからんのだ。きっと、死ぬほど心配してるんではなかろうか。わしは……。」

「しーっ！　しーっ！　しずかにしてくださいませんか。」とポリネシアが、また小声でいいました。「あれがきこえませんか？　だれかたちぎきしています。——そうでなかったら首でもあげます。後生だから、しずかに願います。ここでは壁に耳ありですからね。もう、おやすみなさい！」

私たちは眠くてたまらないところだったので、よろこんでオウムの忠告にしたがいました。そしてまもなく、みんないびきをかきはじめました。

こんどこそ、みんな朝寝坊しました。もう何もする仕事がなかったので、それをいいことに、寝たいだけいつまでも寝ていました。

私たちがのそのそと起きだしたのは、もうお昼近いころでした。しかし、朝ごはんを食べるには、水を汲んでこなければなりません。いつもなら水汲みはチーチーの役目でした。けれど、この日は先生が、いずれまた治療に使う薬草を、チーチーにとらせにゆくことにしていました。それで水汲みの役目は私が引き受けました。

私はヒョウタンでつくったつぼをいくつも持って、森を目あてに出かけました。

私はまえにも一度か二度、やはり臨時に水汲みの仕事を引き受けたことがありました。それでジャングル

なかにはいって、ヒョウタンに水を汲むときまで、そこに巨人のいることには気がつきませんでした。そのとき、ちらっと何か動くものが見えました。それが巨人の足でした。見ると、そこに山のような巨人が、ジャングルの茂みのなかに身をひそめていたのです。巨人は私が見つけたのを知ると、すぐに立ちあがりました。

巨人は悪意のあるような顔はしていませんでした。いつものように、親切そうで、おだやかに、すこし笑いかけていました。けれど私は、たちまち不安になって、なんだかこわくなりました。相手はびっこですが、その足の速さとからだの大きさとを考えると、とても走って逃げだすことはできません。巨人には私のことばがわからないし、私には巨人のいうことがわかりません。そこは深い森の奥の、さびしい場所でした。よべど叫べどその声が、先生の耳にとどくわけはありませんでした。

巨人が何をたくらんでいるか、私は戸惑うひまもありませんでした。巨人は大きな右の手をのばすと、まるで標本にする花でもつむように、私を水のなかからつまみあげました。そして私を持って、森のなかを大またに歩いてゆきました。巨人の一歩は、私が三十分で歩く道のりにも当たりました。けれど巨人はできるだけ、そっと足を地面につけるように気をつけていました。それは雷の落ちるようないつもの足音を、ほかの人にきかせられたり——感づかれたり——しないためだと思われました。

やがて巨人は立ちどまりました。広々した空地にきていたのです。そこには、私たちを地球からつれてきてくれたあのガ——ジャマロ・バンブルリリイが待っていました。月の巨人は私を大きなガの背中にのせま

治療をうけにきたでしょう？　ところがあの連中、あれっきり、ひとりも姿を見せません。なぜだと思います？」

ちょっと話がとぎれました。

「そうだね。」と私は、しばらくしてからいいました。「だけど、あの連中は、ぜひともこなければならないわけでもないだろう。あの連中は治療してもらって、薬をもらったんだもの。このうえまだ、先生にうるさくつきまとわなくたっていいだろう？　患者のなかには、治療してもらったら、もうそれっきり先生のところへこないような人が、すこしぐらいあったってかまわないよ。かえってけっこうじゃないかね？」

「ほんとにねえ。」と、ポリネシアがいいました。「でも、あの連中が、そろいもそろって次の日にこないのは、なんだかくさいですね。あの連中はまだ、すっかり治療してもらったのではないですからね。これには何かわけがありそうです。どうもそういう感じです。それに、月の巨人も姿を見せません。わたしはずいぶんほうぼうさがしました。あの人もまた雲がくれです。ちょうどわたしたちが、ここへきたはじめのころと、そっくりですね。――とにかく、用心なさい。話はこれだけです。わたしは、もう帰らなくてはいけません。しかし、トミー、油断してはいけませんよ。では、ごきげんよう。」

私はオウムの忠告をきいても、なんのことやら、さっぱりわかりませんでした。それで、妙なことをいうと思いながら、水を汲みに池のほうへ歩いてゆきました。

すると、そこに月の巨人がいました。それはなんだかぎこちない鉢合わせのようなものでした。私は水の

25　ふたたびパドルビーへ

私はいままでに、これほどそじぶんの弱さをつくづくと感じたことはありませんでした。巨人はガと話をするあいだ、大きな手で私をガの背中におさえつけていました。私は大声に叫んだらなんとかなるかと思って、口をあけて、せいいっぱいわめきたてました。たちまち巨人の親指がおりてきて、私の顔をおおってしまいました。巨人はガと話すのをやめました。

やがてガの足が動いて飛び立つ用意にとりかかったようでした。もういまとなっては、よしんば先生が私の叫び声をききつけても、かけつけてくるには間にあいません。巨人はおさえていた手をはなし、そして、走りだしたガの背中の上で、私は自由になりました。私の左右には、大きなガの羽が広々とひろがって、空気をきって進みました。私は最後の気違いざたの勇気をふりしぼって、いちもくさんにガの左の羽の上をかけぬけると、ひらりと飛びおりました。すると巨人の腰のあたりに落ちたので、必死になってしがみつきながら、声のかぎり先生の名まえをよびました。巨人は私をひろいあげて、またもやガの背中にのせようとしました。そのとき巨人が、腰にしがみついていた私の手を、むりやり引きはなしたので、そのはずみに何かプツンとちぎれて、私の手のなかに残りました。それは、あの釣にほりつけた傑作、ヒピティーパの肖像でした。巨人は、ものすごい勢いで地上を走っているガの背中に私をのせようとして、夢中になっていました

した。そのとき私の耳にきこえたのは、巨人が何かぎりぎり決着の命令をくだしている低いつぶやき声でした。私は、さらわれてしまったのです。

「トミー、心配しないでね。」とポリネシアが、金切声でいいました。「わたしは、月の巨人が何をたくらんでいたか、うすうす感づいていたんです。あの男が、どこにかくれているかはわからなかったけれど。それで、わたしは先生に注意したんです。先生は、あの連中があなたを送りかえすにちがいないといって、わたしにお別れのことばをことづけてよこしました。――『馬屋にいる年とった、びっこの馬のめんどうをみてやること。果樹を見まわること。そして、心配しないがいい！　わしは大丈夫、なんとか方法を見つけて帰るから。』先生がそうおっしゃってます。『それから煙の信号に気をつけること』」(その声は、しだいにかすかになってゆき、ポリネシアの姿は、はるか後ろのほうに取りのこされてしまいました……。)

「では、ごきげんよう、幸運を祈ります！」

私も大声に叫んで返事をしようとしましたが、ものすごい風の勢いで、ぐっと息を止められてしまいました。「では、ごきげんよう、幸運を祈ります！」――これこそ私が月できいた最後のことばでした。

私は引き裂くような風の勢いをさけるため、ガの羽のなかに深く身をうずめました。そのとき、手をのばしたはずみに何か妙なものにさわりました。それは月のツリガネソウでした。巨人は私を地球へ送りかえすについて、人間に必要なもののことを考えてくれたのです。私はいちばん大きな花を一つ手にとって、いつでも顔にかぶれるように用意をしました。苦しいときが刻々と近づいてきます。まもなく「死の地帯」にさしかかることを私は知っていました。しかし、このほかには、さしあたって何もする必要がないのです。私は、いずれパドルビーの、大きな庭のある小さな家に帰るまで、じっと横になって、くよくよせずにいるこ

ので、たいせつな宝物を私が持って行ったことには気がつきませんでした。

私もそのときには、そんな彫刻のことなど、大して気にもとめていませんでした。私は、先生から引きはなされてしまったので、そのことだけで頭がいっぱいでした。まさしく私は先生から引きはなされ、たったひとり地球へ送りかえされようとしていたのです。ガの走る速力がいっそう加わったとき、私の右の耳もとで、バタバタという羽ばたきの音がきこえました。私はふりむいて見ました。すると、おどろいたことに、ポリネシアがまるでツバメのように飛びながら、追いすがってくるではありませんか！　ポリネシアは早瀬のような勢いで一気にしゃべりだしました。さすがのポリネシアも、このときばかりは毒舌を吐くゆとりがありませんでした。

「トミー！――あなたが、おとうさんおかあさんにだまってきたので、先生がそれを心配されているのを、あの連中は知ったのです。ゆうべ、わたしは先生に、気をおつけなさいといいました。連中はきっとつけたのです。それで、連中はおそれているのです。あなたがここにいれば、先生はあなたを送りとどけるために、地球へ帰ってしまうだろうと思って。それから……。」

ガの足は、もはや地面をはなれ、そしてガの鼻は上へ向けられて、空気のまずれにある雲のこずえを飛びこえる身構えになりました。最初の空中旅行でなじみの、ものすごい突風が吹きだしました。しかも、したいしだいに強まってきます。ポリネシアはいっしょけんめいに羽ばたきして、できるかぎりのスピードで、しばらくのあいだ、この大きな風船のようなガについてきました。

いました。それを見ただけでも、私は心のあたたまる思いがしました。そのときまで私はこの数週間、じぶんがどれほどホームシックにかかっていたか気がつかずにいたのでした。

ガは私をソルスベリーの平原におろしてくれました。私はこの地方のことは知りませんでしたが、ソルスベリー寺院の、とがった塔だけは絵で見おぼえがありました。広々として特徴のある平野の向こうに、その塔が見えたので、私はじぶんがどこにいるのかわかりました。時刻のことははっきりわかりませんが、たしかにそれは夜あけごろであったと思います。

いろいろ勝手のちがう月世界で暮らしたあとのことで、地球の重い空気や引力になれるまでに、そうとうの時間がかかりました。私はすっかり打ちのめされた思いで、身も心も重くガの背中からおりて、あたりの世界を見まわしました。

私の生まれた地球の、そのあたりの平野には、朝霧が立ちのぼっているところでした。高い空から見たときには、地球はいかにもあかるくて、住みごこちのよさそうな、なつかしいところに思われました。けれど近づいて見ると、ちっとも気持のよい場所ではありません。

やがて、いくらか霧が晴れてくると、あまり遠くないところに道路が見えました。その道路をひとりの人が歩いています。仕事に出かけてゆく百姓にちがいありません。その人がまた、なんと小さく見えることでしょう！

まるで一寸法師です。私はきゅうに人なつかしくなって、その人に話しかけたくなりました。それで重い

とにしました。

そこで帰りの旅は、だいたいゆきの旅と似たりよったりでした。こんどは先生といっしょのときよりさびしい旅でしたが、そのかわり、まえの経験からして、人間が安全に旅行できることがわかっているので、気がらくでした。

それにしても、なんというさびしい旅だったでしょう！　さびしいだけでなく、私はどうにも気がとがめてなりませんでした。私は先生を、おいてきてしまったのです。——いままでに、けっして私を見すてたことのない先生を。どんな人であろうと、こまっている友をけっして見すてたことのない先生を。しかし、それはじぶんのせいではないと、私は自分自身に何度もいってきかせました。けれど、もし私がもうすこし抜目がなくて気がきけば、こんなことはおこらなかったろうという考えは、とうてい払いのけることができませんでした。こんなことになって、どうして私はダブダブやジップやほかの連中に、顔をあわせることができるでしょう。どうして私は、ドリトル先生が月に取りのこされたか打ちあけることができるでしょう。

旅は果てしないほど長く思われました。月の巨人は、くだものまで用意しておいてくれたことがわかりました　けれど「死の地帯」に近づくと、私は船酔いのため食欲がなくなって、それっきり旅が終わるまで、ものを食べる気がしませんでした。

とうとう、激しいゆれかたがしだいにおさまったので、私はすわって、あたりを見まわすことができるようになりました。もう地球のすぐ近くまできていました。地球は太陽の光をあびて、楽しそうにかがやいて

さて私は、この地上では雲つくばかりの大男で、からだにはカカシのような着物を着て、ポケットには一文の金もなく――この世の財産といえば、大むかしの彫刻をしたトナカイの角ばかりでした。そこで私は、つくづく考えました。このありさまでは、むろんどこへ行ったって、あの百姓がして見せたのと同じような取り扱いをうけるにきまっているのです。ソルスベリーからパドルビーまでは、そうとうの道のりです。それは私も知っていました。だから馬車賃もいります。食べ物もいります。

私は考えこんだまま、とぼとぼ道を歩いてゆきました。一軒の百姓家が見えました。ベーコンを焼くおいしそうなにおいがただよってきます。私はおなかがすいていました。とにかくきいてみるとしよう。私はその戸口に近づいて、しずかにノックしました。女の人が出てきました。その人は私をひと目見ると、キャッと叫んで、ひしゃりと戸をしめました。すぐそのあと、男の人が窓をあけて、私に鉄砲をつきつけました。

「帰れ、帰れ！」とその男は、どなりました。「さっさと帰れ！　帰らねえと、おまえのきたねえ頭を、ぶっ飛ばすぞ」

私はいったいどうなるのでしょう？　私はいったいそうみじめな気持になって、とぼとぼと道を歩いてゆきました。私はいったい、どうなるのでしょう？　私はだれにも本当のことを打ちあけることができないのです。いったいだれが、私の話を信じてくれるのでしょう？　しかし私は、パドルビーへ帰らなければなりません。それも、じっさい気が進まないのでした。――こんな知らせをもって、どうして先生の家族たちに顔をあわせることができましょう。しかし、とにかく帰らなくてはなりません。たとえ年寄の馬や果樹について、先生の最後のことづけがなかったとし

足を引きずってかけだしました。（私は苦労の多い旅行をしてきたうえに、まだ地球の引力になれていないので、うまく平均がとれないため、酔っぱらいのように、よろめきながら歩きました。）二十歩ほどのところに近づいたとき、私は大声でよびかけました。すると、まったく思いがけないことがおこりました。その人は、私の声をきいて、ふり返ったとたんに、まっさおな顔になりました。そしてウサギのようにいっさんに逃げだして、霧のなかに消えてしまいました。

私はその男が消えて行った道の上に、そのまま棒立ちになりました。そして、いきなり私はじぶんの姿に気がついて、それがまたほかの人にはどんなに見えたかということに気がつきました。私は月世界では終わりのころ、背の高さを計りませんでしたが、地球へ帰るとまもなく計りました。身長が三メートル、腰のまわりが百三十センチありました。からだには木の皮と、木の葉でつくった手製の着物を着ていました。靴ときゃはんは、木の根の繊維でつくったものでした。髪は長くのびて、肩のあたりまでたれさがっていました。

ソルスベリーのさびしい平原で、突然こんな化物に出会った気のどくな百姓が、やにわに逃げだしたのもむりはありません。ふと私はジャマロ・バンブルリリイのことを思い出しました。あのガニ頼んで、先生にことづけのことばを送ろうと思いました。ジャマロに私のことばがわからなくても、手紙を書いて持って行ってもらおうと思いました。私はガをさがして歩きました。けれど、その姿は見えませんでした。霧のために私がまちがった方角をさがしたか、それともジャマロが月へ向けて出発したあとだったか、いずれにしても、ついにわかりませんでした。

しかし、じっさいにその話がもち出されたとき、私はよろこんでそうしてもらうことにしました。私はお金がいり用でした。カカシのような姿でパドルビーへ帰るわけにはゆきません。着物がいるし、馬車賃がいるし、生きてゆくために食べ物がいります。

サーカスの団長は、(私の友だちになったジプシーが私を紹介してくれたとき)まったく気まえのいいところを見せました。その男は私を、一年間の契約でやといたいといいました。けれど、もちろん私はことわりました。すると、では六カ月ならどうかといいました。それでも私は頭をふりました。私はパドルビーへ帰る旅費がもうかりさえすれば、なるべく短いほうがいいという気持でした。団長の熱心な口ぶりからすると、どんなにお金を出しても、どれほどの期間でもかまわないから、ぜひ私をサーカスにやといたいと思っているようでした。いろいろ話しあったすえ一カ月ということに話がきまりました。

そこで着物のことが問題でした。これについては、私は非常に用心ぶかくしていました。初め団長は、私が長い髪のまま、腰布だけをつけて出るのがよかろう、といいました。私に「火星からきた男」といったものを演じさせるつもりなのでした。私は、そんなものにはなりたくないといいました(じつのところ、団長の思いつきは、意外に事実に近かったのですが)。すると、それでは「アルゼンチンの荒野からきた大男のカウボーイ」はどうか、といいました。カウボーイになるには、つばの大きなムギワラ帽子をかぶり、あらい毛織のズボンをはき、ピストルに身をかため、台皿のような歯車のついた拍車をつけるはずです。これもパドルビーへあらわれるときの正装としては、どうもあまり感心できませんでした。

ても――先生のるすのあいだに、先生に代わって、できるだけのことをするのが、私のつとめです。それに、私の両親のこともあります。――気のどくな、おとうさん、おかあさん！　私はじぶんの悲しみに気をとられて、両親のことをすっかり忘れていました。でも、おとうさんおかあさんは、いま私のことを、じぶんのむすこだとわかるでしょうか？

そんなことを考えながら歩いているうちに、私はひょっくり、ジプシーの幌馬車のまえを通りかかりました。ジプシーたちは、道ばたのハリエニシダの茂みのなかに野宿していましたので、私はそのそばに近づくまで気がつきませんでした。

ジプシーたちは朝ごはんの支度をしていたので、おいしそうな料理のにおいが私のすき腹にこたえました。しかし私の出会った人々のうちで、ジプシーだけが私をこわがらなかったのは、むしろふしぎでした。ジプシーたちは幌馬車からぞろぞろ出てくると、私のまわりに集まって、口をあいたまま私を見ていました。しかし、珍しがっているだけで、こわがっているようすはありませんでした。やがてジプシーは私をよびこんで、すわってごはんを食べなさいといってくれました。そして、ジプシーの年とった親分は私に、じぶんたちはこれからこの地方の縁日の市に出かけるところだが、いっしょにきたければ、よろこんでつれて行ってやるといいました。私はありがたくお礼をいいました。みんなから爪はじきされ、のけものにされていた私は、相手にしてくれる人なら、どんな人だろうと、とびつきたいような気持でした。あとでわかったことですが、ジプシーの老人は、私を大男としてサーカスへ（手数料をとって）世話しようというつもりでした。

たくさん印刷させました。私は見世物に出ているあいだ、それに名まえをサインしました。サイン入りの肖像は、一枚三ペンスで売り出されました。私は一日に二回ずつ、口をあけてきいている見物人たちにむかって、このたびの旅行についていろいろ話してきかせました。ただ、その話に、「月」ということばを使わずに、「外国」といっておきました。——たしかに、外国にはちがいないのですから。

やがて、私のつとめの終わる日がきました。契約期間が終わると、三ポンド十五シリングのお金をポケットに入れ、しゃれた洋服を着て、どこでもすきなところへゆける身の上になりました。私はパドルビーのほうへゆく始発の馬車に乗りました。むろん、途中で何度も乗りかえて、そのうえ、あるところでは、パドルビーゆきの馬車に乗りかえるため、一晩とまらなければなりませんでした。

その道すがらも、私はからだがむやみに大きいために、みんなからじろじろ見られました。けれど、もう私はさほど気にかけませんでした。すくなくとも、まえのように変てこな身なりをしてないことが、じぶんにもわかっていましたから。

やがてパドルビーへつくと、私は先生の家へゆくまえに、まず両親の家をたずねることにしました。いちばんいやなことは、ちょっとでもあとまわしにしたい気持のためでした。でも、とにかく、心配している両親を早く安心させなければならないという、一応もっともな理由もありました。

父も母も、あいかわらず元気でしたが——私を見るとたいへんよろこんで、どこへ行って何をしてきたかと、しきりとたずねました。でも、思いのほか、私がだまって家を出たことでは、べつにとがめようとしま

そのうちに、団長がどんなに熱心に私をほしがっているか、だんだんにわかってきましたので、私はじぶんのほうから注文を出しました。

「ねえ、団長さん。」と、私はいいました。「わたしは、うそのものに化けて人まえに出るのは、いやなんです。わたしは科学者で、外国へ探険旅行に行って帰ってきたところです。わたしのからだがこんなに大きくなったのは、わたしが旅行した土地の気候のせいと、そこの食べ物のせいなのです。わたしは、火星人やカウボーイの姿に化けて、見物人をだましたくないのです。どうかわたしに、学者の着るような、黒い上品な洋服をつくってください。それならわたしは、見物人にむかって、ふつうの人間が夢にも思わないような珍しい旅の話をきかせます。でも、一カ月より長い約束はできません。では、これがぎりぎりの条件です。これで手をうちますか?」

それで話がまとまりました。とうとう団長は、私のもち出したすべての条件をいれたのです。私の給料は一日三シリング、契約をはたしたあかつきには、洋服は私のものになること、私だけ使うベッドと駱馬車をもらうこと、そして、私が見世物に出る時間をはっきりきめて、それ以外の時間は、みんな私の自由にしてよい、というような条件でした。

それはたいして苦しい仕事ではありませんでした。私が見世物に出る時間は朝の十時から十二時までと、午後三時から五時までと、晩は八時から十時までででした。仕立屋がきて、私の大きなからだにぴったり合う上品な洋服ができあがりました。床屋がきて、私の髪を刈ってくれました。サーカスの持主は、私の肖像を

最後に私の母は、先生の家に顔を出すのは明日にして、今晩はうちにとまりなさいと、むりやりに私を引きとめました。あんまり疲れているようだから、と母はいうのです。私は、いちばんいやなことをすこしでもあとまわしにしたい気持から、じぶんが疲れていることにきめて、寝床にはいりました。

あくる日、私はネコ肉屋のマシュー・マグを訪ねました。「大きな庭のある小さな家」(ドリトル先生のうち)へ伺わなくてはいけないので、マシューについてきてもらうつもりでした。けれどマシューは私を見ると、やつぎばやに月世界のことや探険旅行について質問をあびせたので、いちいちそれに返事をするのに二時間もかかりました。

とうとう私は先生の家にゆきました。私の手が、門の戸の掛金にさわるかさわらないうちに、私は先生の家族たちに取りかこまれてしまいました。たぶん、油断もすきもないトートーが、私たちが旅に出てからは門番をして、たえず見張りをしていたのでしょう。そして、トートーのひと声が、非常ベルのように、家じゅうの者を表庭によび集めたにちがいありません。みんなは私のからだが大きくなって、しかも身なりまで変わっているのを見て、口々に金切声をあげたり、かれこれはやしたてたりしました。けれど、私が何者かと、すこしでも疑いをもった者はひとりもありませんでした。

やがてみんなは、私がひとりきりで帰ってきたことを知ると、にわかに妙なぐあいにだまりこんでしまいました。私はみんなに取りかこまれて、家のなかにはいると台所へゆきました。そして、先生がいつもすわって、みんなに話をしてきかせた台所の暖炉のそばで、月世界を訪ねた旅の一部始終を話してきかせました。

せんでした。——やがてわかったことですが、父や母は、先生もやはりどこへゆくともなく姿を消されたということをきいたので、それほど心配しなかったのでした。父や母はこんなにまで先生を信頼していたのです。まったく、どんな人でも先生には信頼しています。もし、先生が私をつれてどこかへ行ってしまったとしても、何もかも大丈夫、心配なしと思っていたのです。

もう一つ嬉しかったことは、私がこんなに桁はずれの大きな図体になっていても、父や母が、ひと目で私だとわかってくれたことでした。父や母は、それどころか、私が「大きな人間」になったことは、偉大なシーザーになったのと同じようなものだと、ほこらしくさえ思っているようでした。私は暖炉のまえに腰をかけて、父や母に、月世界の冒険談を、思い出せるかぎりくわしく話してきかせました。

父や母は学問のない人間ですが、私のとほうもない月世界の旅行談を、疑いもあやしみもせずに信じたことは、おもしろいことです。おそらく世界じゅうに、私の話を、あたまから信じるネコ肉屋のマシュー・マグをのぞけば——こんなふうにうけとってくれる人はほかにないでしょう。父や母は、いつ先生は帰ってこられるのかときききました。私はポリネシアからきいたとおり、先生が月の世界を出発されるときには、このつぎにまた煙の合図が打ちあげられることになっている、と答えました。でも、じっさいは、あれほど心をこめて先生の助けを求めている国から、先生がうまく逃げだせるかどうか、たいへん心もとないことでした。私はじぶんが先生を見すてきたことを思うと、気がとがめて、いまにも泣きだすところでした。けれど父も母も、それはおまえの力ではどうにもならなかったことだからといって、なぐさめてくれました。

「ねえトミー、心配してはいけません。先生はお帰りになりますよ。」

私が窓をあけると、ロンドン・スズメのチープサイドが飛びこんできて、台所のテーブルの上に席を取りました。そして、家政婦のダブダブがきれいに「お片づけ」した残りの、パン屑をつまんで食べはじめました。それでトートーが、事のしだいを手短かに話してきかせました。

「へえ、なんだって！」と、大都会からきたスズメはいいました。「そろいもそろって、みんな不景気な顔をして！　ドリトル先生が、月で立往生しちゃったって？——ばかげた話だよ！——とんでもない。しかしね、あの先生は、どこに行ったって、立往生なんかする人じゃありませんよ。ねえダブダブ、あきれたね。あんたは、テーブルの上を掃除するとき、

私の話が終わったとき、みんなはもう涙にかきくれて、ブタのガブガブは大声を出しました。

「もう、ぼくらは先生に会えないんだ！」とガブガブが、泣きわめきました。「やつらが、先生を返すものか。やい、トミー、いったい、あんたは、なんだって先生をおいてきたのだ？」

「こら、しずかにしろ！」と犬のジップが、かみつくようにいいました。「トミーは、しかたがなかったんだよ。さらわれてしまったんだもの。トミーが、そういってきかせたじゃないか？　心配するな。ぼくらは、煙の合図に気をつけることだね。大丈夫、先生は帰っておいでになるさ。いいかね、先生にはポリネシアがついているんだ。」

「そうですよ。」と白ネズミが、キーキー声でいいました。「ポリネシアなら、なんとでもてだてを見つけるでしょう。」

「わたしは、心配なんかしていません。」とアヒルのダブダブが、片方のつばさで涙をふき、ほかの片方のつばさでパン台の上のハエをたたきながら、鼻みずをすすりました。「でも、先生がいらっしゃらないと、とても家のなかがさびしくってね。」

「なにいってるんだ。」と、フクロのトートーが、鼻をつまらせながらいいました。「先生が帰ってこられるのは、あたりまえだ！」

そのとき、窓にノックの音がきこえました。

「チープサイドです。」と、ダブダブがいいました。「トミー、いれてやってくださいな。」

ロフティング，ヒュー
933　ドリトル先生物語全集　8
岩波書店　昭37(1962)
224 p　23 cm　小学3・4年～中学
内容：ドリトル先生月へゆく（井伏鱒二訳）

（参考）　Lofting, Hugh : Dr. Dolittle in the Moon. 1928.

■ドリトル先生月へゆく
ドリトル先生物語全集　8　定価八〇〇円
一九六二年五月十四日　第一刷発行
一九七四年九月三十日　第二五刷発行
訳　者　井伏鱒二
発行者　東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ五
岩波雄二郎
印刷者　長野市中御所二ノ三〇　田中忠
発行所　東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ五
株式会社岩波書店
本文印刷　大日本法令印刷株式会社
製本　株式会社松岳社
表紙・箱・口絵・見返印刷　錦印刷株式会社
©

ろくろく餌をのこしておかないんだね。あんたのところのネズミたちだって、ひょろひょろになっちゃこまるんだぜ。」

とにかく、これで私は、ほっとしました。なつかしい家に帰ったので、嬉しい気持でした。大きなからだのことも時の問題で、ふつうの食べ物を食べていれば、いつかはふつうの大きさにもどることがわかっていました。そうなるまで私は、会いたくない人にはだれにも会わないことにしました。

そんなわけで、私はこの家におちついて、果樹を刈込んだり、馬屋にいる年とった馬に、味気ない思いをさせないように気をつけたりして、なにかと、できるだけ先生の代わりをつとめました。そうして、しだいに月日がたってゆきましたが、くる夜もくる夜も、ジップとトートーと私はふたりずつ外に出て、月の出ているあいだじゅう、見張番をしていました。夜があけると、がっかりして、みじめな気持で家にはいると、よくジップは私のひざに頭をすりよせていうのでした。

「ねえトミー、心配してはいけません。先生はお帰りになりますよ。ポリネシアがついているのですからね。ふたりで、なんとか方法を見つけるでしょう。」

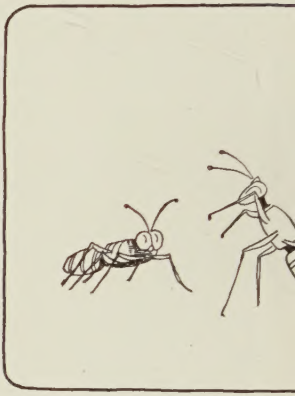
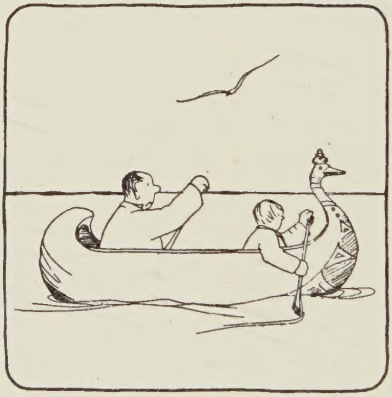
――おわり――

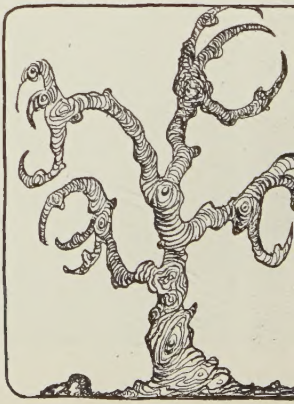
ドリトル先生物語全集　全12巻

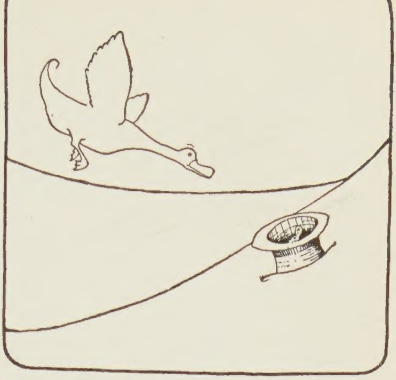
ヒュー・ロフティング作　井伏鱒二訳

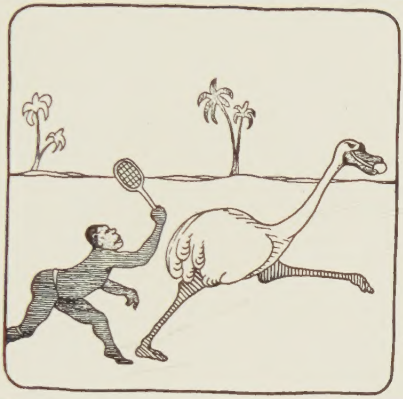
◆菊判・クロース装・上製函入・平均三一〇頁／＊印八〇〇円他は九〇〇円
◆この全集は八歳から八十歳まで、誰にとっても心やわらぐ楽しい物語です。
◆ドリトル・シリーズの全作品を、井伏先生の名訳でおとどけします。
◆読みやすい活字の組み方、ロフティング自身が描いたたくさんの愉快なさし絵、美しい装幀。堅牢な造本は、学校図書館の常備用に、ご家庭の愛蔵書に最適です。

1／ドリトル先生アフリカゆき＊
2／ドリトル先生航海記
3／ドリトル先生の郵便局
4／ドリトル先生のサーカス
5／ドリトル先生の動物園＊
6／ドリトル先生のキャラバン＊
7／ドリトル先生と月からの使い
8／ドリトル先生月へゆく＊
9／ドリトル先生月から帰る＊
10／ドリトル先生と秘密の湖
11／ドリトル先生と緑のカナリア
12／ドリトル先生の楽しい家







10
MILES
TO
OKEMYHOW